第二十八條　組員は其職務に關し何等の名義を以てするも總て警察署長又は分署長の許可を得るにあらされば他より財物又は饗應等を受くることを得ず

第六章　巡檢及演習

第二十九條　警察署長又は分署長は毎年二回（四月十月）に消防組を巡檢し紀律の保持器具の完備等を監査し且規則其他職務と緊要なる條件を訓示することを得

第三十條　警察署長又は分署長は巡檢に際し毎年一回期月を定め消防組を召集し迅速應變の準備及器械運轉の方法等を演習せしむべし、但時宜に依り臨時演習を爲さしむることを得

第三十一條　巡檢及演習は組毎に之を行ふべし、但時宜に依り數組を合併し執行することを得

第七章　警戒

第三十二條　警察署長又は分署長は水火災警戒の必要あるときは組員をして迅速應援の準備を爲さしめ又は其區域内巡邏せしむべし

第八章　信號

第三十三條　水火災を報する爲め消防組設置區域内便宜の場所に火ノ見櫓又は火ノ見階子及半鐘を設備し擔當者を置き信號を報せしむ、但水害にありては大鼓又は盤木を用ゐることを得、信號擔當者は警察署長又は分署長之を指定すべし

第三十四條　火ノ見櫓子の位置構造及其數は警察署長又は分署長之を指定す

第三十五條　信號打方は左の如し

一、連打　○—○—○—○—○—○　近傍又は急激の災害なりと認むるとき

一、三點　○—○—○　○—○—○　區域内

一、二點　○—○　○—○　○—○　區域外と雖も應援又は警防の必要ありと認むるとき

一、一點　○　○　○　鎭靜のとき

第九章　器具

第三十六條　消防組に左の器具を備ふ、其數部に分割したるものは毎部に之を備ふ、但土地の狀況に依り器具增減することを得、火災にありては

一、纏　一、旗　一、鈴又喇叭

一、提灯（組頭は騎馬提灯、小頭以下は高張提灯）　一、小旗（組頭手鳶口に代へて携帶すべきもの）　一、手鳶口（組頭又小頭携帶すべきもの）

一、喞筒（土地の情況に依り龍吐水を以て代ふることを得）　一、大桶　一、小桶又は布袋

一、楷子　一、刺股　一、引綱

一、鳶口　一、斧　一、鋸

水防にありては

一、旗　一、高張提灯　一、提灯（組頭は騎馬提灯小頭以下は高張提灯）
一、通船並屬具　一、通船旗及鈴又喇叭　一、船燈
一、斧　一、鋸　一、鍬
一、鎌　一、大槌　一、俵
一、菰　一、麻綱　一、藁繩

第三十七條　警察署長又は分署長第三十六條に掲くる消防器具の員數を定め又は種類を增減せんとするときは之を指定すべし

第三十八條　消防器具は總て組頭又は小頭に於て之を保留すべし其の携帶すべき器具に限り組員に貸與することあるべし

第三十九條　器具の修繕若くは新調を要するときは組頭より警察署長又は分署長に申出づべし、警察署長又は分署長は市參事會又は町村町會に移牒して之を爲さしむべし

第四十條　消防器具の置場は設置區域内に其數部を分割したるものは每部に設置す、其位置及構造は警察署長又は分署長之を指定す

第四十一條　通船定繫場は區域内便宜の地に設置す、其位置は警察署長又は分署長之を指定す

第十章　被服

第四十二條　組員に左の被服を給與す
一、頭巾
一、半纏

第四十三條　被服は保存期限を定めず實用に堪ふる限り之を使用せしむ、但辭職したるときは還納すべし

第四十四條　被服の新調又は補修を要するときは第三十九條の例に依る

第四十五條　組頭は警察署長又は分署長の許可を受けたる洋服及帽子を着することを得

第十一章　徽章

第四十六條　消防組の旗及提灯の徽章左の如し
一、旗及高張提灯は其上部に幅三寸の黑色及部名を記載す
一、組頭及小頭用の提灯は其の上部に幅三寸の黑色及赤色の模樣各一條を附し其下に組名及部名を記載す
一、組頭及小頭用の提灯は其の上部に幅一寸の黑色及赤色の模樣各一條を附し其下に組名及部名を記載す
一、組頭及小頭用の提灯は其上部に幅一寸の黑色及赤色の横線各一條を附し前面に組名及部名を

記し其側に職名を附記すべし

一、消防手用の提灯は其上部に幅一寸の赤色横線一條を附し前面に組名及部名を記し其側に消防手の三字を附記す

一、組頭の小旗は白地にして横は一尺八寸縦一尺一寸竿の長さ三尺とす。旗の上端一寸五分を下り て横に幅一寸黒線一條更に五分を距て幅一寸赤線一條を附し其下に組名職名を記す

第四十七條　組員の服章左の如し

一、半纏には總て背部及襟に白字を以て組名、及部名を記し尚ほ襟に職名を記す、組頭は肩に幅一寸五分赤線二條小頭は同線一條を附す

組頭に於て洋服を用ゐるときは袖に幅一一寸三分の赤色横線各一條を附す。組頭洋服に用ひる外套の袖に幅三分の赤線一條を附す

第十二章　給與

第四十八條　組員に職務年當死傷手當を給與するときは警察署長又は分署長は左の内に於て之を定む、但手當を給する場合と雖も消防手に限り給與せさることあるべし

一、職務手當

年手當　組頭金二十圓以内　小頭金十圓以内　消防手金三圓以内

出揚手當　組頭一日金三十錢以内　小頭金二十錢以内　消防手金十五錢以内

一、死傷手當

祭祀料　金十圓以内

遺族扶助料　金七十圓以内

廢疾扶助料　終身不具となり自用を弁ずる能はさるもの金五十圓以内
終身不具となるも自用を弁し得るもの金三十圓以内

療治料　一日金五十錢以内、但場合に依り實費を給することあるべし

第四十九條　出場手當は水火災及び巡邏又は演習其他警察官の指揮に依り召集せし場合に限り給與す、但巡檢の場合は給與せす

第五十條　死傷手當は職務の爲め死傷したる場合は一時限り給與す

第五十一條　職務手當死傷手當の支給方法は警察署長又は分署長に於て之を定む

第五十二條　出場手當の外蠟燭代及辯當料を支給するときは警察署長又は分署長之を定むべし、但現物を以て支給することを得

第十三章　賞與

第五十三條　消防組若くは部又は組員にして職務上左の各項に該當する者は賞與することあるべし

一、家屋密接の場所より出火したるも他に延焼せしめす若くは烈風の際大火に至らしめす特別功

労ある者

二、堤防の破壊せんとするとき若くは家屋橋梁の流失せんとするを防止し特別功労ある者
三、危險を冒して防禦に從事し其職分を全ふしたる者
四、出火せんとするを直に消止め其他消防上特別功労ある者
五、緊要なる場所の防禦に盡力し特別功労ある者
六、率先他に超へ現場に働け付けたる組又は部

第五十四條　賞與を分ちて左の三種とす
一、賞狀
二、金員

第十四條　懲戒

第五十四條　懲戒を分ちて左の四種とす
一、譴責　二、停職　三、停給　四、謹責
停職は一箇年以内、停給は年手當十二分の三以内とす

第五十六條　組員にして左の諸件を犯したる者は其情狀の輕重を量り第五十五條に依り處分す
一、消防組に關する諸規則又は警察官若くは組頭小頭の指揮命令に違背したる者

二、勤務中は勿論平常他人に對し强迫がましき擧動又は傲慢粗暴の所爲ある者
三、職務に怠慢又は勤務中濫りに進退を爲したる者
四、他組の妨害を爲したる者
五、喧嘩口論を爲したる者
六、濫りに建造物を破壞したる者
七、濫りに消防器具を毀損したる者

第五十七條　組頭小頭の懲戒は警部長消防手の懲戒は警察署長又は分署長之を行ふ

附則

第五十八條　此細則施行前に調製したる旗提灯被服にして此細則第四十六條第四十七條に適せざるものと雖も使用に堪ふるものは假りに之を用ゐることを得
尙ほ同時に施行細則取扱手續も規定され次に入り細を穿ち所謂水も洩らさぬ施設を見るに至つた。

第三節　消防組設置區域

明治二十七年五月十八日富山縣令第三十五號を以て消防組設置區域及其人員、別表の如く定め即日之れを施行した。

消防組名稱	消防組設置區域	消防組定員	部別	小頭及消防手配置
富山消防組	富山市一圓	三百十九人 內 組頭一人 小頭十八人 消防手三百人	第一部 第二部 第三部 第四部 第五部 第六部	小頭三人 消防手五十人 同 同 同 同 同
東岩瀨消防組	上新川郡 東岩瀨町一圓	內 組頭一人 小頭三人 消防手四十六人		上
滑川消防組	上新川郡 滑川町一圓	內 組頭一人 小頭四人 消防手七十五人		上
東水橋消防組	上新川郡 東水橋町一圓	內 組頭一人 小頭三人 消防手四十六人		上
西水橋消防組	上新川郡 西水橋町一圓	內 組頭一人 小頭三人 消防手三十人		上
上市消防組	上新川郡 上市町一圓	內 組頭一人 小頭四人 消防手四十六人		上

魚津消防組	下新川郡 魚津町一圓	內 組頭一人 小頭六人 消防手百二十人	第一部 第二部 第三部	小頭二人 消防手四十人 上 上
三日市消防組	下新川郡 三日市町一圓	內 組頭一人 小頭二人 消防手三十七人		
入善消防組	下新川郡 入善町一圓	內 組頭一人 小頭二人 消防手三十人		
泊消防組	下新川郡 泊町一圓	內 組頭一人 小頭三人 消防手四十六人		
生地消防組	下新川郡 生地町一圓	內 組頭一人 小頭三人 消防手四十六人		
八尾消防組	婦負郡 八尾町一圓	內 組頭一人 小頭三人 消防手五十七人		
四方消防組	婦負郡 四方町一圓			

高岡消防組　高岡市一圓　二百十一人　第一部　小頭二人　消防手四十人
新湊消防組　射水郡新湊町一圓　内組頭一人小頭十人消防手二百人　第二部　同　同
小杉消防組　射水郡小杉町一圓　内組頭一人小頭三人消防手四十六人　第三部　同　同
伏木消防組　射水郡伏木町一圓　内組頭一人小頭三人消防手四十六人　第四部　同　同
大門消防組　射水郡大門町一圓　内組頭一人小頭二人消防手百二十七人　第五部　同　同
氷見消防組　射水郡氷見町一圓　内組頭一人小頭六人消防手百二十人　第一部　小頭二人　消防手四十人
出町消防組　礪波郡出町一圓　内組頭一人小頭三人消防手四十六人　第二部　同　同
井波消防組　礪波郡井波町一圓　内組頭一人小頭三人消防手四十六人　第三部　小頭三人　消防手六十人
福野消防組　礪波郡福野町一圓　内組頭一人小頭二人消防手三十八人　第一部　小頭同　消防手同
城端消防組　礪波郡城端町一圓　内組頭一人小頭三人消防手四十六人　第二部　同　同
石動消防組　礪波郡石動町一圓　内組頭一人小頭四人消防手七十五人　第一部　小頭二人　消防手四十人
福岡消防組　礪波郡福岡町一圓　内組頭一人小頭二人消防手三十七人　第二部　同　同
福光消防組　礪波郡福光町一圓　内組頭一人小頭三人消防手四十六人　第三部　同　同
戸出消防組　礪波郡戸出町　内組頭一人小頭二人消防手三十七人

第四節　關東の大火

明治二十八年四月二十四日富山市上リ立町より出火し二百餘戸を燒いた。富山警察署の調査によれば

明治二十八年四月二十四日午前零時二十分上リ立町四十二番地書籍商福田榮太郎（清明堂）より出火、南風強く忽ち大火となり同町及東西仲間町各一部と北新町全部燒失す。同午前三時三十分鎭火、此の類燒家屋二百戸なり。清水町貸座敷營業者の多くは明治二十八年以前北新町に居りしも同年四月大火に罹りたる爲め同年八月十一日縣令第六十三號を以て免許地を削除せられ同時に現在地を指定したるものなり。

第四章　縣下消防の劃期的進歩

第一節　井波城端の大火

明治三十一年井波町大字北川村字桑谷彥市より失火し、折柄の烈風にて戸數二百一戸を燒失し、其被害額も八万二千餘圓に上つた。同日午後三時四十分、城端町笹田藤一郎方より出火し、折惡しく南風烈しく、戸數二百八十二戸、棟數三百二十四に延燒し、同日午後十時鎭火し、人畜に死傷な

かつたが、此被害金額十八萬圓に上つた。近寄りたる兩町の大火が、同日に起つたと云ふことは、本縣では前後未だ嘗て見ざる所で、其慘狀目も當てられず、殊に城端町の如きは、消防組全部井波町大火の應援に赴いた留守中に出火したこととて、町民の狼狽極度に達し、ポンプ數臺は操縱者もなく、徒らに灰燼に附するの已むなきに至つた。城端消防組も、井波の活動を止め、狼狽して歸町したが、消防の手筈を失ひ、頗る困惑を極めた。　天皇皇后兩陛下罹災民の困難を憫然に思召され金五百圓御下賜になつた。石坂郡長の訓示に云ふ。

東礪波郡訓示第六六號　井波町、城端町役場

去月十五日井波町及城端町出火、罹災民困難の趣憫然に被思召　天皇皇后兩陛下より金五百圓目下救恤の補助に充つる爲め御下賜の旨宮內大臣より通牒有之旨を以て　聖恩の御旨趣罹災民に貫徹候樣其筋より訓達有之候に付右の趣罹災者へ篤と懇諭せらるべし

明治三十一年五月　富山縣東礪波郡長　石坂專之介

尙ほ東西兩本願寺より金八十圓を寄贈した。兩町は此意外の慘事あつて以來他町の應援には三分の一位の員數を限り出動することゝ定めた。

第二節　富山の大火

明治三十二年八月十二日午前零時五十分富山市中野新町石油卸商桑田安左衞門方より出火、時偶々南風猛烈、非常の大火となり、午前九時頃漸く鎭火した。當時市の面積は七十五万六千七百五十七坪で燒失區域の坪數は實に三十一万八百六十八坪の多きに達し、全燒戸數四千六百九十七、半燒九、潰家三十六、燒失土藏八十三、燒失家屋の坪數は十二万六千坪に上り罹災の各町孰れも大に慘狀を極めた。富山縣廳、共進會場、市役所、病院、高等小學校、八人、五番、中野新町の各小學校商業學校及び日枝神社、東西雨別院並に十二、四十七の兩銀行、取引所等皆烏有に歸し、殊に市の中心たる繁華の地は大半燒失した。

災後の市内は荒野に髣髴たる箇處多く落莫譬ふるに物なく、罹災者中幼を抱き、老を擁して、灰塵の中に彷徨せる窮民其數を知らず。數日間焚出米の救助を受けたもの、三千三百五十餘人に及び其後現米支給を受けた窮民は、三百五十餘名であつた。

又此大火に罹り、議會主正前時代に鑄造せられた報時鐘は、燒け損じて、復た用を爲さゞることゝなつた。富山市では去る十八年以來、再三大火に罹り、其創痍未だ癒へざるに、復た今回の大火に罹り、獨り罹災者のみならず、市民全體の窮厄を來たし、大に市の發展を沮止し富力を減耗した。富山縣廳も亦燒失したので、總曲輪師範學校内に假廳舍を開設した。同月十三日清野内務書記官火災實況視察として來富し、同月十五日　天皇皇后兩陛下より、火災御救恤金として同市へ金六千五

百圓御下賜あらせられた。同日午後市會議員及び市參事會員は市役所假事務所なる總曲輪小學校樓上に集合して協議會を開き左の各項を決議した。

一、市區改正を爲すこと

一、市區改正の爲め調査委員を設け市參事會員、市會議員市公民中より選任すること

一、市區改正規定案を十七日の市會に提出すること

一、遊廓櫻木町を郊外へ移轉せしむること

一、右の希望を達せんが爲め市會議長及市長は知事を訪問すること

一、關西府縣聯合共進會は是非明年既定の日に富山市に於て開設すること

一、右に付市會議長及市長は知事を訪問することゝ

一、富山警察署は今回の大火に際し、殆ど活動の効なく、警察ありてなきが如き有樣であつたので一々其失を數へ、十七日の市會に不信任問題を提出すること

一、富山警察の失錯を擧げ、十七日の市會に發表し更に委員を設けて當該監督廳へ建議すること

同年同月十七日富山市會を開き警察の無能を責め、市區改正調査の件を決議した。同十八日清野内務書記官罹災地調査を終へて歸廳した、同十九日侍從片岡利和火災の實況視察として來富し、詳細視察を遂げ翌二十日歸京した。同二十一日關野善次郎、入江直友、井上政寛、崔炎昌保等晉起し、

火災善後會を組織し、水道敷設の件等を研究議議した。同二十四日富山市會に於ける市區改正調査委員會にて防火的に市區の改正をなすこと、市の體裁を善美ならしむる爲め、道幅を廣め、道路の屈曲を矯むること等を決議した。が、市區改正は爾後幾多の故障を生じ僅かに其幾部を遂行するに過ぎなかつた。同二十五日富山縣廳を梅澤町大法寺内へ移轉し同日より事務を取扱つた。同二十八日罹災窮民焚出米及び救助料並に小屋掛等の代金一万五千圓を富山縣より支出した。同三十日富山市役所は罹災後總曲輪尋常小學校内に於て事務を執つて居たが、本日より梅澤町眞興寺へ移轉した。同九月三日富山市役所に於て、市參事會員及び市會議員を招集し、市區改正に關する秘密會を開いた。同八日　天皇皇后兩陛下より曩に罹災者へ御救恤金御下賜ありしに付、市川市長は御禮の爲め上京した。同二十二日富山市役所に於て罹災民家族等の調査完結したから御救恤金を始め有志の義捐金を戸數に四歩、人口に六歩の割合を以て配與することに定めた。越へて三十三年十二月二十二日火災後の經營費に供する爲め富山市公債二十万圓を發行した。（富山市史）

同大火災を機とし市内越前町國道より富山縣廳に至る道路の一部は中央の車道を延長四十三間、幅員六十七尺五寸（内兩側溝幅一尺五寸）に兩側の人道を延長八十七間八分、幅員十八尺に、又越前町國道より覺中町に至る道路は延長五十間、幅員二十四尺に取擴め前者は明治三十四年八月九日、後者は同三十五年三月八日竣工を告げ之れが縣費支出額は工費及敷地收用費を通じて六千六百四十

五圓八十八錢九厘であつた（縣土木課調査）

同三十二年の大火に遊廓櫻木町焼失したのを機とし、八月廿五日縣令第五十號を以て貸座敷免許地を削除し、更に同年九月一日縣令第九十二號を以て愛宕村に指定した。

第三節　高岡の大火

同三十三年六月二十七日に高岡市に大火があつた。同日午後一時二十分と云ふ眞晝中二番町桶職伊藤和助方より失火し、折柄烈しき西風の爲め見る見る大火となり、三千六百餘戸を灰燼にした。其類焼家屋被害は

一、延焼町村數	三十六町（淺分一村）	
一、全焼家屋	三千五百八十九戸	
一、半焼家屋	二十五戸	
一、全潰家	三十戸	
一、土藏全焼	六十一棟	
一、土藏半焼	二十七棟	
一、納屋	六十一棟	

一、神社　關野神社　射水神社　二
一、寺院（内譯略す）　十七
一、官衙　市役所　稅務署　警察署　郵便局　電信局　五
一、銀行及會社　十三
一、人畜（燒死者　七）（負傷者四六）　五十三
一、燒失建坪數（人口一万九百六十五人）　七万四百三十四坪
一、燒失區域坪數（同市面積五十五万〇百九十八坪）　三十三万千二百六十六坪
一、損害價格　百六十四万二千七百五十八圓
一、商業資本金高燒失（資本平均二百圓と見積り）　七十二萬四千圓
參照（明治三十二年十二月現在戶數七千五百四十戶　人口三万千四百六十六人）
一、火災保險支拂額（内譯畧す）　二十五万三千五百五十圓
に及び、高岡開市以來未曾有の慘狀言舌に悉くし難し。避難所は各寺院九ヶ所に設け罹災貧民百八

十五戶（男四百〇二人、女四百三十一人）に對し焚出米を施與した。
同年七月四日　天皇皇后兩陛下より救助金四千圓御下賜になり、同月八日勅使として日根野侍從
火災地視察の爲め來縣せられた。
去月二十七日其市火災の趣愼然に被思召　天皇皇后兩陛下より金四千圓下賜候條此旨罹災民に示
し　天恩の優渥なるを感戴せしむべし

第四節　蒸汽ポンプ始めて備はる

三十一年井波城端の大火、三十二年富山市の大火、三十三年高岡市大火があり、罹災市町民は言
はずもがな、縣民は近年祝融氏に見舞はるゝを戰慄し、僅々兩三年間に幾百万の財寶と幾多の生
とを灰燼に歸せしめ、富力著しく減耗したのを痛歎し有らゆる努力を拂つても火災と戰はざるべか
らずと做し、何れも火災を撲滅せんとするの精神に燃え、一面には警火思想を高潮すると共に一朝
有事に際しては、優秀な機械器具の充實を圖り、奮鬪努力決死的の對火戰を必要とするに至つた。
是に於て高岡市の大火を見た三十三年の十二月二十一日、富山縣に於て始めて巨費を投じて蒸汽
ポンプ一臺を購入し、熟練なる操縱者を警視廳より招聘し、更らに之れを數十の警官消防手に傳習
することになつた。是れ本縣に於ける蒸汽ポンプの創設であつて、頓に消防界に一大躍進を喚起し

た。之れが後ちに富山市へ無償下附になつたので、引續き同市では尚ほ一臺を新調し威力を添え、殆ど大火を絶滅せんとする効果を擧げた。同三十六年に至り、高岡市にも之に倣つて、一臺の蒸汽ポンプを新調し、兩市の消防をして、頓に發達せしむるに至つた。

蒸汽ポンプの最も早く吾が國に入つたのは明治三年東京に於て、いろは四十八組の內十二組を廢し、三十六組としたときであつて、英國製のものであつたが、當時は技術的思想が無く、道路も不完全であつた爲め、これを利用すること出來ず。消防夫の外、海軍機關兵等を屈入れてれて、使用したが、意の如くならず、蒸汽ポンプはそのまゝとなり、腕用ポンプの時代となつた歷史もある。

第五節　行啓警備と軍事後援

公設消防組設置以來十年も經ざるに其の規律訓練殆んど軍隊的に行屆き其の職務たる火防水防は勿論各種の災禍を小にし生命財寶を保護した事實頗る多く尚ほ日清日露戰役當時の如き軍夫の募集や恤兵献金等の後援等に至つては卒先して之に當つて居る事例も乏しくない。富山市の長谷川庄藏の如き出町の佐藤豊助の如き東水橋の相澤勘次郎の如き消防を以て生命とせる人々は献身的に組員中の有志を語らひ陰に後援事業に力を盡くして居る。

明治四十二年九月東宮殿下(大正天皇)北陸に行啓あらせられ富山市に滯在あらせらた。當時山村

水廓の隅々に至るまで其の御英姿を拜せんと富山市最も雜踏を極め殆んど人の山を築かんばかりであつた。富山市の消防組を始めとして縣下各消防組は悉く警備の補助に當り規律嚴正にして一步も間を容るゝ餘地なきまでに遺漏なく御警戒申し上ぐることを得たのは克く警察當局の職責を盡くしたるによると雖も一面各消防組の功勞は沒却すべからざるものがある。

明治より大正に至つては時代の推移と共に消防組施行綱則並取扱規則などに大改正もあり時々規則の改訂などもあつた。各消防組も順次公設に變じ各競ふて機械器具を充實し組員の人格向上に意を配はるに至りたるを以て明治の末期に當つては富山縣の消防は全國に其名聲嘖々たるに至つた。

鷹仁兵衛後慶墟と化せ
る帝都の委を仰ぎ見て
汝や知る都は野邊の夕雲雀
あがるを見ても落つる涙は

飯尾彦左衛門

第五編　大正昭和時代

第一章　大火漸く跡を潜む

第一節　大正昭和の概観

明治の末期に至りて消防に關する制度次第に完備し、機械器具が世運の進歩に伴つて大いに促進して來たので、其對火威力も大に加はり、昔日の如き大火は殆ど復之を見るを得ざることとなつた。加ふるに歴代の當局者孰れも銳意火災根絶の根本策を講究し有らゆる方法を採つて之を善用したことも其一原因の一つであらう。易言すれば家屋制限規則を厲行し從來の板葺家屋を瓦葺に變せしめ防火壁に留意したことの如き自然市民の警火豫防心を喚起し、道路を擴め、用水路を通し、貯水池を設備したのは言はずもがな精銳なる機械器具の發明せらるゝ毎に巨費を投じ競ふて之を具備するに至つたからである。

豈唯施設のみならむ四圍の狀況も文化の進歩を共に昔日と面目を異にするやうになつた。卽ち電氣事業が明治三十年頃より頻りに發展して今では都市都邑は愚ろか僻遠な山村にまで電燈完備普及するに至つたから出火原因を少なからず減少せしめて居る。斯く雨々相俟つて殆ど幾千幾何といふ

火災が跡を絶つに至つたのは注目に値するが、火災は尙一年數百回に及び未だ其の減却しないのは誠に以て遺憾である。故に此期に於ては先づ防火といふより豫防に重きを置く傾向となり、婦人消防隊や少年消防隊など相踵いで組織せられ、各町村にあつては青年團自警團が消防組に補助加勢すると云ふ趨勢になつて來た。之と同時に機械に於てもガソリンポンプや自動車ポンプの如き迅速にして精銳なる器具が次第に增加するに至つた。是亦見逃すことの出來ない火災漸減の一大原因であらう。

第二節　ガソリンポンプ現る

今や消防界の最も効力を發揮し居れるは瓦斯倫ポンプで之が購入の魁をしたのは大正三年二月富山市にて一臺を購入し總曲輪の第五部に備付けたのを嚆矢とする。同ポンプは同年に始めて横濱市に輸入せられ次で名古屋市に購入し富山市引續き購入するに至つたので新銳の機械器具の發見せらるゝ毎に逸早く之を設備することを怠らないのは本縣消防界の特色と謂つて宜い。此機に於て世界防火機の變遷と現在我國消防機械を左に揭ぐる。

世界防火機の變遷

都市の發達と、科學の進歩とに伴ひ、その火災に對する消防機も亦幾たびか著しい變遷の跡を示して居る。

東西何れにあつても、始めて用られたのは、所謂龍吐水の類で、人力によりて水を高樓高所に注ぎ、之によりてその炎上を防止せむとする一種のポンプであつた。

次で發明されたのは、稍自然力を利用せる一種の手押ポンプであつたが、何れも未だ腕力使用の域を脫せず、明治八年、佛國より始めて我國に輸入せられた當時の「新式ポンプ」も亦畢竟この種のもので、從來の英國式よりは、稍進歩せるものであつた。

「大英百科辭典」や米國「消防年鑑」の識す所によれば、蒸汽ポンプを發明したのは一千七百三十七年で、その發明者は、米國の銃砲鍛冶ジヤコブ、タッキなる一勞働者であつた。

このポンプ一たび發明せらるゝや、諸國は爭ふて何れも之を試驗し、斷へずその改善進歩をはかつて居たが、米國は一千八百五十一年に至つて新に一臺を備へつけ英國も之に倣つて同七十八年之を採用し、我國に輸入せられたのは、實に明治十七年の秋であつた。

この蒸氣のポンプが、諸國に使用せられたのは可なり長い期間で、之を牽引せる馬匹の撰擇、訓練も亦極めて行屆いたものであつた。

が、蒸汽力の發明が、東西の產業界を革新し、所謂產業革命なる者の一大動機となつた如く、東

西の消防界も、亦ガソリンなる新動力の發明によりて、こゝに全く其方法も器具も一變するに至つた。

由來諸國の消防機は、殆皆馬匹を使用し、其力によりて之を運搬して居たが、其訓練使用極めて困難で、ことに雜踏せる火事場の附近にありては、之を制御すること、決して容易の業ではなかつた。

故に諸國は何れも其改善と研究とを怠らなかつたが、ガソリンによる動力の使用一たび發明せらるゝや、英國は一千九百五年全く其馬匹と之による消火機とを廢止してガソリンを用ゐ、米國亦一千九百十年前後を以て其方法、機具を一新し、今や東西の諸國何れもガソリンの動力によらざるもの殆ど之なきに至つた。

この間にありて獨逸は唯り自國獨創の電氣力を利用し、大戰前既に全くこの電氣力を用ゐて居たが、電氣動力は、自動車の速力、疾走距離その他の關係について幾多の支障を來し、その實用理想の如くならざるを以て、晩近その電氣動力を廢止し、之に代ふるにベンヂンによる動力を以てするに至つた。

我國の消防機械

我國において、始めてガソリンポプを使用したのは、大正三年横濱市に於ける英國製『メリーウエザ』、名古屋市に於ける獨逸製『ベンツ』であつた。その後東京市は、大正六年に至つて米國製『ラフランス』を使用し、ガソリン動力機は、爾來益々全國に使用せられつゝあるが、我國の地勢、建築の工合、道路街衢の關係などこの動力をして充分に其威力を發揮せしむるに適せず、從つて山間僻阪の地にありては、今尚不便を忍むで、手動ポンプを使用しつゝある者甚だ尠くない。

今試に昭和元年の調査を見むか、全國に於けるガソリンポンプ自動車數は三百四十四臺で、蒸汽ポンプは三百四十八臺。ガソリンポンプは二千五百六十八臺。爾來年々ガソリンポンプの充實を見つゝあるが、その數歐米諸國のそれに及ばざる、甚だ遠いのは、我國民の甚だ遺憾とする所である。

第二章　大災害と消防組の活躍

第一節　東岩瀬驛の惨事

縣下各消防組は防火水防に對し無論其の職責を完ふし居ることは縣民の齊しく知る所であるが尚汽車事故や降雪浪害其他特異な災害に際し敢死的行爲を以て災害の範圍を少なからしめ人命財寶の保護を遂げた事を列擧すれば殆んど際限なき程て、縣民は現在の消防組に對し多大の尊敬を拂ひ居れるは寧ろ當然の事である。今近來看る所の大災害に活躍した二三を掲ぐる。

大正二年十月十七日午前四時東岩瀬驛に於て上り客車と下り貨車とが驛構内に停車するに當り其の信號係の過失に依り機關車を本線外に停車し上り臨時客車を待受けゐた所へ、信州善光寺參詣團員を乘車せる列車が構内に進行し來り本線外に在る貨物機關車と正面衝突し客車二輛顚覆破壞し福井縣南條郡湯ノ尾村岸宗吉が引卒せる團體員中卽死者二十一名重輕傷者六十八名の多きに達する一大椿事を惹起した。此の事起るや否や急遽警鐘を亂打して東岩瀬消防組を初として大村消防組及附近各役場各種團體は警察官指揮の下に必死の努力を傾注して死體の始末から重輕傷者の手當に當つて義俠消防の名を發揮した。

第二節　大正三年の水害

大正三年八月十二日縣下一帶の大暴風雨があり神通川常願寺川庄川小矢部川最も多く出水し就中神通川は支流井田川熊野川等は前古無比の氾濫を來たし富山警察管内のみにても七千六百五十一戸の浸水流失家屋五十二戸。井田川の上流野積川室牧川久婦須川等出水甚だしく奔流恰も瀧の如く八尾警察管下最も慘狀を極め同署管下のみの溺死人八十五人の多きに及び山崩れの爲め人畜家屋を併せ押渡されたもの四十一戸に及び浸水倒潰數知れず隨て堤防の破壞したる所數十ケ處田地畠の流沒も甚だ多く上新川郡も常願寺川熊野川の氾濫により新庄町附近最も害多く大澤野村發電所も流沒の

爲め富山市を始め同電燈區域は十數日間に亘り暗夜に等しく慘憺名狀すべからざる程であつた。富山八尾大久保新庄東岩瀬四方其他各消防組は必死に水防に當つた。就中富山市の如きは古來水防に經驗あるを以て激流を物ともせず人命の救助に當り、或は橋梁流失の防禦に當る等殆ど身命を賭して義勇消防の名に背かざる行動を爲し幾分災害を少なからしめた功績がある。

第三節　魚津角川橋の椿事

大正五年六月十一日魚津角川鐵橋にて汽車顚覆客車河流へ墜落した椿事があり、死者十三人重輕傷二十數名を出した。當時も警鐘を亂打し先づ消防組の出動を見たが組員は其の跡始末から救護に從事し其の處置宜しきを得たので組の名譽を發揚した。

第四節　新湊沖漁船の救助

大正十年九月二十六日、日本海一帶に亘り大旋風起り殊に富山灣中の新湊沖合は山の如き高波怒濤襲來し當時沖合に出漁中の漁船約四十艘乘組員約三百名は一時に引揚げんとせしも櫓擢の力及ばず激しく數里の沖合へ押し流され約三十艘の乘組員二百餘名は四方東岩瀬邊きは魚津石田生地沖合に漂ひ船中より振ひ落され溺死するもの多數に及び新湊海岸一帶には家族親戚等總出となり慟哭の

聲顚る悲痛を極めた。此の慘禍を目擊せる新湊消防組頭木林五郎平は斷然立つて之れが救助を敢行せんと手早く身仕度を整ひ中伏木に馳せて水運丸(發動機船)を出し自ら指揮して怒れる高波を物ともせず富山灣内を駈廻り半死狀態にある伊勢呂松次郎外十七名を救助し午後四時一先づ引揚げた。尙ほ漁民家族等は第二回救助船の出動を希ふもの多さも怒濤を恐れて進んで出動するものなく何れも逡巡の狀態であつた。當時の新湊署長は大に發憤し直に伏木港に馳せ間宮船長中原他一に交渉し之れが指揮に小頭野上三次郎を充て第二の救助船を出動せしめたるに之れ亦富山灣内を一週し荒木伊造外四十名を救助して歸港した。此の災害に死者二十五名行方不明の漁船十三艘に達した。當時勇敢なる消防組がなかつたならば悉く水底に葬られたであろう。新湊漁民は今に至り消防組を大に德として居る。縣知事も同組に對し特別の功勞を賞した。

第五節　輜重兵第九大隊の遭難

大正十一年十一月十日金澤輜重兵第九大隊は岐阜縣飛騨山中より城端町に向け行軍の途中同日午後八時過ぎ東礪波郡上平村細島皆葺間の通稱細島橋に差蒐りし際時恰も暗夜の風雹强く寒氣と空腹の爲め兵士も自然先途を急ぎ第一中隊の大部分が通過し終りたる頃より次第に間隔密接し長サ三十間の橋上に馬十三頭人員十五名の荷重となりたるより中央部に於ける馬匹の一部は橋體の動搖に驚

き狂亂せしにより動搖激甚を加へ之れが爲め橋上に在りし馬匹は一時に驚愕狂動した爲め右岸の線止め（該橋は釣橋）たりし長サ九尺二尺角の花崗石柱（土中六尺埋沒）上下共一時に引拔かれ橋體は中央部に於て約二十尺墜下し左岸橋詰より十二間、二間、六間の四箇處に於て切斷し橋上の人馬諸共庄川の激流に墜落死傷するの慘事が出來した。

當日城端署に於て午後十時頃急報あり巡査部長は直ちに巡査を隨へ現場に急行し村民は警鐘を亂打し、上平、平、城端各消防組員及青年會員、在鄕軍人分會員の非常出場を求め、一面警察部へ急報の結果警察部長土木課長の出張となり翌十一日午後十時大隊本部に到着、十二日早朝實地踏査し善後策を講じた。當時死者兵士七名、村民二名（道案內）、軍馬七頭、負傷者五名で消防組員は必死の活動を爲して其の跡始末救護に當つた。庄川は激流なりし爲め死體搜査に關し約六ケ月を要し漸く之れを收容し、出場各消防組は縣警察部長を始め第九師團より其の功勞に對し感謝狀を受けた。

第六章　消防義會の設立

消防思想が漸次高潮し當局者も鋭意公設消防設置を奬勵した結果。大正八年十月の調査にて組數八一、組頭八一、部長五六、小頭二六五、消防手四、八五七を算するに至り現今に比すれば半數だにも達しないが頗る進歩したものと言はなければならぬ。消防員は常に危險の場所に出入し身命を

賭する職責たるに拘はらず待遇は之れに比して其當を得ず有事の際には非常に歡待せられ一朝事去れば世間に閑却せらるゝ實狀なしとせず之れ消防界の最も遺憾なる事とし一面消防精神を涵養し技術の熟達を圖り能率を增進し以て緩急に應せなければならぬ必要より消防義會設立の議が起つた。是より先縣下の郡市には個々別々に義會を設けて幾分の寄與を爲しつゝあつたが、大正七八年に至り縣下統一して權威と實力ある義會創立すべく大正八年十一年創立委員會を開くに至つた。同委員の顏觸れは

富山	長谷川庄藏	古里	若林重信	高岡	菅池岩吉
新湊	八島八郎	大久保	高見甚之助	伏木	麥谷十平
東岩瀨	犬島六左衛門	氷見	市井理三郎	滑川	早川久之丈
窪	陸田秀太郎	上市	平井一見	出町	小幡基
魚津	木下清太郎	青島	野島安太郎	三日市	柳川平吉
石動	淺香誠太郎	八尾	橋爪藤吉	戸出	吉田次郎八

にて義會規則を協議し五万圓の基本金を寄附金を以て積立つることを議した。而して各郡市割當額も左の如く定めた。

寄附金割當表

（一戸平均二十九錢一厘二毛）

郡市名	戸數割當	査定額
富山市	—	壹〇、〇〇〇圓

高岡市	三、〇七六、〇五一、五毛	七、〇〇〇	
上新川郡	四、一七四、六八三、〇	三、一〇〇	
中新川郡	五、三四六、六九二、四	四、二〇〇	
下新川郡	三、五八三、八七三、七	五、三〇〇	
婦負郡	四、七四五、六九一、八	三、六〇〇	
射水郡	三、〇一二、五七四、六	四、七五〇	
氷見郡	四、四四七、二二九、八	三、〇〇〇	
東礪波郡	四、六一三、二〇三、八	四、四五〇	
西礪波郡	三三、〇〇〇、〇〇〇、六	四、六〇〇	
計		五〇、〇〇〇	

かくて幹部會委員會等を開くこと十數回に及び越えて大正九年六月六日富山縣會議事堂に於て第一回總會及び紀念講演會を開いた。當日縣外よりも數多の來賓あり殊に消防界の權威である松井茂博士が講演に當られ縣下消防界の還良數百名悉く來會し頗る盛況を極めた。當日總裁に推された東園知事、會長に推された佐藤警察部長の告辭式辭を以て同會の如何に消防界に切要なりしかを窺知することが出來る。

東園總裁告辭

災厄の恐るべきは言を俟たず、一度祝融氏勢を逞し雨師風伯の狂ふ所とならむか巨万の富も忽ちにして消失し貴重の人命を喪ひ產業を毀廢し民業の生活上救ふべからざる傷痍を印すべし、之が

禍害を輕減するは單り一身一家の保護に止まらず誠に國家消長に關すと言ふべし、我縣の狀態を觀るに每年火災の爲に失ふ所少くとも二十万圓多きは數百万圓に達し水災の害亦之に倍蓰す、今や戰後の經營は大に國力の充實を圖るを急務とすべき時に際り之等の損害を防禦すべき消防組の活動を望むや更に切なるものあり、今次有志の後援を得て富山縣消防義會を設立し消防事業の發達を研究し併て消防員の災厄を共濟する等斯業の爲貢獻せんとするは余の大に欣懷とする所なり然れども凡そ創業は易く守成は難し、希くは更に會員の努力と有志諸君の援助とに依り所期の目的を達成せむことを望む、本日創業式を擧ぐるに際し一言以て告辭とす

大正九年六月六日

富山縣消防義會

總裁　東園基光

會長式辭

富山縣消防義會の組織成れるは本縣消防の爲に更に發展の一新紀元を畫せるものにして大に祝福する所なり、今茲に各位の來臨を辱し斯る盛況を以て創立式を擧ぐるに至れるは實に我縣消防界の光榮にして誠歡に堪へざる所余は茲に滿腔の謝意を表す

由來本縣は火災多く每年出火度數は三百内外を算し時に大火となりて非常の慘事を見たること尠

しとせず、彼の明治三十二年の富山市の大火、翌三十三年高岡市の大火の如き殆ど全市を焦土に歸し之を聞くだに慄然たるものあり、故に消防の事業は縣下産業の發達人命財産の保護上最も緊要にして一日も緩ふすべからず、只近時家屋の改造、消防器具の充實等に依り幸に大火を免れたりと雖も尚昨八年中に於て出火度數二百七十八燒失損害價額四十六万餘圓を示せり、加之世運の進歩と人事の複雜は勢ひ此種災害を頻發すべき傾向を有するは已むを得ざる所にして轉た寒心に堪へざるものあり、而して直接之が防禦の任に當る消防員は常に危險の場所に出入し身命を賭して奮闘せざるべからざるのみならず消防技術の研究は一日も之を怠るべからず、故に之等消防の一朝災厄に遭遇したるとき、之の共濟の方法を講じ一面消防精神を涵養し技術の發達、能率の増進を圖るに極めて必要なるを以て夙に各郡市に消防義會設立せられ之が目的を達せんことを期せり、然れども各郡市に分立するときは其團體の力微弱にして爲すべき事業も亦自ら限りあり、此に於て之を統一する議屢起りたりと雖も各其沿革と事情とに制せられ容易に併合行はれず數次關係者の會合を重ねたる結果、大正七年六月創立委員を設けられ之が進行を圖り、客年十二月愈創立の計畫熟し更に基本金を募集し本會の規模を大にし其の活動を期せり、爾來縣下各方面の援助を得、內は消防幹部の熱誠なる努力と外は有志各位の懇篤なる同情とに依り豫期の如く本會の創立を見るに至る

本會の事業は會則の定むるが如く消防發達に關し今後大に爲す所あらんとす尚に之れ縣下消防界の爲慶賀措く能はざる所なり、本會目的の達成に關しては自今拮据精勵負託に背かざらむことを期すと雖も本日來臨各位の援助に俟つ所亦甚だ多し、余は此機會を利用して本會の創立に盡力せられたる消防員其他の勞を謝し併せて有志各位の同情とに對し深厚なる謝意を表し葉辭を連ねて式辭とす

大正九年六月六日

富山縣消防義會

會長　佐藤復三

當時郡市消防義會の基本金は二万九千四百九圓(內二万圓は富山市)に達して居たが悉く縣消防義會財産の下に統一せられた。是に於て消防事業が益々改善發達を見るに至つた。

第四章　本縣少年消防隊

秩序整然、運用その宜しきを得たる我富山縣の消防設備が、名實共に全國の模範たるべきもの甚だ尠くないのは、識者の齊しく認めて、何れも疑はない所であるが、その中にありて、まづ第一に擧ぐべきものは、恐らく消防義會の設立(大正九年六月)と共に、縣下の消防團體を統一し、『火の

用心」なる一大標語の下に、普く消防の家庭化を圖り、さらに進むで之を縣下の小學校に及ぼし、大正十年以來、着々「少年消防隊」の設立、並に其發達を助長しつゝあるの一事であらう。

少年消防隊組織の趣旨

大正十年五月二十六日、時の本縣警察部長は縣下の各警察署長に對し、左の如き通牒を發した。

本縣に於ける公設消防は、近時著しく發達を遂げ、器械器具亦長足の進歩をなせるは、甚だ喜ぶべき現象也。然れども他方出火度數も亦增加し、その年々の損害額決して鮮少ならず。出火度數の漸增は、人口の增加と文化の發達に伴ひ、止むを得ざる現象なりと云ひ得べきも、その出火原因は主として各自の不注意に基くものにして、卽ち一般民衆が未だ自治的なる公設の精神を理解することの淺く、猶自衛相警の念に乏しきものと言はざる可からず。

實に家庭に於ける火に對する些末の注意は、能て縣下數百万圓の損害を未然に防遏するを得む。少年は潑剌たる智識欲、運動欲の所有者なり、之をして公設消防の眞義を理解せしめ、その指導宜しきを得むか、彼等の研究的、運動的欲望を充しつゝ不言裡に自衛相警の念を喚起し、直接その家庭の災厄を豫防し、延いて大なる自治的觀念を養成するを得べし。若し夫れ指導者自らの功を急ぐことなく、克く彼等の心理を洞察して、强制を加ふることなく、少年獨自立場に於て、火を研究し、消防の事を學び、自らの家、自らの鄕土、自らの學校を守らむか、社會共榮の實を結ぶの日期

して待つべく、これ少年消防隊の組織を慫慂する所以也。

少年消防隊規程

第一條　本隊は×町村少年消防隊と稱し事務所を×町村尋常(高等)小學校内に置く

第二條　本隊は兒童をして公設消防を理解せしめ、併せて自衛相警の精神を涵養するを以て目的とす

第三條　本隊員は、尋常科六年以上の男兒を以て組織す。但し左の各項の一に該當する者は本隊に加へず

一、身體虛弱にして、其服務に堪へざる者

二、特別の事情の爲、保護者より加入免除を願ひ出でたる者

第四條　本隊員にして、左の各項の一に該當するときは、當然其資格を失ふ

一、小學校を卒業したる時

二、退學又は轉校したる時

三、重治の見込なき疾病

第五條　本隊に左の役員を置く

總裁一名、副總裁一名、指導者若干名、顧問若干名、隊長一名、支部長若干名

第六條　役員の選出方法及其任務左の如し

一、總裁は本町村小學校長之に當り、消防組頭と協議の上隊務一切を總理す

二、副總裁は、本町村小學校男敎員中より總裁之を任命し、總裁を補佐し、及び必要に應じて其代理に任ず

三、顧問は本町村長助役學務委員警察官、消防組頭之に當り、隊員の敎育、訓練及諸般の設備施設に關する協議に應ず

四、指導員は小學校職員、及消防組頭の推薦に依る組員とす

五、隊長は隊員の互選に基き、總裁之を命じ、支部の事務を處理し、任期を一ヶ年とす

六、支部長は、支部隊員の互選に基き支部の事務を處理し、隊長會長となる

第七條　本隊は必要に應じ、總會及支部長會を開き、隊の事業に就き協議す。總會及支部長會は總裁之を招集し、隊長會長となる

第八條　本隊の事業左の如し

一、公設消防の趣旨を研究理解せしむること

二、隊員相互協力して警戒の訓練を爲すこと

三、その學校内に於ける消防、避難、救急等に關する研究訓練をなすこと

四、火災原因其他に關する研究をなし、其豫防思想を涵養すること

五、消防機械器具に關する研究訓練をなすこと

六、防火宣傳のポスター圖案、標語の作成をなし、廣く一般の宣傳にも從事すること

七、其他本隊の目的を達する上に於て、必要と認むる事項

第九條　本隊所屬の機械被服は各隊員之が保管の責に任じ、時々點檢を行ひ、使用後は直に掃除整頓し、總裁の檢閲を受け、小學校に藏置す

第十條　敎練及訓練を左の如く定む

第十一條　定期演習は本市町村消防組と同時に行ひ、豫備演習は隨時之を行ふ

第十二條　本隊は火災豫防を本體とするも、總裁に於て必要とする時は、火災現場に出動することあるべし

第十三條　本隊に左の帳簿を備へ、總裁之を保管す

一、沿革史　二、隊員名簿　三、役員名簿　四、機械器具臺帳　五、火災豫防巡察簿等

第十四條　本隊の經費は、寄附金及補助金を之に充つるものとす

第五章　消防協會支部設置と消防展覽會

富山縣消防議會に於ては昭和三年四月十四日より五日間富山縣會議事堂(第一會場)敎育會館(第二會場)として消防展覽會を開催した。而して十四日には午前十時より富山市新富座を會場とし消防義會第八回總會並大日本消防協會富山縣支部發會式を擧行した。又衣服町通りに於て消防標章檢閲同上新富座に於て消防展覽會委員會をも開き消防組頭會議懇親會をも開催し、餘興にも警火に因める高砂、吳羽踊、小原節の新調を撰むだ。

四月十五日午前八時より神通グランドに於て第二部消防組及少年消防隊聯合檢閲を爲した。參加するもの富山市及び上新川郡婦負郡內消防組參加人員四二五名富山市八人町、中新川郡釜ヶ淵村、東礪波郡井波町各少年消防隊參加人員一八〇名同午後一時より縣廳裏濠端に於て自動車ポンプ檢閲を爲した。參加ポンプ數十四臺。

四月十六日新愛知新聞社は展覽會開催を機とし名古屋より飛行機を發し富山、高岡兩市の上空を飛翔せしめ消防思想向上宣傳のポスターを蒔いて興を添へた。

四月十七日武德會裏に於て消防組選拔の角力大會を開催した、出場選手吳山以東以西各四十三名宛であつた。

四月十八日展覽會出品消防機械器具の一齊檢閲を爲した、尙は每日火防に關する活動寫眞を第二會場で開催し、自動車隊を以て富山市內に宣傳した。

該展覽會の出品物としては、內務、陸軍、鐵道、農林、遞信の各省を始め各府縣、前田侯爵、大阪朝日新聞社、日本自動車學校、縣下消防組、各工場其他官公署、中小學校、各種公私團體より出品夥しく其點數、模型五〇點沿革的參考品七四九點、機械器具三三四點、ポスター三、八三七點、寫眞四七九點、小學兒童作品圖書五八八點、作文六三〇點其他消防參考品三二一點、合計六、九八八點の多きに達した。

同展覽會五日間の入場者二十二萬六千人學生團體二萬六千六百三十人に及び富山市內の各町或は各團體大いに協賛する所ありし故、無類の盛況を呈し市內は連日殷賑を極めた。

展覽會開期第一日に開會した消防義會第八回總會は先づ後藤保安課長の開會の辭、白根總裁の告辭に次で白根知事は勳功章を授與し、中谷警察部長の展覽會經過報告ありて閉會。次で大日本消防協會富山縣支部發會式に移り後藤保安課長開式の辭に白根知事詔書捧讀同式辭あり來賓として鈴木內務大臣、鈴木大日本消防協會長、同副會長松井博士、高野警視廳消防部長、飯倉富山縣會議長、牧野富山市長、須田同市會議長、根尾庄下村長の祝辭あり山田警部各地よりの祝電を披露し、富山縣消防組頭總代として長谷川庄藏の答辭ありて閉會。當日白根知事が大日本消防協會富山縣支部長としての祝辭は支部設立の趣旨等を知るに便なるを以て左に揭ぐ

式辭

本日茲に内務大臣閣下を始め多數貴賓各位の貴臨を得まして大日本消防協會富山縣支部の發會式を擧行致しますことは洵に欣幸とする所であります惟ふに水火の災害は人類共同生活の一大脅威でありまして社會文化の發達を阻害し人心を荒廢せしむること之より甚だしきものはないのであります近時消防の知識啓け消防組員の訓練機械器具の整備等大いに見るべきものがありますけれども文化の進展に伴ひ人類生活の態様益々複雜となり從て火熱の利用亦愈々增加し火災は逐年增加の傾向に在るのでありまして此の災禍を未然に防止し一旦危害發生したるとき其の損害を最少限度に止むることは須く各人の自衛に俟つべきでありますけれども一面亦一層消防施設の充實を期せなければならないのであります而して消防の事は單り設備の完備を以てのみ滿足すべきではないのであつて宜敷消防組員の犧牲的精神に俟たなければなりませぬ消防組員は平素に於て或は防火思想の普及に努め或は地方公共の爲め活動し一旦有事の際は身命を賭して水火の巷を往來し粉骨碎身只管民衆の生命財產の保護に當る等其の責任甚だ重且大でありますから然るに由來消防組員は名譽職でありまして職務に基因して死傷する者と雖も其の酬いらるゝ所は極めて薄いのであります、茲に於て本縣は大正九年六月富山縣消防義會を創立し消防組員の表彰弔祭共濟の實施講習會の開催及災害豫防思想の普及消防事務の改善等に努力し來つたのでありますが吾々は常に此の種の事業は須く全國的に統一すべきであると考へて居ました處果然客年八月大日本消防協會發會

式を擧行せられ吾々の期待の實現致しました事は洵に同慶に堪へない次第であります今回大日本消防協會の創立に伴ひまして茲に富山縣支部の創立を見ましたのでありまして吾々其の局に在る者は良く協會の趣旨に基き富山縣消防義會と協力致しまして所期の目的を達成したいと存じます幸に今後益々各位の御後援に依り本會をして完全なる發達を遂げしむる事を希ふと共に職を消防に奉ずる者は深く自己の職責の重大なるに鑑み專心犧牲奉公の赤誠を捧げ一旦有事に際しては各々其の本分を全ふし一般の期待に背かざる樣努めて戴きたいのであります尙此の大日本消防協會支部創立の當初に於て何等か意義ある事業を行ひたいと存じまして種々研究致しました結果茲に消防展覽會を計劃致しました其の狀況は先程展覽會長より申述べた通りでありますが本會の開設に付きましては各方面より多大の御援助を與へられたことを深く感謝すると共に該展覽會が地方消防事業の發達に幾分でも寄與する所あらば本懷とする所であります聊か所懷を述べまして式辭と致します

大日本消防協會富山縣支部長

從四位勳三等　白　根　竹　介

第六章　消防組御親閱

昭和四年一月六日　天皇陛下には宮城前御苑にて全國消防組代表者二萬餘人に對し御親閲あり優渥なる聖旨を賜はつた。本縣より參列の光榮に浴したものは富山消防組頭尾山三郎を首め組頭百四十二名、小頭九十八名、計二百四十名であつた。夙れ多くも同日行はせ給ふ御親閲は古來消防組の義俠的精神が明治二十七年公設消防組設置と共に日に月に向上し、一旦有事の際に方りては献身的に公共に殉せむとする意氣を以て總ての災害と闘ひ、退ては鄉黨に於て、その自治に貢献する所尠からざるを嘉みせられたるものと拜察し、一人として開闢以來始めて行はせらるゝ破格の光榮に感激せざる者はなかつた。今左に當日參列した出町消防組頭佐藤豊助の感想を記して一切を傳ふことゝする。

「佐藤組頭感想」私は此空前の盛事に參列を許さるる光榮に感泣し當日に先立つて一月四日北陸線鯛不知附近浪害の爲め不通となつて居るので東海道線により出町警察署管下參列者二十六名の班長となつて出町驛を出發し五日午後四時東京驛に着し先發隊の村井消防掛の出迎を受け吳山以西の一行百三名は神田神保町の日芳館に投宿しました。同夜本部（後藤保安課長等止宿）より御親閲記念章を受領し翌日早朝本縣よりの參列員二百四十名一隊となり外國語學校前に整列した。全國よりの各消防組は服裝等個々別々なりしも本縣は質素にして統一して居て白手袋に黑短靴の揃ひにて嚴肅靜肅の裡を統いて居た。九時五十分隊伍を整へ宮城前に前進し御苑に集まつた。十一時三十分望月內相は嚮行視察を開始し。午後一時　天皇陛下には軍樂隊の國歌吹奏裡に龍顏麗はしく出御あらせられ、全國消防組を御親閲あらせられた　陛下には御鳳白扉を飛はす中をも厭はれず長くも不動の姿勢にて望月內相よりの奏上奉讀を受けさせられ、更に東京市一番組より木遣音頭を先頭に警視廳消防部、特志消防隊竝ん消防隊の分列式、ポンプ自動車入十四臺の前進に一々御擧手の御答禮あり。午後一時五十分式全く終り望月內相は謹上陛

下の萬歲を三唱し二萬有餘の消防組員之れに唱和し天地も搖がんばかりの壯觀であつた。午後二時より組員一同に晩餐御苑の拜觀を許された。我々組員は此空前の盛事に參列した光榮は一生一代忘るゝことの出來ない有難さを感じた。

第七章　富山縣廳本館燒失

昭和五年三月六日午前十時二十五分富山縣廳本館中央農林課より發火し嗚呼たる大建物は乍ちにして灰燼に歸した。當日は未明より暴風氣味の北風烈しき爲め出火するや火勢猛烈俄か三十分にして本館を包み中央の警察部長室を始め長官室、內務部長室、學務部長室及び本館の階上階下に亂撒せる秘書課、文書課、統計課、庶務課、市町村課、土木課、農林課、商工課、畜産課、耕地課、電氣局、社寺兵事課、社會課、警察部、高等課、特別高等課、警務課、保安課、衛生課、など間口百二十間奥行十間は見る間に凄い紅焰に圍まれ凡一時間の後轟然たる大音響と共に、さしも堅固なコンクリート二階建本館は遂に燒き盡された。火勢は更に北東の烈風に煽られ風下の豪壯たる縣會議事堂と東南に面した日本赤十字本縣支部及び健康保險課、穀物檢査所等を包むに至つた。警報に接した富山消防組は三分間を要せずして急速構內に到着し順次各部は自動車ポンプやガソリンポンプの如き精鋭な機械を配置し直に消火に奮闘すると共に上新川婦負一市二郡の消防組員一千餘名順次駈付け來り尙ほ十一時に出動した富山三十五聯隊の二箇中隊の兵員と力を併せ必死的消防の努力に依つて到底全滅を免れまいと見られて居た縣會議事堂や、赤十字支部及附屬建物、土木出張所、富

山縣農會釀造試驗場、耕地課分室、上新川郡團體事務所並に本館裏手に面して居た刑事、都市計畫の兩課を殘して一千百六十八坪を烏有に歸し午後一時全く鎭火した。

同廳舍は富山舊城本丸跡にて外濠は水を以て繞らされた爲め富山消防組を始め前後して走せ參せる高岡魚津其他各町村消防組の數十臺の精鋭なポンプは廳舍を圍みて放水し議事堂の如きは全く水の林に包圍されたる如き壯觀であつた。縣會議事堂が風下なるに關らず類燒を免れたのは全く消防器械の完備と消防組員の必死的努力に由るものと激賞せざるもの無かつた。當日猛火中の危險を冒して奮鬪せる消防組員中富山消防組の藤永政義、鴨島喜三郎、安野角次、上野政次郎、坂下政次の五名は火傷を負ひ、又重要書類取出しに危險を冒せし田中保安課長(榮一)も亦輕傷を負ふた。此外擦過傷打撲傷を負つたもの三十有餘名に及むだ。此犧牲的精神の賜物により重要書類の多くは半ば焦げながらも搬出せられ而も市内の自警團、靑年團或は神通中學生の如き亦その搬出保護に力を盡す所あつたので、貴重なる公文書や、古來の文獻、爲に其厄を免がれ、冥々の功筆紙に盡くし難きものがあつた。

上下茫々幾千載。我古代民族の『火』に對する畏敬心は、何時しか『拜火敎』の信仰となり、『鎭火祭』の思想となつて見はるゝに至つたが、都市發達し、人家次第に增殖するや、祝融氏の憤は。我

國民に對する一大脅威となり、災害となつて生命財產の烏有に歸するもの年々幾百。幾千萬圓。その災や、寔に以て測り知る可からざる者がある。

本縣の消防設備が、他府縣のそれに較べて、稍勝れたものがあるのは、畢竟この苦き經驗より得來つたもので、その由つて來る所蓋し遠きにありと言はねばならぬ。編者この稿を措かむとするに方り、端なく我祖先の苦心と努力とを想ひ、翻つて又、我縣廳舍の炎上と、縣民のこの火災に對する献身的努力と、奮鬪とを見、本縣の消防事業が、冥々の裡如何に、我縣民の奉公心を啓發し、その向上を促進し、勢の伸ぶる所、知らず識らずの間、一種の『社會力』となつて、我思想界、事業界の上に貢献しつゝあるかを想はざるを得なかつた。

『消防史』の敎ふる所、蓋し尠少ではない。

江戸城下を焦土と化し、死屍累々、さながら兵燹の跡を見るが如き凄愴の観を呈した明和九年の大火、南風に煽られて、餘焔日本橋に及ぶや、當時横山町に住つて居た俳人雪中庵雀太、我家危しと見るや、颯然家を出でゝ、深川要津寺の蘆蕉庵に遁れ、直に筆を執りて、

　　絆さくらを忘れて青き柳かな

の一句をものし、之を訪客に頒ち、客をして亦之に和せしめ、酒と俳句とに一夜を詠ひ明したさうである。風流と言はむか、呑気と言はむか、封建時代の詩人には往々にして、こんな人達があつた。

第六編　消防組の略沿革

一、富山警察署管下

富山消防組　明治二十七年二月勅令により、今日の公設義勇消防組なるもの、組織せられたのであるが、其由來は遠く承應二年前田利次公治世時代『火之用心別而入念相心得可申事』との布令に其端を發し寛文七年十二月廿七日消防心得十三條を發布し其據る可き道を示し、稍組織的に火防なるものが出來たのであるが、城内城下の區別があり、又町内火消との連絡とてもなく、消防上の統制も區々であつた。然るに文久三年二月生地屋燒けと稱する大火に遭ひ、藩令を以て富山城下火災の場合は、一般火消應援の旨布令ありて、城内火消との連絡もついたが方今各町に於ける自警團と消防組の如き關係で官民合同の規則的秩序ある統制とては無論無かつた。

其後數度の大火と時代の進運とに伴ひ漸次消防組化し明治十八年五月三十一日餌指町安田政太郎方の出火により五十二ヶ町三ヶ村を烏有に歸せしめたので市民の輿論沸騰し、聯合町會を開き、四万三千三百四十二圓の巨費を投じて、火防用水路を計畫した。卽ち上新川郡堀川村に於て、廣田用水より分流せしめ市の南部郊外より、市内西中野町より、第二火防線として道路と併行北進して舊

神通川に至るものと、一つは第一火防線として、梅澤町より中教院前通りを北流し鵜川に出づるものを本線とし、此兩本線より東西に支流を作り市内を屈折流過、水管十條以内にて放水を充分ならしめむとし、明治十九年七月三日起工、同二十年六月十一日竣工式を擧ぐると共に、新式腕用ポンプ六臺を新調し、舊式龍吐水を廢し、一番組より六番組までの消防組を編成し、組頭に板倉庄次郎を擧げ、一組の員數五十三名、部長小頭各一名を置き、設備に内容に編成に、一大改革を加へた。之より富山消防組として名實共に完備した。

明治二十七年二月消防組規則發布せらるゝや其後富山消防組となり六月七日各幹部は警察部より消防手は警察署より夫れ夫々辭令の交付あり茲に今日の公設富山消防組として官權指揮の下に繩樹立式行はれた。明治三十二年六月六部制を十部制に改め。同三十三年十二月蒸汽ポンプを新調し梅澤町眞興寺に假設した。同三十四年四月一日より常備四名を二番町第一部に置き。同三十四年八月消防紀念碑建設の工を起し六千七百圓の工費を以て同三十六年十月竣工を見るに至つた。同三十七年十月柳町より北新町に第八部を移轉した。同三十八年二月四日明治三十七八年戰役の際報國の誠を致したといふ故を以て、銀杯一個を下賜せらるゝと共に、賞勳局總裁より謝狀を受けた。同四十年四月十人長の制度を設け。同四十一年十月愛宕元町に貯水池（容量二百十一噸）を設け。同四十二年七月蒸汽ポンプ一臺を新調し、總曲輪第五部に置き、同四十三年五月七日より同部に常備員二名

を置いた。同四十四年七月蒸汽ポンプ一臺を新調し中野新町第十部に置き、同月廿六日に常備員二名を置いた。

大正二年四月一日より第五部及び第十部の常備員を三名とし、同三年二月ガソリンポンプ一臺を新調し、總曲輪第五部に配屬せしめた。同年三月五部配屬の蒸汽ポンプを第八部北新町に移し、同四月一日より常備員四名を置き、第五部第十部共に四名に增した。同年六月第一部ポンプを曳馬とし二頭を飼養し、從來の警備消防手の夜間勤務を廢し、常備消防手を八名とした。

大正四年四月富山市消防義會組織せらるゝことゝなつた。同五年八月第五部ガソリンポンプを自動車ポンプに改造、同六年藤井町に貯水池を掘鑿した。容量九十噸。同年四月一日第一部常備員を十名とした。同七年六月縣より蒸汽ポンプ二臺の拂下を受け一臺は第二部藤井町、一臺は總曲輪第五部に配置し第二部に常備員四名を置いた。同年九月馬曳水管車を購入し、馬三頭とした。同八年四月一日第五部用蒸汽ポンプを第四部西田地方へ移し常備員四名を置いた。

大正九年七月十二日神通川稀有の洪水に際し協力一致善く橋梁の流失と堤防の缺潰を防いた功に依つて東園縣知事より表彰せられた。大正九年九月富山縣消防義會富山支部設けられ十人長を掛長と改稱せらるゝに至つた。

大正十年四月二十九日市外西田地方高柳清忠より出火し南風猛烈を極めたるも、能く之を消し止

めたる功に依り、東國縣知事より表彰せられた。

大正十年六月櫻町に貯水池を掘る、容量七十五噸。大正十年九月ラフランス自動車ポンプ購入第五部に置き第五部ガソリンポンプを第七部豊川町に移した。尚二部四部八部十部の各二名第五部に編入し、十二名とし他部を其儘とした。大正十年二月十一日富山縣消防義會總裁より器具機械整正にして規律嚴正火防の設備他の模範とするに足るとし旌表旗一旒下附になつた。

大正十二年四月二日總曲輪青葉幼稚園出火の際、南風猛烈、加ふるに水利不便なるにも拘らず、防火に勗め、延燒なからしめたる功に依り表彰せられた。

同十二年五月レオーノーザン自働車ポンプ購入第一部附とし第一部蒸汽ポンプは第二部に移し、第二部藤井町蒸汽ポンプを拂下げ、馬匹及水管車は第十部中野新町に移した。

同十三年四月愛宕神社境内に貯水池を掘つた。容量百九十二噸。同年七月一日内閣總理大臣の移牒に依り伊東富山縣知事より大正十二年九月一日關東大震災の際同胞相愛の至情を以て救護作業を援助し、復興をして容易ならしめたる功に依り感謝狀を受けた。

大正十三年十一月神通町に貯水池を掘つた。容量二百十一噸。同月救助用手曳梯子及梯子自働車購入。同月停車場横に貯水池を掘つた。容量百二十五噸

同年十二月　攝政宮殿下本縣行啓に際し奉公の誠を盡し御警衛の任を果したるを以て金森警察部

長より感謝狀を受けた。

同十四年四月二十四日市内鹿島町北村嘉十方より出火の際敏速駈付南西の烈風にて水利不便なりしも能く消防の目的を達したる功に依り岡知事より表彰せられた。

同十四年十月豫て申請中の火災用電話認可せらる。

同十四年八月十四日十部制を五部制に改め一部一番町、二部藤井町、三部西田地方、四部中野新町、五部柳町に改め、器具の配置を第一部ラフランス、レオーノーザン、ガソリンポンプ、改良自働車ポンプ、手曳梯子、梯子自動車、第二部、第三部、第四部、第五部は在來の儘とし常備員は全部第一部に集合せしめ自動車ポンプを主力とする集合制、常備員二十八名となすと共に從來各幹部二名なりしを三名に改めた。

大正十五年七月東奥羽村富山市へ編入により第六部を五福に置き腕用ポンプ一臺を置いた。

昭和二年三月ハドソンノーザン一臺購入第一部に置いた。

同年四月ガソリン改造自動車ポンプを拂下げた。同年十二月鈴木式ガソリンポンプ一臺購入第六部に置いた。同三年四月一日より第二部に常備員二名を置き第一部常備員部を消防本部と稱した。

昭和三年八月神通町に火防用井戸堀鑿毎分の湧出量約一噸半。同四年三月火防用水水源地と消防本部との連絡用專用電話を敷設した。同年五月鐵骨望樓臺(昇降機附)を新設し同時に指揮用乘用自

動車一臺購入。同年八月愛宕新町に防火用井戸湧出量毎分一噸、櫻町に掘鑿のもの約一噸弱、同年九月古手傳町に掘鑿した、湧出量一噸弱。

富山消防組初代組頭　板倉庄次郎

慶應二年藩政の頃より消防手となり。明治三年小頭となり、同五年組頭に進み二十七年公設消防組となるや直ちに組頭拜命し明治四十四年十月逝去するまで四十有六年間殆んど一日の如く消防組の改良發展に努力し特別の賞を受くること二回。消防義會の組織にも東奔西走し成功せしめた功勞甚大である。其他公共事業に參加し功績頗る多く特に赤十字社終身社員として最も力を竭くした。

富山消防組第二代組頭　長谷川庄藏

明治四十四年十一月富山市會議員當選、同名譽職市參事會員となる。同四十五年六月十一日富山消防組頭拜命。大正元年九月富山市に於ける消防從事者の死亡者九十九名の追悼會並遺族慰安會主唱者となる。同五年十一月七日消防勤功證書を受く。大正六年十二月十

七日大雪害に際し鐵道院より謝狀を受く。同二十八日大雪害人命救助に依り賞與を受く、大正七年六月三日富山市會議長となる同十二年十一月二十四日富山縣會議長となる。同十三年秩父宮殿下御來縣の際單獨拜謁の榮に浴す。同十一月三日陸軍特別大演習特別拜觀を許さる。同月十日皇太子殿下行啓の際單獨拜謁の光榮に浴す。同十四年六月十五日、二十年以上市會議員たる故を以て金盃を受領。同十五年九月二十四日全國消防組頭大會に於ける大日本消防協會設立發起人に加はる。昭和二年七月十四日大日本消防協會設立と同時に協會理事及代表員となる。同年七月、富山消防組及有志者の發企に依り同人の德を後世に傳ふべく本願寺別院內に銅像建設。昭和四年四月四日長逝。四月六日特旨從六位に叙せらる。

長谷川組頭叙位

北斗の燦として、極北の闇を照すが如く、光芒陸離、耿として北陸の天を照した富山消防組頭長谷川庄藏氏昭和四年四月四日を以て逝去した。消防義會の設立や、大日本消防協會の創立は固より、天下消防の事に關しては、一として其手を煩はさざるはなしと言ふ位、深くこの事業に沒頭して居られたので、氏の逝去は、我國の消防界に取りて、蓋し一大損失であつた。が、其功績長くも天聽に達し、破格を以て從六位に叙せられた。

富山消防組現組頭　尾山三郎

明治三十八年三月富山市商業學校卒業大正五年十二月富山消防組小頭部長任命同七年株式會社富山八百物市場支配人就任、同九年一月同會社常務取締役となり同十一年五月一日富山市會議員

に當選、同年五月十七日富山市名譽職參事會員に當選同十四年一月株式會社富山帝國館社長に就任同十四年五月市會議員に再選、同年八月小頭部長を辭し、同十五年五月十七日、富山市會副議長となる同年九月市會副議長を辭し、大正十五年十月所得稅調査員に當選、昭和二年九月二十五日富山縣會議員に當選、同三年十二月七日富山縣會副議長となり、同十二日富山消防組頭拜命、同四年五月二日富山市會議員に三選、同五月十一日富山市會議長に當選、同五年五月二十一日富山市會議長を辭し卽日再選せらる。

四方消防組　元文四年、富山藩主より壹四十枚及授四方と記したる金色の纏柄を拜領し、火消を設けたのは其始めで、藩の御用命火消として明治維新まで活動して來たのであるが、明治二十七年消防組規則制定せられ、嵯峨孫三郎組頭となり、西岩瀨火消を併合し、新に腕用ポンプ一臺を備へ服裝を新調し、四方消防組の新組織を見るに至つた。

明治四十年蒸汽ポンプ一臺を新調し、同時に現警部補派出所横に十六坪の器具置場及見張所並に警鐘臺を設けた。

明治四十一年水利の不便なるを遺憾とし町内六ヶ所に貯水池を新設した。大正八年消防組々織を變更して二部制とし、定員を六十五名に增した。同十四年ガソリンポンプ一臺を購入し、第二部に備置き、蒸汽ポンプを第一部に備ふることゝした。同十五年更に定員二名を增加し組頭一名部長二

名小頭四名消防手六十名計六十七名とした。同十五年儀骨望樓臺を新設した。昭和三年十一月龍形消防紀念碑を建設した經費五千八百五十圓、同年十一月二十八日除幕式を擧行した。

明治二十七年創設以來の消防組頭は左のやうである。

初代　嵯峨孫三郎
二代　嵯谷與三郎
三代　嵯谷豊次郎
四代　白石又三郎
五代　佛木兵次郎
現代　柳野晉一

賞としては、大正六年二月暴風雨の際、出漁中の遭難者三名を救助し、知事より金五十圓賞與せらる。同七年五月コレラ病蔓延の兆あるや、警察官役場吏員の補助となり、防疫に盡瘁せしを以て、町より金一封並に感謝狀、縣より賞狀を受けた。大正十三年　攝政宮殿下本縣行啓に際し奉公の誠を盡し御警衛の任を果したるを以て警察部長より感謝狀を受けた。昭和二年三月二十日雪災警防に努力した功に依り警察部長より感謝狀を受けた。同三年十一月御大禮に際し地方警戒の任に當りたるに依り知事より感謝狀を受けた。

堀川消防組　明治四十四年七月公設消防組設立の要を認め當時の村長松浦勝太郎は經費出途なきを遺憾とし、富山市長井上政寛より富山市所有の腕用ポンプ一臺無償永久借用し、同年十月該ポンプを堀川村役場前に備へ付け、始めて公設消防を設立し、高柳外次郎を組頭に擧げた。越えて大正十一年十一月二十五日當時の村長竹内松治は、富山市長牧野平五郎より富山市所有の腕用ポンプ一

臺無償借用し、根塚に備付けた。昭和二年五月十三日二部組織とし、組員を六十五名とした。同三年十二月十九日高柳組頭退職せるにより、二十四日現組頭細野定次郎就職した。細野組頭は消防器具の改善に努力し昭和四年二月村役場前に約四百圓を投じ鐵骨望樓臺を建設した。同年三月二十八日約八千圓を投じグロハムノーザン式ポンプ自動車並に附屬品一式購入し、役場前に備付けた。

八幡消防組　婦負郡八幡村八町は戸數約百七十ありて全村の大半を占め、而も水利の便惡しく火防設備の急なるを自覺し、大正七年三月八町部落民相謀り、在鄕軍人分會員を主とする私設消防組(俗稱バケツ消防隊)を組織し中西又吾を隊長に中西常右衛門、佐伯庄三郎を副隊長に擧げ隊員二十一名之を四班に分けた。當時一定の服裝も無く、鳶口十挺並にバケツ四十個を備付け之を各班に分配し班長之を保管し消防用器具として居た。大正八年三月中西隊長辭任し、宮川勝次郎推薦せられ隊長となつた。同十一年中西又吾再び隊長に改選せられた。同十二年一月射水郡本鄕消防組より古服裝十八分金澤市より新品十人分を購入し、同年四方消防組より古腕用ポンプ一臺(一万圓)を購入した。大正十二年二月二十七日公設消防組組織の要あるを認め四千七百八十六圓を計上した同日村會の可決する所となり縣へ設置方申請し同年六月認可せられた。同六月二十二日八幡小學校前にて纒樹立式擧行組頭に中西又吾隊員は隊長以下三十八名茲に始めて公設消防組の組織を見るに至つた。昭和三年四月一千万圓餘の寄附金を以て新式腕用ポンプ一臺を購入した。賞としては大正十三

年十一月　今上陛下特別大演習御統監の節富山市へ御成。組員一同御警衛の任に當り警察部長より感謝狀を受け昭和三年　今上陛下御大禮の節一ヶ月間村内を警戒したる功により知事より感謝狀を受けた。昭和四年一月御親閲の際中西組頭は組員を代表し參列の光榮に浴した。

山室消防組　大正八年十月の頃より消防組設置の聲起り、同九年三月村會に於て可決。同年三月十九日認可あり、同四月六日腕用ポンプ一臺並に附屬品一式を購入し澤木又八組頭に任命。組員三十三名辭令交付同時に纒樹立式を擧行し始めて公設消防組の設置を見るに至り、器具置場を巡査駐在所に定めた。

昭和二年七月二十七日澤木組頭辭任し、八月二十四日永森傳四郎組頭に就任した。同八月十八日山室駐在所前に四百圓を投じて鐵骨望樓臺を建設した。當時山室村清水、石金、館出の富山市接續地は急速の發達を遂げ腕用ポンプ一臺にては火災豫防上萬全を期すること能はざるを以て村當局並に有志の後援にて經費三千圓を投じ、昭和四年六月二十馬力ガソリンポンプ及附屬品購入同時に消防組員十六名增員し山室村清水に器具置場を建設した。

草島消防組　大正十年七月消防組設置の必要を痛感し、草島村金山新及草島の二部落に「バケツ」消防隊の設置を見るに至り、同十五年十月腕用ポンプ二臺並に之に要する附屬品一式を購入して私設消防組を組織し、金山新にポンプ一臺他の一臺は草島に置き金山新は松田友次郎草島は藤井義淺

其任に當り委員六十名とした。越えて昭和二年二月十七日公設消防組設置は村内の輿論となり、二月二十八日臨時村會を開き滿場一致を以て可決し、三月七日申請同十八日設立認可あり、同十九日幹部會を開き、抽籤により金山新を第一部。草島を第二部に決定。藤井義淺を組頭に推し、其他組員六十七名とし、內規を制定し、三月三十日同村小學校に於て纏樹立式を擧行するに至つた。

倉堰消防組　本村は永く災禍に遭遇せざりし爲め、村民は警防の必要を認めず、警備智識も甚だ幼稚であつたが、大正十三年一月十三日村內布目に失火あり、人心安定せざるに、同月二十三日又復布目に失火起り、不安に慄えた矢先、三月二十日村內荒屋に大火災起り、强烈な南風に煽られ、瞬時に十六戸を全燒し、續て四月一日打出信用組合の工場も灰燼に歸する等、災害頻々として發生し、數ヶ月を出でずして數万圓の損害を負ふに至りたるを以て、警火防備を痛感し當時東宮殿下御成婚記念として消防組を設置することゝし、大正十二年七月八日臨時村會を開き五ヶ年の繼續事業として、滿場一致を以て可決し、七月十八日申請八月十六日認可あり、組頭一名小頭二名消防手三十名を置き、同十三年九月警鐘臺を建設し、同十四年五月一日消防手定員三十名を三十一名とし、昭和三年四月二十七日小頭三名消防手四十五名に變更した。

神明消防組　神明村は、戸數僅に一八〇戸に過ぎざる小村なるも、五部落に分れ、各部落共に密集せるを以て、警火防備の必要を感じ、現組頭高柳健三は村當局及び各有志に其必要を說き、昭和

二年十二月、腕用ポンプ一臺之れが附屬品一式を約八百圓にて購入し、高柳健三組頭となり組員三十三名を選任し、私設消防組を編成した。越えて三年七月村會に附議し、公設消防組設置を申請し同八月二十四日に認可と共に纏樹立式を擧行し、公設消防組の設置を見るに至つた。

鵜坂消防組　同村在鄉軍人分會員は、夙に消防組設置を要望せしが經費之を許さず、其實現を見るに至らざりしを憤慨し、分會員は其費用を會員負擔とし、大正十三年三月"バケツ"百個を購入して鵜坂消防隊を組織し、一面村內有志に公設消防組設置の必要を說きたる結果、昭和二年十二月村會決議を以て、腕用ポンプ一臺及其附屬品を購入し、岡村一郎を組頭とし、組員三十三名より成る私設消防組を編成せしが、同三年十一月公設消防組設置は村內の輿論となり、同月初旬臨時村會を開き直に決定して申請同月十七日認可あり、同年十二月五日同村小學校に於て纏樹立式を併せ、組員三十三名任命。茲に始めて公設消防組設置を見るに至つた。昭和四年六月四日費用三百圓餘を投じて鐵骨望樓臺を建設した。

西吳羽消防組　明治二十四年五月西吳羽村小竹阿倍助三郎方より出火全燒したる爲め、同年十月同村朴木仁七郎、谷井九兵衛、中井幸次郎、鹿野松太郎、山口紋平の五名消防隊組織に奔走し、松崎省三を幹部と定め、消防夫三十人を置いた。翌二十五年六月再び同村谷井仁作方より出火。全燒したるを目擊した村民は火災の悲慘なるを痛感し、同村山口紋平、酒井三郎、鹿野松太郎、谷井仁

作を顧問としポンプ購入消防組々織の協議を決定し先づ水溜八ヶ所に放鯉し、之れが費用の幾分に充つることゝし、同時に各部落より寄附を爲さしめ、同二十七年十一月腕用ポンプ一臺と鳶口十二挺頭巾三十個提灯十張鋸一挺を購入し、私設消防組を設置した。越えて同三十七年七月八日村會決議により、公設消防組設置を見るに至り、中田又藏組頭となり次で松崎省三、角九郎平組頭となつた。同四十一年四月二十六日、庄司又藏組頭になつた。昭和三年三月二十日輜重車一臺購入。同三年八月二十九日組頭庄司又藏辭任し九月七日吉田善永組頭に就任した。同四年九月約三千圓を投じガソリンポンプ並に附屬品一式を備付けた。

二、新庄警察署管下

新庄消防組　明治三十年腕用ポンプ一臺を購入し、私設消防組を組織して居たが、明治三十八年に至り、二部制の公設消防組となり、同四十二年に蒸汽ポンプ一臺を購入し、更に昭和三年に至つて自動車ポンプ一臺を購入した。大正三年八月常願寺川出水の際救護に努めたる廉により、縣知事より表彰せられた。最初の組頭は市田七之助にして、後三組頭を經て現組頭に至り、現組頭は昭和四年一月六日組代表として御親閲の光榮に浴した。

上瀧消防組　明治四十三年一月上瀧町に於て四十餘戸を燒失した災禍を見るや、消防組の必要を

痛感し、腕用ポンプ二臺を購入し、私設消防組として活動して居たが、大正元年十月公設消防組に變更。同年十一月蒸汽ポンプ一臺を新調した。大正三年八月常願寺川出水氾濫の際、之れが救護に努めたる廉により、縣知事より表彰せられ、現組頭は昭和四年一月の御親閲に組代表として參列の光榮に浴した。

太田消防組　大正七年十月竹内享發起となり青年會有志と相議り、ズック製水嚢其他破壞消防器具を購入し、後腕用ポンプ一臺を求め大正八年十一月私設消防組を創設した。大正九年四月工費三百圓(但醵金に依る)を投じ、火見櫓を建設した。同年七月富山市にコレラ病發生せし際、防疫所を設置し、豫防警戒に努め村長より感謝狀を受け、大正十二年九月關東大震災に際し、罹災民救恤義捐金を募集し金百圓白米三石二斗を贈りたる廉により縣知事より感謝狀を受けた。大正十四年三月公設消防組となり現組頭は昭和四年一月組代表として御親閲に參列の光榮に浴した。

大庄消防組　大正八年五月大庄村花崎(現第二部)、同年十二月同村田畠(現第一部)大正九年三月同村善名(現第三部)の三部落に腕用ポンプ一臺宛購入し、私設消防組として活動して來たが、大正十三年三月公設消防組となつた。昭和四年一月六日現組頭は組代表として御親閲に參列の光榮に浴した。

月岡消防組　月岡村開發は明治二十七年腕用ポンプ一臺を購入、組員三十二名より成る私設消防

組を組織し、大正十二年同村焼野、上千俵へ同様腕用ポンプ一臺を購入し、各私設消防として活動し同十四年四月同村中布目にも腕用ポンプ一臺購入するに至りしが、大正十五年四月合併して公設消防組の設置を見るに至つた。昭和四年一月現組頭は組代表として御親閲の光榮に浴した。

廣田消防組　昭和三年六月腕用ポンプ其他機械器具を購入し公設消防組を設置した。

鮫川消防組　昭和三年十一月御大禮行はせらるゝに際し、此御盛典を奉祝し、永遠に記念し奉るべき事業の協議會を本村有志間に開かるゝや、先づ消防組の設置を最も適當とし、私設消防を組織せしが、同年十二月村會の決議により、同四年二月公設消防組の設置を見るに至つた。

島村消防組　昭和五年五月三十日の創設にかゝり、組頭一名小頭參名消防手四十五名計四十九名の組織で腕用ポンプ附屬品一切を備へてゐる。

三、東岩瀬警察署管下

東岩瀬消防組　慶應元年頃東岩瀬町俗稱松原町に加賀藩管下の町奉行ありて、當時町奉行管下の火消組あり其威望盛なりしが、明治維新と共に火消組も凋落した。明治元年頃加賀藩の大倉庫（御藏と稱す）殘り居り藏付番人約參十名は擧に町奉行火消の後を承け龍來町火消組を組織し針木三吉と云ふ俠客が自ら組頭となり小頭に古市藤太郎を任じ其氣風は剛直仁俠水火を辭せざる活氣があつ

た。當時使用の消防具は龍吐水を中心とし、破壞的器具に過ぎなかつたことは、何れも同樣であつた。明治二十一年に至り、腕用ポンプ一臺を購入し、明治二十七年五月二十八日公設消防組に編入と共に、東岩瀬消防組と改稱し、前の針木三吉組頭となり、小頭部長に古市藤太郎を任せしが、間もなく組頭死亡し、前小頭部長組頭となつた。當時組員約五十名。明治三十二年消防組を二部制とし同時に腕用ポンプ一臺購入し第一部を大字西宮村に、第二部を浦町に定めた。同四十一年馬場道久氏より寄進の蒸汽ポンプ一臺を第一部に置き更に大正三年右同人より寄進の蒸汽ポンプ一臺を第二部に備へた。

前組頭古市藤太郎死亡により、大正十年一月二十日万見半三郎組頭に任命せられ、任期中大に消防の發揚に努めたが、同十五年十一月二十五日辭職した。後繼組頭として梶榮太郎就任し、昭和三年五月自動車ポンプ一臺を購入するに至つた。其間組頭梶榮太郎を始めとし、小頭部長森内竹次郎同種藤次郎、犬島直二、高岡平作、藤澤林太郎、宮城宗平等の各幹部は東奔西走して各種器具を整備し大に消防組の名聲を發揚した。

本町消防は斯く古き來歷を有し、今日まで進展し來りし其間に各地各所の大火災害防止救濟に盡瘁し、幾多の感謝狀禮狀積んで山の如くなるが、其主なるものを擧ぐれば、大正三年八月十三日大洪水の際協心一致能く其被害防止に當り、功勞尠なからずとし、濱田知事より金拾圓及功勞感謝狀

を、尚ほ昭和二年三月二十日付を以て、同年に於ける大降雪に當り能く雪害豫防に勉めた功勞に依り、縣警察部長より感謝狀を受けた。

大村消防組　明治二十七年大廣田村大村岩城隆直方より出火し、數戸を燒失したるより、村民は此災害に懲ひ、消防機關設置の必要を痛感し、同村飯倉平兵衛、岩田保昌、山城長松等發起となり當時同村駐在巡査近藤鷲夫之れに協調し各村落より寄附金を集め、同三十九年十二月東岩瀬町より獨逸製腕用ポンプ一臺の寄附を受け、前の寄附金にて付屬品一式を求め茲に岩田元直組頭となり、組員三十二名を率ひて就任し、大村消防組を組織するに至つた。大正八年四月大廣田村、中田、田畑、森の三部落協力して消防組を組織すべく、同村保田彌次郎、西野淺平等の盡力によりて實現することゝなり、大村消防組第二部として活動することゝなつた。

針原村消防組　大正十五年針原村下飯野、花藤八郎方より出火し、忽ち附近民家六戸を鳥有に歸せし爲め、村民は大恐慌を來し直ちに消防組設置の必要を認め、同村下飯野、道正、楠木の三部落協議の結果、昭和二年七月三部落の寄附金を以て腕用ポンプ一臺其他附屬品一切を購入し、針原消防組の設置を見るに至つた。その間現組頭岩竹勇太郎、小頭植田利光、楠木康一等は之が組織に寢食を忘れて盡瘁し設置後も益々發展の域に進みつゝある。

四、大久保警察署管下

大久保消防組　大久保町は從來火災少なき爲め、町民は消防に關する智識に乏しく、僅に各戸に桶手蔕出場用の草鞋を非常準備として備へ居つたのに過ぎなかつたが明治二十七年七月下大久保高瀬仁左衛門東京より小型腕用ポンプ一臺を買求め、町有志約三十名を以て私設消防組（全部消防手と稱す）を組織し、火災豫防に努めた。其後該消防組は、町有志或は青年に依り維持し來つたが、明治四十四年四月二十一日公設消防組（二部制）に組織され、大正十二年四月十一日蒸汽ポンプ購入三部制に改め、昭和四年十二月十三日更に二部制に變更した。

大澤野消防組　明治三十五年頃大澤野村長付地主內野信一の寄付金により、腕用ポンプ一臺を購入、私設消防組（組頭一名小頭二名消防手三十名）を組織し來り、同四十四年四月二十一日公設消防組（一部制）となり、大正九年六月二十五日二部制に組織を變更した。

鶴澤消防組　大正十一年東鶴澤部落に組織された、私設消防組を基礎とし、同十二年三月三十日公設消防組となつたのである。

任海消防組　大正十年四月十五日新保村任海部落に設置された私設消防組を基礎とし、同十二年五月二十五日公設消防組となつた。

熊野消防組　大正十一年十月十四日熊野村在鄉軍人分會員有志に依り設置され、一部制の所同十三年四月四日二部制（組頭一人小頭五人消防手七十五人）に組織變更された

舩峠消防組　明治三十九年頃舩峠村寺家、坂本の二部落に於て各腕用ポンプ一臺を購入、部落民約二十人宛を以て私設消防組を組織して居たが、其後年々器具の購入組員の改善を計り大正十二年三月公設消防組を組織することになつた。

細入消防組　明治三十八年八月細入村楡原部落に少年及青年等を以て少年消防隊を組織し消防に従事し來つたのを始めとし、大正五年前後に於て、猪谷、庵谷、片掛、笹津、蟹寺部落に何れも私設消防組を設け、機械器具を完備するに至つたので大正十四年七月十七日此等各部落消防組を合して、公設消防組(六部制組頭一人小頭十五人消防手二百四十七人)を設置するに至つた。

下タ消防組　大正七年下タ村町長に組頭一人小頭一人消防二十五人を以て私設消防組を設置し來つたが、漸次機械器具を新調し、大正十五年公設消防組の設置を見るに至つた。又下タ村猪谷部落に於て、大正九年私設消防組を設置し來つたが、昭和二年七月十一日合併して下タ村消防組を二部制に變更し、組頭一人小頭五人消防手七十九人とした。

六、滑川警察署管下

滑川消防組　本町には元祿時代より火消役なるものありて、有事に際し出動し消防に力を盡くしで居たが其組織等詳細不明である。明治初年より各字に於て、私設消防の設置を見るに至り、明治二十七年五月十八日腕用ポンプ三臺並に付屬器具を購入すると同時に、公設滑川消防組の設置を見

るに至り、三部制組員百十二を有するに至つた。町會に於ても、毎年經費一千圓餘を計上し内容の充實に努め、同四十年十月蒸汽ポンプ一臺を購入して、次で四十三年六月第三部に、同四十五年五月第一部に何れも望樓臺を設置した。大正五年五月ガソリンポンプ一臺を購入し、更に昭和二年四月自動車ポンプ一臺を購入するに至つた。

滑川消防組頭　八尾菊次郎

明治四十一年三月魚津中學卒業。同年三月中新川郡北加積尋常高等小學校に勤務。同四十二年十二月一年志願兵として歩兵第六十九聯隊へ入隊。大正二年一月陸軍歩兵少尉に任官。同年二月正八位に叙せらる。同三年三月より翌四年四月まで農事研究の爲め朝鮮に居住。同四年七月滑川青年團副團長に還任。同六年一月在鄉軍人分會滑川分會長に就任。同二月在鄉軍人會中新川聯合分會副長に就任。同年八月水橋銀行滑川支店長に就職。大正八年十二月滑川消防組頭拜命。同十二年三月陸軍歩兵中尉に任官。同十五年四月大日本消防協會發起人に加盟。昭和二年七月大日本消防協會代議員に選定。同三年六月從七位に叙せらる。同八月滑川商工會理事に就職。同四年九月大日本消防協會富山縣支部副支部長囑託せらる。同年十月正七位に叙せらる。

東水橋消防組　明治初年より施設せられて、組頭相談役及び火消役十人を以て組織せられたが、明治十年頃組員を七十五人とし、龍吐水二個及其他の器具類を設備し、鋭意内容の改善に努め來つ

たが明治二十七年五月十八日公設消防組の設置を見ると同時に、腕用ポンプ一臺を購入し、同四十二年更に腕用ポンプ二臺を新調し、大正元年四月蒸汽ポンプ一臺を備付け、同十一年八月四日定員百三人二部制とし、昭和二年四月更に自動車ポンプ一臺を購入し、面目を一新するに至つた。

東水橋消防組頭　相澤勘次郎

明治三十一年四月東水橋町會議員に當選。同三十七年七月東水橋消防組消防手拜命。明治三十七年七月十二日東水橋消防組頭拜命。同三十八年七月一日大日本消防協會設立の發起人となる。同年八月中新川郡消防義會設立の發起人となり同會設立後評議員に選任。同四十一年十二月日本赤十字社特別社員に列す。同四十二年露領水産組合評議員に選任。同四十三年東水橋町會議員に再選。大正六年四月十九日町會議員に當選。同七年二月二十日富山縣消防義會速成委員を囑託せらる。大正八年十一月一日東水橋町會議員在職滿十六年勤續に依り自治功勞者として表彰せられ銀盃一個を受領す。大正九年十月二十日富山縣消防義會の創立に際し努力尠なからや感謝狀並銀盃一個受領。同縣消防議會評議員となる。同九年虎疫發生の際町長より感謝狀並銀盃一個を受く。同十年四月町會議員に再選、同十一年八月名譽職助役に就任。同十一年十月富山縣知事より勤功證書、富山縣消防義會より勤功章を授與せらる。大正十三年十月二十日陸軍大演習に際し御警衞補助員となる。同十四年四月町會議員に當選。大正十五年四月消防義會中新

川郡支部より感謝狀並金盃一個受領。同九月東水橋町商工會長に再選。昭和二年三月三日第一回防火强調委員に囑託せらる。同三年七月二日商工會長に三選。同二年十一月十九日富山縣消防義會理事に選任。同三年十一月十六日御大禮に際し地方賜饌に與かる。同四年四月町會議員に當選同五年四月十九日第一次家屋稅調査員に當選。

西水橋消防組　從來バケツ消防隊なるものありて、各字區長宅に消防用器具等を備へ置き、有事に際し、各戶より出場消防に努め居つたが明治二十七年五月十八日公設消防組の設置を見るに至り組員以下三十三人、腕用ポンプ一臺を購入した。同三十六年五月定員三十六人に改定と共に、腕用ポンプ一臺を增置した。大正八年十月十日更に定員六十六人と改定し、同月同町小學校舍前に器具置場を建設した(工費一千百五十圓)。墅九年一月更に蒸汽ポンプ一臺(代三千圓)を購入し、昭和二年七月更に一千二百圓を投じ鐵骨望樓臺を建設した。

早月加積消防組　大正四年三月、栗山部落に石坂專作を組頭とした私設消防組の設立を見、腕用ポンプ一臺を備へた。同十一年一月二十日公設消防組となり、石坂專作組頭に任せられ、組員四十五人を有した。同時に私設消防組より腕用ポンプを讓受け村に於ても每年二百四十圓の警備費を計上するに至つた。同十三年六月二十日定員六十五人に變更すると同時に、特號腕用ポンプ一臺を購入し昭和四年十月更に鐵骨火見臺を建設するに至つた。

濱加積消防組　大正四年六月頃、同村字北野部落に川原才次郎を組頭とする私設北野消防組の設立を見、腕用ポンプ一臺を備へた。大正十一年二月私設を其儘變更して公設濱加積消防組を設立し、川原才次郎組頭を命せられ、組員は四十五人毎年百圓の警備費を計上するに至り、大正十三年定員を六十五人とし、警備費を毎年百五十圓とした。昭和三年二月十日四百八十圓を投じ鐵骨火見櫓を建設するに至つた。

東加積消防組　本村は他村に比し、人家疎なる關係上、消防組の設立を見たるは漸く大正十年四月同村大崎野及森野新共同の私設消防組の創設に始まり、翌十一年四月二十八日該消防組公設に變更し、同組の腕用ポンプを讓り受け、金川久二組頭に任せられ組員は六十五人を以て組織せられた。

中加積消防組　明治三十五年五月同村万造費より百二十圓を支出し、腕用ポンプ一臺並附屬品一式を購入し、私設消防組を組織したるに創まり、當時區長之を指揮し、一朝有事に際し、各戸より一人以上出場消防に盡力し、之が費用一切は村万造費より支出し來つたが、大正十四年十一月二十二日公設消防組となり、千六百五十圓を投じてガソリンポンプを購入し、伊藤三郎組頭に任せられた。昭和二年四月十一日辭職し、現組頭川崎清平任せらるゝことゝなつた。

北加積消防組　大正六年六月一日滑川消防組より腕用ポンプ一臺を讓受け、同村柳原に私設消防

組を設立したるに始まり、其後字七口、中新、法花寺、大榎の各部落相次で私設消防組を設立し腕用ポンプを備ふるに至つた。同八年九月拾九日公設消防組設置せられ、上田作次組頭に任せられた同拾五年七月三拾一日定員百六拾三人に改正し、三部制を取りガソリンポンプ一臺を購入することゝなつた。

西加積消防組　大正五年同村字下梅澤に腕用ポンプを備付け、私設消防組を設立した。大正拾一年九月二拾九日私設より器具一切を讓り受け、公設西加積消防組となつた。組頭に砂原菊次郎任せられ、組員四拾五人を有した。翌拾二年一月二拾六日、更に腕用ポンプ一臺を購入すると共に、定員九拾六名に改定二部制となつた。大正十五年三月藤名庄吉組頭となるや鐵骨火見櫓を建設し同年十月第一部に腕用ポンプ一臺を購入した。昭和四年藤名組頭退職するや小頭二川善治其後を襲ふて組頭に任せられた。

上條消防組　從來バケツ消防組なるものあり、各字區長宅に消防器具類を備付け、有事の際各戸より出場消防に努め居つたが、大正十三年三月二十二日組頭遠原多郎外四十九名より成る公設上條消防組設置せられ、東水橋町より腕用ポンプ一臺を讓受け、翌十四年四月木造望樓臺を新設し、村當局も毎年四百四十八圓の警備費を計上するに至つた。昭和二年十月二十日鹽原組頭辭職し、堀田彌三郎其後を襲ふて組頭に任せられた。

下條消防組　從來バケツ消防組なるものあり、各字宅に消防器具を備付け、有事の際、各戸より出場消防に努めて居つたが、大正十三年三月二十二日腕用ポンプ一臺を備付け公設下條消防組を設置し、組頭角田又造以下組員三十三名を有した。昭和三年九月鐵骨望樓臺を建設し、村當局も警備費として毎年三百二十圓を計上するに至り、昭和四年二月塚原安太郎組頭に任せられた。

三郷消防組　從來バケツ消防組なるものあり、各字區長宅に消防器具類を備付け有事の際出場消防に努め居つたが大正十五年三月十二日元西三郷村に組頭以下四十九名を以て組織せる公設消防組の設置を見、同年五月現組頭正木芳藏任命せられ、其後元東三郷村消防組と併合せし爲に昭和二年四月二十二日に變更、定員八十一名と改定するに至つた。

六、上市警察署管下

上市消防組　藩政時代に勇敢義俠を以て聞えし消防組あつたが詳細は不明。明治維新頃より小柴伊左衛門なるものを組頭に推し、組員七十名を以て組織せられた。明治十三年平井忠平組頭時代藩の頃前田侯より下賜せられた龍吐水二個旗一基組員百一名となつて居つた。明治二十七年五月勅令に依り公設消防となり翌二十八年腕用ポンプ一臺、同三十五年同四十一年に各腕用ポンプ一臺を購入した。大正元年消防組紀念碑を三杉公園内に建設す。此費用千三百圓に上つた。同年更に蒸氣ポンプ一臺を購入。同二年平井忠平辭任し平井一見組頭に就任し、大正十

四年自動車ポンプ一臺を購入すると共に組員二十名を減じた。同年平井組頭辭任につき齋藤正金就任三ヶ月にして辭任し昭和三年五月二十五日荒尾正信就任翌四年九月二十五日辭任、同十月四日椎名半次就任し組員八十二名を有して居る。

宮川消防組　大正九年四月二十五日私立若杉消防組設置組員四十九名あつたが同年十月十八日公設に變更し、土肥政二任せられ、大正十二年八月三十一日警鐘臺を建設した。

山加積消防組　大正五年山加積在鄉軍人會に於て輕便ポンプ一臺を購入せるが大正十年七月公設山加積消防組に變更し同十三年四月同村下坂伊左衛門の寄附により火の見櫓を建設した。定員は四十九名。

弓庄消防組　大正四年三月五ヶ村青年發起にて五ヶ村私設消防組を設置すべき議起り同年六月二日費用二百三十圓を以て器具一式を整へ同日發會式を擧げた、當時組員三十三名。同五年二月二十七日公設に變更した。同十年六月十日大字野積新村に木造警鐘臺を建設した。

柿澤消防組　大正元年一月二十日柿澤村有志山川重次郎及總代中山平吉郎等發起となり腕力ポンプ一臺を購入し私設消防組を組織し非常の場合は村民出場し總代主催者となり組員を指揮し費用は村費より支出して居たが昭和二年二月十八日中山平吉郎等の奔走により公設消防組となり組頭野澤遠治外三十二名の組員を有した。同四年三月十五日野澤組頭辭任につき藤繩慶二後任となり同年六

月十七日藤組組頭辭任と同時に中山平吉郎組頭に任せられた。

大岩消防組　大正十三年二月二日大岩村大松青年等十五名にて『バケツ』消防團を組織し青年團長嘉藤三郎組頭となり腕用ポンプ一臺を購入し同十五年二月五日組員四十三名を以て私設消防組を組織し組長に嘉藤與八郎を擧げたりしが又昭和三年一月一日大字大岩私設消防組長高橋與七外組員三十三名を以て組織せる私設消防組と合併し組員四十九名を以て公設消防組を設置するに至つた、瀧川作藏組頭に任命せられ同年八月瀧川組頭死亡と同時に嘉藤利之組頭に任せられた。

雪杉消防組　明治二十五年雪杉村北島有志富樫儀次郎、富樫善左衛門等發起にて腕用ポンプ一臺を購入し村民協力之れが運用に當りしが明治三十九年同村庭田安次郎組頭となり組員二十五名より成る私設消防組を組織した。同四十三年同村大字稗田鳥久義發起となり腕用ポンプ一臺を購入し組頭に早川勇造を擧げ組員五十名を以て私設消防組を設置した。大正二年六月三日北島を第一部稗田を第二部とし公設雪杉消防組に變更し第一部に三十三名第二部に四十八名の組員を以てし組頭に有澤大助任せられた。其後大正八年十一月第三部、大正十四年四月第四部を增設し第三部小頭部長に杉本謙二任せられた。大正十二年六月五日組頭有澤大助辭任につき鳥久義組頭に任せられ全組員百二十九名を有して居る。

南加積消防組　大正十年八月七日南加積村鄉柿澤有志土肥才次郎發起により南加積公設消防組を

組織せられ大正十四年九月四日更に吉田才吉の發起により第二部組織とし組頭に吉田才吉以下百二十八人を以てし腕用ポンプ一臺警鐘臺を三ヶ所に建設するに至つた。

七、五百石警察署管下

五百石消防組　嘉永元年五百石町松本開、前澤屋林藏米澤屋七郎外二十人發起となり、松本開火消組を組織し、前澤屋林藏、米澤屋義七郎の兩人が火消頭に就任し、火消中頭としては松本開、日中屋由五郎、白岩屋某の兩人就任した、中頭は當時の小頭に相當する。當時の器具は蔦に提灯手桶筵等であつた。文久二年中に中頭日中屋由五郎、白岩某は辭任し松本開堀田代治、荒木久右衛門の兩人就任し、同時に中頭を横目と改稱した。慶應二年三月下旬始めて龍吐水を備付けた。明治二年中に横目堀田代治荒木久右衛門の兩人辭任した。同五年米澤屋義七郎病死し組頭は前澤屋一人となつた。同二十二年中組頭前澤屋林藏外火消は松本開有志の寄附を得て現在の第一號ラフランス腕用ポンプ一臺を購入した當時町民には頗る目新しく感じた同二十三年中横目として松本開上田周雄就任した。明治二十四年三月二十一日臺松本開酒井小平方より出火し、折柄南風烈しく乍ち同家以北を燒き盡し午前十時より午後二時鎭火迄に松本開八十五戸飛火に神社一住家四戸を灰燼に附し同町未曾有の大火であつた。火元以南は消防の盡力に依り其災禍を免れたのでポンプの偉大なる効力を賞賛し型二十五年第二號獨逸型腕力ポンプ(百六十圓)を購入した、當時前澤屋林藏老年の爲め長男

藤木眞二が組頭代務をして居た。

明治三十年十一月五日公設消防組の創設を見ると同時に藤木眞二組頭に就任、横目を小頭に改め引續き上田周雄、林傳右衛門、野崎善吉の三人にて組の操縦を爲し消防手三十三人を統轄した。公設と共に上町に火ノ見櫓を設備した。明治三十六年六月下旬松本開田邊梅次郎より出火し二十三戸全焼したる際顯る消防組の活動を見るに至り、同年富山市南新町の大火に應援し頗る名聲を發揮した。同三十七年堀小頭病死し松本開石原吉三小頭に就任。大正二年一月七日町費一千六百四十四圓九十錢を以て蒸汽ポンプ(市原二五號)を購入した。同年三月五日藤木組頭以下小頭四人辭任し同月十四日金木次一郎組頭に松島庄之助、廣明幸太郎、森義行、小頭に就任。同五年十一月一日松瀬政治小頭に就任。同六年四月二十八日金木組頭辭任したるを以て同年五月十八日菅原喜八郎組頭に就任。同七年二月二十一日組員八十五人に増員。同七年四月十二日齊藤松二、同九年二月二十一日野崎行雄小頭に就任。同年四月十二日組員八十六人に改定。同年十月一日獨逸型腕用ポンプ一臺を購入、續て十年五月十日同腕用ポンプ一臺を購入し何れも町費六百圓を投じた。同年十一月七日器具置場二棟、下野口、上野口に建設した工費三百八十圓。併せて火ノ見櫓も建設した工費四百五十四圓四十錢何れも町費支出である。

松本開火消組時代毎年賀正月卽ち現在の二月廿五日を以て火祭を爲し居た關係上、此日を記念す

る爲め五百石消防組の出初式は毎年二月二十五日と定めてある。

昭和二年三月二十五日五百石町役場前に纖骨火ノ見櫓を建設した、其高六十六尺工費一千三百三十圓(東京在住五百石町出身藤木義一寄附)同十二月二十日より五百石町役場前火ノ見櫓下に消防屯所を建設して町費二千圓支出。昭和四年六月一日菅原組頭病死し同月二十日金木一郎就任。同八月中松島小頭辭任同九月二日菅原德三就任。

釜ケ淵消防組　大正十四年三月十八日公設消防組となり定員六十五人、腕用ポンプ數臺を有し米道、末三賀、道源寺の三ケ所にポンプ置場を分置し警鐘臺は釜ケ淵村道源寺信用組合前庭に設け尙ほ道源寺置場にポンプ一臺を新調設備した。

高野消防組　從來野町、米澤新、高原の三ケ所に私設消防組ありしが大正六年十月十三日之を合併し公設消防組となつた。歷代組頭は

初代	山本龜次郎	在職一ケ年	
三代	田中儀次郎	在職二ケ年	
二代	藤井彌市	在職二ケ年	
四代	藤井彌市	現任	

公設消防となつてから火災に出動せしこと三十一回、水害に二回暴風警戒に四回其他の警戒に百十八回である。大正九年傳染病豫防事務に從事し縣警察部長より感謝狀。大正十三年　攝政宮殿下行啓當時警備に從事した廉により縣警察部長より感謝狀。昭和二年一月大雪排除に努め交通に便益を與へた功に依り縣警察部長より賞狀を受く。

上段消防組　大正十一年上段村鵜田私設消防組を公設に變更する爲に私設消防組員は非常に努力し寄附金等を集め器具器械を充實し昭和三年五月二十七日に至り認可を受くるに至つた。

大森消防組　明治四十二年頃時の村長藤城喜左衛門消防の必要を力説し同四十五年一月私設消防組を組織し組頭に松井與太郎就任。大正三年四月公設となり組頭に深見孫右衛門就任。同十年十月辭任夫れより藤城喜右衛門昭和三年十月三日迄組頭となり高田政信其後を承け現在に至つたので昭和三年四月一日鐵骨望樓臺を建設した、其工費七百圓。

寺田消防組　明治十八年一月寺田村各大字總代會に於て火防思想の普及を計る爲め毎夜村民二名宛交替にて太鼓柏子木を打鳴らし各大字内を一巡することに決議し但し暴風の際は終夜續行することゝし、而して各戸毎に試力製の用心樽水三升入のもの一個乃至十個を備付け有事の際は總代宅に備付けの大太鼓を亂打して村民を集め消火其他の警固に努むることを堅く守る條件を決議し爾後之を厲行しつゝありしが歳月を經るに從ひ器具等の破損より自然閑却さるゝに至り明治四十三年三月に至り當時の青年團長は紀律ある消防組織の必要を認め青年團附帶事業として私設消防組を創立し組頭一小頭四係長五消防手四十九名を以て編成したが、同四十四年二月に至り公設消防組となり組員五十名を定員とした。同四月二十五日私設消防組より寄附のポンプ一臺にては不備を感じ新に腕用ポンプ二臺を新調した。大正元年十一月九日縣警察部長より成績優良の賞狀を受け、小頭清水吉

左衛門は大正十三年二月十一日縣知事より勤功證書を授與せられた。同年四月一日村崎組頭は組内に宣傳部を設け組頭を部長とし火災兼防衛生交通時間厲行思想善導等の宣傳に努め大に其成績を擧げた。同十五年十一月組員互助及弔慰規定を制定した。昭和三年十一月十二十三兩日村内小學校に於て消防展覽會を開き村民に警火思想及消防の理解に努めた。組現在の編成は

組員數六五（組頭一　小頭四　係長六　消防手五四）

組頭の異動は左の如くである。

大正六年十二月十五日　組頭　林　利　次郎
同　十二月二十日　組頭　高井忠右衛門就任
同十三年　三月　三月十四日　組頭　高井忠右衛門辭職
同　組頭　村崎　吉助就任

同十五年十月三十日創立十五週年記念式及組員死亡者追悼會を催し併せて功勞者の表彰式擧行。

舟橋消防組　舟橋消防組は本村竹内、稻田與七郎が　大正天皇御卽位の御大典を記念する爲め消防器具左記内譯の總額六百五十圓を以て

腕用三號ポンプ一臺　竹梯子一丁　處口十三丁　纏一　旗一　高張一
服裝三十人分

を寄附せしにより大正四年十一月二十七日公設消防組となつた。創立當時組頭一小頭二消防手三〇にして村長野村惟命組頭に就任した。

同五年四月高ナ八間半の木製警鐘臺と器具置場を村内大字竹内に設け。同七年四月十二日消防手十名増員。同九年四月九日野村組頭辞任につき同日鹽原義定就任。同十二年七月十三日鹽原組頭辞任、同日稻田健治就任して現在に至る。同十一年四月九日五百石區域消防聯合演習を舟橋村に開催同十四年四月二十六日創立十週年記念式及組功勞者追悼會を營んだ。同十五年四月十一日竹内、嶋田淺松より鐵骨警鐘臺價八百五十圓を寄附した。昭和三年十一月二十八日　今上陛下御大典記念として腕用二號ポンプ一臺(八百二十圓)を新調した。同四年八月第二器具置場を竹鼻村に設置した。

利田消防組　大正二年十二月六日從來の私設消防組を公設消防組とした。當時の駐在安田巡査は村有志に消防の必要を力說し村民も之れに共鳴し公設消防としての機械器具一式を備付くることになつた。

立山消防組　大正九年九月十一日公設消防組の設置を見るに至つたので其以前は私設の消防も無く～當時の軍人分會長佐伯則智が公設消防の切要なることを主唱し公設設置を見るに至つた。創始以來組頭として佐伯則智、佐伯豐邦、成瀨清吉を經て現組頭田村政次郎（昭和二年十二月二十四日就任）に至つた。

下段消防組　大正元年中、下段村榎に岡崎平太郎を組頭とする私設榎消防組創立され、同三年三月下段村一圓より成る公設消防組設置せられ組頭に杉谷勘次を擧げ同十二年杉谷組頭辭任と同時に

高井健二組頭となり今日に至る。大正十三年創立十週年式を擧行した。

八、三日市警察署管下

三日市消防組　明治初年頃三日市消防櫻井組を組織し當時松三郎なるもの之を指揮し居りしが明治十四年頃に至り組頭及小頭等を定め龍吐水三臺を購入し石塚清兵衛之を指揮して居た。同二十四年腕用ポンプ一臺購入組員約三十名となる。同二十七年勅令發布せらるゝや同年五月二十八日公設三日市消防組となり漸次設備改善に努め、昭和三年二月二部制となる。此間組頭となつたものは辻武平、中田吉平、辻武夫、柳川平吉にて柳川組頭は昭和四年十一月四日辭職に付現組頭寺田彌右衛門就任した。

生地消防組　同町は遠き昔より六、七百戸の戸數を有し漁民多き貧村で火災の度數も比較的多かりし故か舊藩時代より火防組を置きて火消頭四人、火消役三十人を中橋川南北に配置し頗る嚴密周到な取締りをやつた。明治維新當時も火消頭は村内に於て相當名譽ある地位を占め村役人として尊敬せられて居た。當時の消防器具としては綱一筋、提灯十五張、刺又一個、鳶口十五丁、扇一個、手桶五十、大桶一個を肝煎より交附せられて居た。明治十七年五月宮崎康臣戸長時代に私設消防組を設置し組頭に米生清七郎副組頭に川端明吉を擧げ小頭四名消防手三十七名を有して居た。同二十年米生又吉組頭となり、同二十三年二月七日田村文平村長時代に腕用ポンプ一臺を購入した。同二

十六年小柳宗三郎組頭となつた。明治二十七年五月二十八日公設生地消防組織せらるゝと同時に舊來の幹部を改選し田中喜三右衛門組頭となり小頭三名消防手四十六名とし器具としては腕用ポンプ二臺、纏一本、鳶口十五丁、高張提灯二個、馬提灯五個、手提々灯十個、梯子二個、刺又一個、鋼一筋、輜重車一臺、消防旗一旒を備付けた。同二十八年九月十八日德久知事より火災鎭火の功績により金一封を賞與せられた。同四十二年九月十一日田中組頭死亡により同十二月十四日船尾幸助組頭となり小頭一名增員消防手六十九名に增員となつた。同四十五年六月二十日腕用ポンプ一臺購入大正二年十月六日大暴風雨襲來の際遭難船人救助の功に依り縣知事（東國）より感謝狀を受く。同十三年六月十四日縣令に依り消防組々織變更し消防手十名增員し七十名となつた。同十四年三月二十五日米國ノーザン式ガソリンポンプ一臺購入。同十四年五月一日二部制に變更するに至り同年六月一日部制廢樹立式擧行小頭二名增員消防手を增員して七十八名となつた、同時に鈴木式ガソリンポンプ一臺購入。同六月十四日中陳由次郎、石田寒次郎表彰せられた。同十五年六月六日三日市作次郎、田中利八吉、紙尾元次郎表彰せらる。同十一月十七日鍛冶小頭都長縣知事より勤功證を附與せらる。昭和二年三月二十二日鐵骨火見櫓を新設。同十一月十四日神子田直次郎組頭となる。同三年十一月一日田中喜三次郎（小頭）島倉梅四郎、奥村德次郎（消防手）表彰せらる、同年十二月四日御大典警備に盡瘁せる爲め縣知事より感謝狀を受く。

同四年一日神子田組頭組代表として御親閱に參列の光榮に浴した。同四月二十一日大暴風雨の際警戒中消防手船屋力次郎重傷を負ひ遂に殉職す依つて大日本消防協會より金二百五十圓、縣義會より百圓、三日市支部より二十五圓組より三十圓に生花等贈つた。同年十月五日秋季點檢演習擧行に際し組にて阿彌陀堂芦崎浦補助班長解任につき在任中の功を表彰した。

浦山消防組　大正十二年四月三十日私設浦山消防團を組織し團長に河村守之輔、副團長に佐々木孝を擧げ活動し來りしが同年九月公設となり組頭に河村守之輔就任。昭和二年十月河村組頭辭任佐々木孝組頭に就任。

若葉消防組　明治二十五年四月十八日西田牧三の發起にて小型腕用ポンプ一臺購入し古山部落に於て志當山組なる私設消防組を組織したが同三十七年九月十一日公設となつた。

大布施消防組　大正十三年五月頃より私設消防組を組織して居たが同十四年三月二十七日公設となつた。

下立消防組　大正九年十月二十四日下立村消防團組織されたが、同十一年六月二十六日村會に於て公設に關する費用計上決議し同年八月四日公設となつた。

内山消防組　大正十四年七月廿九日公設消防組織案決議せられ同八月十四日公設認可となる。

村椿消防組　昭和三年十月九日公設消防組となつた。

東布施消防組　大正十四年四月二日私設消防より公設消防組となつた、當時組頭は宮下吉次郎、第一部長山本由藏第二部長村田彦右衛門他に小頭二名であつた。同十五年十月二日山口平作組頭就任。昭和三年十二月十四日縣知事より御大典警備の感謝狀拜受。同四年一月山口組頭御親閲に參列の光榮に浴した。

田家消防組　大正十三年五月二十四日設立、組頭田中岩次郎小頭二名消防手四十二名。

前澤消防組　大正十一年八月一日設立、組頭中島肇小頭二名消防手三十三名。

荻生消防組　明治四十四年四月、當時村長森内德次郎は村有志と協議し金六百餘圓を投じ大阪より腕用ポンプ二臺を購入、同七月一日月主會總會を開き私設消防組を組織し二部制をとり團長に中島榮吉を擧げ部長二名消防夫四十五名(一部二十一名二部二十四名)より編成した。大正七年私設消防團を解散し公設消防組を組織するに至り消防側を消防組に改めた。

石田消防組　火消なるものゝ創立したのは明治二十八年頃で一、二部落民有志の手によりて成つて居たので維持困難となり三ケ年餘にして自然解散するに至つた。後大正四年八月在鄉軍人分會の奮起により在鄉軍人を以て成る私設消防組を組織したが、同七年四月十二日公設消防組に變更せらるゝに至つた。公設後火災等に出場度數十九回(內村內八回他町村十一回)に及び同十二年七月腕用ポンプ一臺購入。同十四年十一月ガソリンポンプ一臺購入。昭和二年七月腕用ポンプ一臺購入。同

四年三月鐵骨望樓臺建設。

九、魚津警察署管下

魚津消防組　明治三年富田半右衛門鍛冶與右衛門等相圖り魚津消防組を編成したが同十六年七月其筋の認可を得て魚津消防組を設置した、當時組員五十一人にて組頭に山田榮右衛門を擧げ龍二本及其他の機具を設備して居た。同十八年小川傳之丞組頭となつた、組員六十人にて三部制であつた同年川上宗平組頭に就任し、同二十三年北洋組用ポンプ一臺(三百圓)購入、同二十七年小戶組用ポンプ(三百圓)一臺購入。同二十七年六月一日消防組規則の下に公設消防組となつた。同三十五年朝田新兵衛組頭となつた。同四十年蒸汽ポンプ一臺(金二千圓)購入。同四十一年四部制とし組員百八十一名に改定。大正五年六月二十六日木下清太郎組頭に就任。同十一年四月蒸汽ポンプ一臺購入。同六月十五日組員を百九十八人に改め五部制とす。同十三年九月十七日ガソリンポンプ一臺購入。同十四年二月十一日富山縣消防義會より表彰旗授與せらる。昭和三年七月二十三日ガソリンポンプ二臺購入。同二年三月三日板井文治組頭に就任。同三年五月ポンプ自動車一臺購入。同四年三月腕用ポンプ二臺魚津町內私設消防組へ拂下げた。

經田消防組　明治四十二年五月十七日創設、當時腕用ポンプ一臺組員四十八人、組頭に朝野牧次就任。大正十五年ガソリンポンプ一臺購入。同十二月鐵塔火見櫓建設した。

道下消防組　大正十二年七月十八日創設、組員三十三人にて組頭に岡三平就任。昭和三年七月二十七日高見源二組頭となる。同四年四月二十六日定員四十九人に變更。

片貝谷消防組　大正十四年三月十八日創設、二部制にて組員百二人組頭に黒瀬順平就任。昭和二年五月六日三部制に改め、同七月十三日三由助之丞組頭に就任。

西布施消防組　大正十四年七月十日創設、二部制組員六十五人組頭に紙谷竹次郎就任。同八月一日入井政憲組頭に就任。

松倉消防組　大正十四年八月十四日創設組員五十人組頭に石橋安右衛門就任。昭和二年一月十五日河崎直義組頭に就任。

加積消防組　大正十四年九月四日創設組員四十九人組頭に宮田六右衛門就任。

上中島消防組　大正十四年十二月四日創設組員四十九人組頭に今井嘉能就任。

下中島消防組　大正十五年四月十四日創設二部制組員百二十人、組頭に梅原幸次郎就任。

天神消防組　大正十五年七月九日創設、組員三十名、組頭に西田作次郎就任。昭和三年四月二十七日定員三十六人に變更。同四年三月十五日關口正信組頭に就任。

下野方消防組　大正十五年七月十六日創設組員三十三人、組頭に佐竹勘左衛門就任。昭和四年三月二十九日定員三十五人に變更。

上野方消防組　大正十五年九月三日創設、組員三十三人、組頭に廣田良作就任。

十、泊警察署管下

泊消防組　明治二十七年泊町公設消防組設立。その以外に各町に腕用ポンプ一臺宛所有し各私設消防として各町内の警戒に從事し居たるも明治四十一年に至り此等私設消防を合併して公設消防組に編入すると共に腕用ポンプ二臺及蒸汽ポンプ一臺を購入。大正十一年オートバイポンプを增設すると共に組員七十三人に增員。昭和三年三井式自動車ポンプ購入と共に組織を變更し二部制とし小頭一名增員し、目下組頭一人小頭都長二人小頭四人幹部補助員五人消防手六十二人を以て組織す。

入善消防組　明治三十九年私設消防組より公設に組織變更し、目下組頭一人、小頭四人、消防手六十人にて私設時代の沿革不明である。

横山消防組　大正三年五月私設消防組を設置したが、同十年七月泊署長片岡警部の壹力に依り同七月二十八日村會に於て決議を見るに至り公設消防組を組織するに至つた。目下組頭一人小頭二人消防手三十人にてガソリンポンプ一臺腕用ポンプ三臺を以て同村一圓の警備に當る。

宮崎消防組　明治二十一年私設消防組として組織せられたが詳細は不明である。大正十一年九月公設消防組に變更、組頭一人小頭二人消防手三十人を以て組織せられガソリンポンプ二臺、腕用ポンプ四臺を有して居る。

横消防組　私設消防は維新前後より組織され居たるが大正十一年十月公設消防組設立、組頭一人小頭二人消防手三十人を以て組織しガソリンポンプ一臺腕用ポンプ二臺を有して居る。

飯野消防組　大正十三年公設消防組設置組頭一人小頭五人以下七十五人を以て組織して居る。

南保消防組　大正十四年十二月公設消防組設置腕用ポンプ一臺ガソリンポンプ五馬力一臺購入組頭以下三十三人を以て組織す。昭和四年十二月御大典事業として十馬力ガソリンポンプ増設した。

大蒙庄消防組　大正十二年三月公設消防組を組織す。定員組頭一人小頭二人消防手三十人の所、昭和二年八月オートバイポンプ購入と同時に小頭一人増員。昭和四年四月第一部、第二部の二部制とし組頭一人小頭部長二人小頭二人消防手六十人に變更。

山崎消防組　大正十一年七月公設消防組設置組頭一人小頭三人消防手四十五人を以て組織した。

五ケ庄消防組　私設消防組として大正三年より設置されたが同十二年三月公設に變更、同年六月二十四日消防組樹立式擧行。同十三年十一月陸軍特別大演習に際し小頭一人消防手三人を御警衛勤務の爲め石動町に派遣。同月八日　攝政宮殿下本縣行啓の際小頭二人消防手五人之れが警衛勤務に服す。

愛本消防組　大正十三年八月二十八日公設消防組設置、組頭一人小頭三人消防手四拾五人を以て組織した。

青見消防組　明治四十三年十月十六日當時の泊署長村井警部管轄の結果組織を見るに至つたので組頭一人小頭二人消防手三十人腕用ポンプ一臺所有せしところ大正十四年ガソリンポンプ一臺購入の爲め小頭一人消防手十五人增員、更に大正五年腕用ポンプ一臺購入した。

野中消防組　從來在鄉軍人青年團員を以て自警團を組織し腕用ポンプ一臺を購入私設消防として警戒に從事して居たが大正十四年八月一日公設消防組に組織變更、新にガソリンポンプ一臺購入。昭和二年四月當時の消防組々頭小頭の全部辭職、同年現在幹部後任となり昭和四年四月更に腕用ポンプ一臺を購入した。

青木消防組　大正四年三月三十一日腕用ポンプ一臺購入し、私設消防組設立。同十年十二月十日公設消防組に變更。同十三年十二月一日及同十五年五月八日の二回に腕用ポンプ二臺購入。組頭一人小頭二人消防手三十三人を以て組織す。

上原消防組　大正六年私設消防組を設け之れが災害警備に從事して居たが同十二年二月二十六日公設消防組に變更した。

小摺戸消防組　大正十四年十一月消防組を設置し目下腕用ポンプ二臺備付け組頭一人小頭二人消防手三十人を以て組織す。

竹山消防組　大正十四年公設消防組を設置、目下腕用ポンプ二臺を備付け組頭一人小頭二人消防

手三十人を以て組織す。

新屋消防組　昭和五年二月二十八日の創設にかゝり組員五十人(内組頭一小頭四)、組頭は中山藤平で腕用ポンプ四臺輓車一を設備してゐる。

十一、八尾警察署管下

八尾消防組　八尾町は元祿五年より文化十三年に至る百二十八年間に十回の大火災があり町民一般に火防機關の完備を渇望するに至り文化十四年に微かな火消組なるものが出來た。之れが抑も八尾町に於ける消防組々織の濫觴である。其後火消組の職務も漸次擴大せられ文政三年に火災を未前に防ぐべく火防條項數ヶ條出來て嚴守された結果同年より明治初年に至る約六十年間に小火災三四回あつたが此間消防の怠にすべからざることを痛感し明治元年五月消防組頭に薗島屋宗三郎を擧げたるも同人家事の都合で辭任し一時中絶の狀態であつたが同八年七月十五日上新町に大火災起りたるにより遽かに消防組の必要を感じ同九年二月消防組頭に玉生瀧吾纏頭に片岡七五郎、吉友吉助を推し又消防夫五十人を募り始めて消防組らしきものが出來た。

同十三年七月消防組頭に片岡七五郎纏頭に乘嶋善五郎、藤森理七を推し同十八年三月に消防組頭は田中龜太郎に變更された。同二十二年町村制實施に當り町規程の公設消防を設け警備費として十七圓六十二錢八厘計上された。翌二十三年七月十七日町規程の八尾消防組規則を定め組員總數八十

人(組頭一人小頭二人消防夫七十七名)を採用し警備費五百六十五圓十四錢を計上した。同二十四年一月二十五日消防組規則を改正し組頭の下に幹事一人を置くことゝなり幹事に乘嶋善五郎を町會に於て選任し、同二十五年十月十五日腕用ポンプ一臺購入、同二十六年四月一日八尾消防組の規程改正。二十七年二月十日勅令を以て消防組規則發布せらるゝや八尾町區域は八尾町一圓として人員六十人となり即ち組頭に根上長次郎就任、小頭二人組員五十七人であつた。同三十年四月十九日橋爪治郎作組頭に就任、同三十二年九月八日大洪水あり井田川、別莊川、野積川氾濫消防組出場警戒に從事した。同三十三年五月二十六日上新町諏訪町の大火ありて同年六月組員八十人に改定更に小頭四人任命。同三十八年橋爪組頭辭任、九月十一日岩佐安次郎組頭に就任。同四十一年十月第一號蒸汽ポンプ一臺購入。同四十四年二月二十三日岩佐組頭辭任、同十一月九日東町田畑菊次郎方出火東町五十四戸延燒した。大正三年八月十三日大洪水あり流失家屋二十三棟に及び組員連日出場流失橋梁の假架設等に努力した。同五年六月八日下新町富士のい方より出火戸數五十七戸類燒した。同九年九月第二號蒸汽ポンプ一臺を購入。大正十一年四月四日下新町村田十代次郎方より出火、燒失戸數三十五戸、各火災に努力せる結果十四年二月一日消防組として成績優良他の模範たるものとして知事より旌表狀一通授與せらる。

同十五年三月六日三沈社(製糸工場)全燒。昭和三年四月十九日七千四百圓を投じノーザン式グラ

ハム自動車ポンプ一臺購入。現在組員は組頭以下九十八人で三部制である。

八尾消防組頭　橋　爪　藤　吉

明治四十四年五月十三日八尾消防組頭拜命。大正九年九月富山縣消防義會創立に功勞尠なからざる故を以て感謝狀に銀盃一個を受く。同十一年十月十五日富山縣知事より勤功證書、富山縣消防義會長より勤功章を授與せらる、同十三年十一月陸軍特別大演習に際し御警衛補助員となる。昭和三年十月五日御即位大典に際し奉迎の爲め京都に出張す、同十一月十六日御大典の地方賜饌に與る、同四年一月六日全國消防組員大檢閲に參列す。

杉原消防組　明治三十年杉原村井田部落に消防方と稱し同部落より數名を選拔し之れに袢纏鳶口股引足袋提灯等を支給し有事の際警備の任に當らしめた其後數年を經て部落有志の決議に依り輕便ポンプ三臺バケツ十個を購求し有事の際之れが使用方を青年會へ依托した。然るに明治四十年度に二回の火災に遭ひ前記の器具にては何等の用を爲さざることを自覺し腕用ポンプの必要を痛感し當時の青年會長黒田竹次郎は小柴八尾警察署長に斡旋方を依頼し八尾町備付の腕用ポンプ一臺を無條件に讓受け之れが維持費二百圓は部落有志の寄附を仰ぐことゝし明治四十四年十月黒田竹次郎自ら會長となり井田青年消防義會と命名して活動し來つたのが同村消防組の濫觴である。

後同村黒田部落の村元菊次郎は黒田大杉兩部落青年を擁して腕用ポンプ一臺を購求し大黒消防組

と稱し義俠的に附近部落の警備に當つたが大正十一年當時の村長黒田竹次郎及駐在巡査須山覺次郎の斡旋に依りポンプ一臺を大杉部落に讓り器具機械組員に於ても公設消防と何等軒輊なき大杉消防組を設置するに至つた。大正十三年五月三十日杉原公設消防組に變更組織を見るに至り黒田竹次郎組頭に就任、井田部落の私設消防を第一部とし大杉私設消防を第二部とし總べての器具機械を刷新した。後黒田組頭辭任し坂田美信、山田兵庫の組頭更迭あり昭和四年七月二十六日現組頭新村菊次郎就任した。

是より先大正十五年坂田組頭時代に第二部の鐵筋警鐘臺新設。昭和四年第一部の腕用ポンプを廢しガソリンポンプを備付け組員は組頭以下六十七名を有する消防組となつた。

蜜牧消防組　大正七年三月私設高熊消防組組織せられ當時腕用ポンプ一臺に組員は組頭一名小頭二名消防手二十五名の所、大正十年五月二十三日公設消防となり組頭一名小頭二名消防手三十名、ガソリンポンプ一臺を備ふることゝなり高木治郎太郎組頭に就任、同十三年三月高木組頭死亡、同年同月現組頭高木治郎就任するに至つた。

熊野消防組　大正十二年八尾警察署長上野榮次郎及び同村駐在巡査河村佳太郎の盡力により當時の村長大上善正が公設消防組設置の件村會に提案直に可決を見、同年十二月十四日公設認可となり三輪三治組頭に就任組員は組頭以下三十三名である。

千里消防組　大正十二年六月十三日公設消防組を設置し組頭に澤野竹次郎就任、組員三十三名で腕用ポンプ一臺を有して居る。

山田消防組　大正四年三月山田村大字湯村及中村に各私設消防組あり何れも腕用ポンプ一臺を有して居たが、同十二年十二月一日公設に變更組織せられ二部制を採り組頭以下組員九十七名、組頭は平等直次郎、谷川美藏を經て昭和二年三月二十六日現組頭吉田嘉一郎就任することになつた。

宮川消防組　大正十三年十月二十二日公設消防組設置せられ組頭に池内利里就任、組員三十三名小型ガソリンポンプ一臺を有して居た。池内組頭間もなく辭任し、澤井秀信後任組頭に任命されたが同十五年七月同人も辭職し同時に現組頭池内佐次就任、昭和四年十月二十三日小森式十四馬力ガソリンポンプ一臺を購入した。

池多消防組　土代部落にて大正三年十二月腕用ポンプ一臺を購入し私設消防組として活動したが同十四年八月九日土代部落の器具機械全部を寄附して同村公設消防組に變更し現組頭肥田健耕組頭に就任、目下組頭以下組員三十三名を有して居る。

保内消防組　大正十五年五月十四日現村長山下龜次郎、同村有志大石虎次郎、村井儀治等の主唱により公設消防組を設置し山下村長組頭に就任し第一部腕用ポンプ一臺部員四十三名、第二部にガソリンポンプ一臺部員三十八名より成り服裝は悉く洋服なりしも昭和三年に剃子の法被腰引頭巾を

新調し五年一月全部に羅紗半マントを支給し設備充實せること稀に見る所である。

須原消防組　大正十三年十一月黒瀬谷村須原部落に私設消防組としてポンプ一臺を有するもの組織せられしを始めとし、大正十五年六月二十五日公設に變更組織せられ村上長市郎組頭に就任、昭和四年八月二十四日村上組頭辭任と共に現組頭水本林吾就任した。

速星消防組　昭和二年四月三十日同村淺野長太郎自家用腕用ポンプ一臺の寄附により組織せられ組頭以下組員三十三名、同年六月四日組頭淺野武雄外小頭二名就任引續き消防手の任命ありて同年十一月十三日舊樹立式擧行。同四年一月二十三日淺野組頭辭任と同時に現組頭奥野義衛就任することになつた。

十二、高岡警察署管下

高岡消防組　町内の安寧を維持せんため、慶長年間、高岡町開市當時より消防の必要を認めたやうで、各町の住民は、戸々順次に警邏の任に當り、之を亭主番辻番一時番などゝ稱した。又別に常置の警邏人を備ひ、夜々擊柝打歇以て火盜を警め、兼ねて時刻を報せしめ、之を番太郎と名けた。就中失火警備には、前田利長公の如きも常に嚴戒を加へられしことは、其書翰の上に屢々見えて居る。故に高岡町の消防は、夙に寛永の頃より組織せられ、其完成せしは明和の頃、町率行小川八左衛門の定めたもので、即ち各町消防夫の員數（各町五名乃至二十名）消防具（水籠、水溜桶、雲口、

梯子、目印小旗、高提灯）の設備數等を規定し、且高岡町奉行の管理に屬する官舍、並に藩有營造物等に關し、非常警備の分擔區域を定むる等、其用意頗る周到なるものであつた。文政四年六月、大火災ありてより一層消防に注意し、翌五年各町消防夫の員數を改正し、各町に用心水桶、川堰控杭、莚、槌等を備へ置かしめ猶ほ用心水裁許を置き、水量多き井戸を見立て、晝は『水元』と記した旗を、夜は提灯に水戸と記したのを掲げ、非常の準備を爲さしめた。嘉永年間己に立派な組織となつて居たと見え、同六年九月町奉行太田勘左衛門は、藩主の高岡に宿泊するに當り、町火消並に若火消四組の者は常々火消道具取揃へ置き、若し火災あらば消防に從事すべき旨告達して居る。

明治維新後に至りては、別に規則の制定も無く、舊來の慣行によりしが、富山縣消防組規則設けられ、明治二十三年頃、之れに準據し、高岡全町を東西南北及び中の五組に分ち、毎組に組頭一名小頭一名消防夫三十名以上六十名以下之に屬し、一ヶ年毎組二十圓宛の手當を支給し、龍吐水を備付け、以て警備の任に當らしめた。

明治二十七年五月十八日、公設の高岡消防組となり、明治三十四年頃までも五部制で各部消防夫四十名小頭二名宛にて組頭以下の定員は二百十一名であつた。同四十五年四月五日四部制に改め組頭以下百四十九名に變更した。大正四年四月二十三日組頭以下二百一名に變更し大正六年四月一日常備制を設定し、十一、十二、一、二の四ヶ月間各部器具置場に三名宛常詰し、出火の際、蒸汽ポ

ンプに火入れし、直に出場することゝした。大正七年四月より常備員は年中器具置場に出勤することに定めた。同八年八月常備員は第一第三第四は各部に二名宛、第二部は六名出勤に變更した。同九年三月三十一日組頭以下二百十五名に變更した。同十年十二月ポンプ自動車購入により第一、三、四部の常備を廢し、同車所屬の第二部に常備を集中し、消防手十二名の外小頭一名を增し、其後常備に掛長一名增して十四名とした。同十三年九月二十二日組頭以下二百二名に變更し、同十四年四月十七日五部制とし、組頭以下二百十五名とした。同十五年四月ポンプ自動車一臺增加により常備員を十六名とした。昭和二年四月一日下關村市へ編入のため六部制に變更した。同年五月更にポンプ自動車一臺增加し、都合三臺となつたので常備員も二十名に變更した。同三年六月五日横田西條市編入の爲め八部制とし、組頭以下二百七十九名に變更した。

所有必要器具左の如し。

設備種類	設備年月日	工費等
腕用ポンプ	明治二十七年六月	二五〇圓
同	同	二五〇圓
同	同 三十三年十月	三〇〇圓
同	同	三〇〇圓
蒸汽ポンプ	同 三十六年十月	二、二七七圓
同	同 四十三年八月	二、二七七圓
同	同	二、二七七圓

同	市内下水路ヲ消火栓ニ改良	同 四十四年八月	二、一〇〇圓
同	メノウエザ自動車ポンプ	大正八年四月	
同	第一部望樓臺	大正十年十二月	二三、〇〇〇圓
同	第七部同	同 十四年四月	四、五〇〇圓
同	ハドソンニッポンポンプ自動車	同 十五年四月	三〇〇圓
同	第八部望樓臺	同 六月	一二、五〇〇圓
同	第四部同	昭和二年四月	三〇〇圓
同	第六部同	同	二五〇圓
同	消防所 吹ハドソンノーザンポンプ自動車	同 五月	一〇〇、〇〇〇圓
同	インデアン、オートバイ水管車	同	二、三五〇圓
同	第二部望樓臺	同 四年四月	三〇〇圓
同	第四部同	同	三五〇圓
同	腕用ポンプ二臺	昭和三年六月五日	
同	ガソリンポンプ一臺	横田西條織入ニヨリ移管	

表彰等に關しては、大正十一年二月十一日消防表彰規程に依り、知事より旌表旗一旒授與せらる。同年十月三十一日小杉町大火の際迅速最附防火に力めたる功勞顯著なりとし、小杉警察署長より感謝狀を受く。同十二年二月二十日組員二百十五名は自動車ポンプ購入費として金五千圓也高岡市へ寄附した廉により、褒章條例により、賞勳局總裁より褒事を受く。同年十月二十日關東地方大震災に際し、避難民の救護に盡力したるを奇特として高岡市長、高岡警察署長より謝狀を受く。同十三

年十二月二十日御警衛補助の任を盡うしたる廉により縣警察部長より感謝狀を受く。昭和三年十一月御大禮行はせらるゝに當り、區域内警備に盡瘁せし廉に依り縣知事より感謝狀を受く。同四年一月六日第三部小頭部長大島虎次郎は、組代表として宮城前御苑に於て行はせられたる御親閲に參列するの光榮に浴した。

組頭任免の順序左の如し。

金澤七郎		任免年月不詳
和田彫治	同	同
大野治喜	同	明治三十四年十二月九日任、同三十六年七月二十七日免
長谷部兵治	同	任免年月不詳
佐井儀平		同四十三年八月十二日任、大正二年八月六日免
四津谷貞次郎		大正二年八月廿一日任、同九年六月十七日免
菅地岩吉		大正九年六月十四日
菅野啓二郎		高岡消防組頭

明治四十二年七月私立中央大學經濟科專門部卒業、同年九月高岡紡績合名會社副事務長となり大正八年大正畫夜銀行常務取締役に就任大正九年七月高岡消防組頭任命、同十年八月高岡市會議員に當選、昭和四年六月、富山縣消防義會總裁より表彰せられ銀盃一個受領、同九月財團法人大日本消防協會富山縣代表議員を嘱託せらる、同富山縣消防義會理事に任命せらる。

福田消防組　明治二十七年五月十日創めて私設消防組設置。組員三十三名、腕用ポンプ一臺火見櫓一臺を有した。同二十八年七月十九日私設和田消防組を設置、次で公設和田消防組を設置、大正九年一月廿六日區域、定員を變更し、福田消防組と改稱した。創設當時三十三名(一部制)であつたが、大正九年十一月二十六日區域、福田村一圓とし定員を五十名に變更した。設備としては私設當時のものを襲用し、大正九年六月十一日蒸汽ポンプ一臺購入。同九年七月和田部落に貯水池一個新設。同十五年六月十九日鐵骨火見櫓一臺新設(工費四百五十圓)

表彰に關しては、大正十三年十二月二十日御警衛補助の任務を全うしたる廉により縣警察部長より感謝狀を受く。同八年六月小矢部川大洪水の際、人命救助の廉により縣知事より感謝狀及金五圓也賞與を受く。昭和三年十一月御大禮行はせらるゝに當り區域内警備に盡瘁したる廉により縣知事より感謝狀を受く同四年一月六日小頭部長室崎德次郎は組代表として御親閲に參列の光榮に浴す。

組頭任免は左の如し

有澤知永	任免年月日不詳
有澤鶴之助	同
有澤梅太郎	同
澤田順美	同
長谷川清一	大正四年十一月一日任、同七年一月十九日免
山口喜作	大正七年一月十九日任、同十年六月六日免
木田次一郎	同十年七月任、同十四年十一月免

山岡次郎左衛門	大正十五年二月二十三日任

大門消防組　明治八年頃より火消組があり、組員三十餘名で龍吐水を備へて居た。明治二十三年頃大門組、大川組兩組の火消があり組員總計五十名腕用ポンプ二臺を有して居た。同三十二年八月大門組、大川組の火消解散し公設の消防組設置せられ組頭以下四十四名で現在まで異動が無い。

設備としては腕用ポンプ私設當時のものを襲用し、大正十四年七月金五千圓を投じ、ガソリンポンプ一臺を購入し、同年同月三百圓を投じ鐵骨火見櫓一臺を建設した。

表彰に關しては、大正十三年十二月二十日御警衛補助の任務を全うしたる廉により縣警察部長より感謝狀を受く。昭和三年十月、御大禮行はせらるゝに當り、區域内警備に盡瘁したる廉により、縣知事より感謝狀を受く。同四年月六日小頭米谷佐吉は組代表として御親閲に參列の光榮に浴す。

組頭任免左の如し。

開久太郎	任免年月不詳
河合宅次郎	明治四十二年五月任、大正十二年五月一日免
正力定吉	同　上　任

野村消防組　明治四十一年頃私設蓮花寺消防組創設せられ、組員五十名、腕用ポンプ一臺を有して居たが、大正五年十一月十日右私設消防組を解散し公設となつた。同十五年五月十四日、區域蓮花寺のみなりしを野村一圓に變更し、野村消防組と改稱した。組員は創設當時と異動が無い。

設備としては私設當時のものを襲用し、昭和四年九月金四百圓を投じ鐵骨望樓臺を新設した。

表彰等に關しては、大正十三年十二月二十日御警衛補助の任務を完うしたる廉により、縣警察部長より感謝狀を受く。昭和三年十一月御大禮行はせらるゝに當り、區域內警備に盡瘁した廉により縣知事より感謝狀を受く。昭和四年一月六日小頭吉岡藤助は、組代表として御親閱に參列の光榮に浴す。

頭頭任免は左の如し。

河合磯太郎　大正五年十一月任、大正十五年六月廿九日免

吉田藤助　同上任

守山消防組　大正四年十月二十日私設守山消防組創設せられ、組員四十二名補充員十名を以て編成し、腕用ポンプ一臺、木製火見櫓一臺を有した。同七年七月二十四日私設百橋消防組創設せられ組員四十三名を以て編成し腕用ポンプ一臺、火見櫓一臺を有した。大正十年六月十七日私設守山百橋兩消防組を解散し公設消防組を設置せられ、二部制七十九名の組員を有せしが、同十四年五月八十七名に變更、同十五年五月小頭四名を五名に變更した。

設備としてはポンプ及火見櫓等は私設當時のものを襲用し、大正十一年五月十五日第一部に金二百五十圓を投じ、鐵骨望樓臺一臺を建設し、同年十一月二十四日第二部に木製火見櫓一臺を建設した。

表彰等に關しては大正十三年十二月二十日御警衛補助の任務を全うしたる廉により縣警察部長より感謝狀を受く。昭和三年十一月御大禮行はせらるゝに際し、區域內警備に盡瘁した廉により、縣知事より感謝狀を受く。昭和四年一月六日組頭寺下仁三次郎は組代表として、御親閱に參列の光榮に浴す。

組頭任免は左の如し

松島次一　大正十年六月十七日任、同十二年五月二十日免

田畑仁作　大正十二年六月十五日任、昭和三年十一月三日免

寺下仁三次郎　昭和三年十一月四日任

國吉消防組　大正十一年五月十日、佐賀野梶川與詞腕用ポンプ一臺寄附せるを以て、私設佐賀野消防組設置せられ、組頭一名小頭四名消防手七十二名を以て編成せしが、同年十月二十六日私設を解散して、公設の國吉消防組を設置した。當時組員七十七名であつたが、大正十三年一月十一日九十名に變更した。

設備としては腕用ポンプ及火見櫓等は私設當時のものを襲用した。大正十二年六月十日金二千圓を投じ、蒸汽ポンプ一臺を購入。同十三年八月二十日二百五十圓を投じ、佐賀野に貯水池二箇所を新設した。

表彰等に關しては、大正十三年十二月二十日御警衛補助の任務を全うした廉により、縣警察部長

より感謝狀を受く。昭和三年十一月御大禮行はせらるゝに際し、區域内警備に盡瘁したる廉により縣知事より感謝狀を受く。昭和四年一月六日、小頭磯部嘉平は、組代表として御親閲に參列の光榮に浴す。

組頭任免左の如し。

立浪宇太吉　大正十三年十月六日任、昭和二年十月十八日免

伊藤太作　同上任

佐野消防組　大正十年八月十二日私設木津消防組創設せられ、組員四十九名、腕用ポンプ一臺、火見櫓一基を有して居たが、同十二年八月之を解散し、公設佐野消防組となり、組員に異動なし。設備としては、私設當時のものを費用し、大正十五年九月二十八日金二千二百圓を投じ、ガソリンポンプ一臺を購入した。昭和二年五月二十日佐野村役場に鐵骨火見櫓一基を新設(工費六万圓)。昭和四年十一月十日木津競場前に鐵骨望樓臺一基を新設(工費四百五十圓)した。表彰等に關しては大正十三年十二月廿日御警衛補助の任務を全うしたる廉により、縣警察部長より感謝狀を受く。昭和三年十一月御大禮行はせらるゝに當り、區域内警備に盡瘁したる廉により、縣知事より感謝狀を受く。昭和四年一月六日組頭津田意治は組代表として御親閲の光榮に浴す。

組頭任免左の如し。

上坂吉次郎　大正十二年五月十一日任、同十四年二月五日免

福井助三郎　同上任、昭和二年三月十五日免

津田意治　同上任、昭和四年三月十五日免

志村仁三郎　同上任

二上消防組　公設前は特記すべきこともなく、大正十二年六月廿九日二上消防組設置せられ、組員六十五名(二部制)なりしが、同十四年三月廿七日七十七名に變更した。大正十二年六月腕用ポンプ二臺附屬品等千數百圓を投じて購入し、同年九月工費三百圓を投じ、守護町及谷内に鐵骨火見櫓二基を建設し、同十五年十月工費金百圓を以て貯水池を新設した。

表彰等に關しては、大正十三年十二月二十日御警衛補助の任務を全うしたる廉により、縣警察部長より感謝狀を受く。昭和三年十一月御大禮行はせらるゝに當り、區域内警備に盡瘁したる功により、縣知事より感謝狀を受く。昭和四年一月六日第一部小頭部長吉田辰次郎は組代表として御親閲に參列の光榮に浴す。

組頭任免左の如し。

細野平　大正十二年七月十日任

能町消防組　大正十二年八月五日吉久敷譯班創設せられ腕用ポンプ一臺を有し災害警防の事に從事せしが、大正十五年七月九日救護班を解散し、能町消防組を設置した。當時組頭以下九十七名に

て異動が無い。設備としては腕用ポンプは私設當時のものを兼用し、大正十五年四月七日金百五十圓を投じ、火見櫓一基(第一部)を新設同年六月十九日金三百五十圓を投じ、鐵骨望樓臺一基を新設(第二部用)。同十月八日金三百圓を投じ吉久神明社前外五ヶ所に貯水池を新設した。

表彰等に關しては、昭和三年十一月御大禮行はせらるゝに當り、區域内警備に盡瘁したる廉により、縣知事より感謝狀を受く。昭和四年一月六日組頭津野太右衛門組代表として御親閲の光榮に浴す。

組頭任免は左の如し。

津野太右衛門　大正十五年七月十五日任

十三、小杉警察署管下

小杉消防組　當藩時代元十七万石支配官奉行として今村五郎兵衛小杉に在職當時より組織せられ火消頭は杉本儀平であつたが明治四年廢藩後森永四郎助文組頭となり各處を見學した結果龍吐水を備付け大に消火の効を擧げて居た。同八年六月西本願寺門跡明如上人北陸巡錫の當時森永組頭外百餘名警護に當つた(射水郡二口村より富山市別院まで)。同十一年九月三十日十月一日　明治大帝北陸御巡幸の際老田村より小杉町行在所の警護に當り能く其の任務を盡した。

明治二十七年五月十七日公設消防組に改置し組頭以下六十名、腕用ポンプ一臺購入、同三十二年

八月富山市大火同三十三年六月高岡市大火に出動し大に活動した。大正九年同十三年の雨度にガソリンポンプ二臺を購入と共に鐵骨望樓臺を建設した。

十四、新湊警察署管下

新湊消防組　明治九年一月三十一日放生津區長莞屋戸長等の連名にて時の石川縣令に私設消防組設立の願出を爲した。同十一年七月十七日付許可の指令を受け八幡組と稱し龍吐水、纏、提灯等の器具を購入し組員六十五名を以て組織したのが始めである。其後他の大字町にも私設消防組を組織したが明治二十七年に至り時代に適應した消防組を組織し組頭一名小頭九名消防百六十名之を三部制とし同時腕用ポンプ三臺を購入し各部に一臺宛を備付くることになつた。同四十三年二月從來の三部制を四部制に改め

一部　小頭三名　消防手四十名
二部　同二名　同四十名
三部　同二名　同四十名
四部　同二名　同四十名

を置き同時に市原式第三號型蒸汽ポンプ一臺を購入し第一部に配置した。

明治四十四年米價暴騰の際本組は率先して阪神商人と特約して外國米麥等を原價に購入之を一割引として細民に頒ちたるに貧民は勿論町民一般感謝した事實あり當時之れに要した費用七百餘圓に

止つた。大正元年八月市原式第五號型蒸汽ポンプ一臺を購入し同二年八月清水式蒸汽ポンプ一臺を購入した。同年十二月五日組織を左記の如く三部制に變更した。

一部	小頭三名	消防手六〇名
二部	同 三名	同 五〇名
三部	同 三名	同 五〇名

大正十二年八月十日ドッヂブラーザー自動車ポンプ一臺購入。同十三年二月十一日成績優良の廉に依り縣知事より旌表旗一流を授與せられた。同十四年五月十五日定員を左の通り變更した。

一部	小頭三名	消防手四〇名
二部	同 三名	同 四〇名
三部	同 三名	同 四〇名

昭和二年六月ノーザン自動車ポンプ一臺購入。同四年四月一日左の通り定員改正

一部	小頭四名	消防手四五名
二部	同 三名	同 三五名
三部	同 三名	同 四〇名

堀岡消防組　明治十一年三月七日午後二時堀岡村明神新片口藤兵衛方より出火し同村堀岡高畠久四郎外二三戸を殘し同村全部四百數十戸を灰燼に歸せしめたので火災の恐るべきを痛感した村民は大字毎に私設消防組を組織し火防に努めつゝあつたが種々なる原因の爲め發達を見ることが出來なかつた。仍て明治二十七年十二月三十一日各私設を一組めとし公設消防の組織を見るに至つた。

當時組頭一名小頭二名消防三十名を以て組織せられ龍用ポンプ一臺を備へて居た。同三十四年四月三日同村堺佐七方より出火八十三戸燒燼の際殊勝なる活動を爲したりとて本縣知事より賞狀を受けた。大正四年十月龍用ポンプ甲乙型鈴木製一臺を購入し同十年三月二十五日消防手七名を增加同十二年八月十日更に組員十名を增加し組頭一名小頭三名消防手四十六名二部制に變更した。同月十八日清水式蒸汽ポンプ一臺を購入し組織完備するに至つた。

海老江消防組　明治二十二年五月二十五日海老江村私設消防組を組織し龍吐水ポンプを購入し組員二十三名を以て火災警防に從事したが同二十七年十二月二十一日公設消防組となり龍用ポンプ一臺を購入し組頭一名小頭二名消防手三十名を以て組織した。同三十六年十月海老江村地內に消防記念碑を建設した。大正四年三月現在使用中の龍用ポンプ一臺を購入し。同十三年四月一日消防手五名を增加し消防手三十五名に變更した。昭和四年三月ガソリンポンプ二十五馬力一臺を購入するに至つた。

作道消防組　明治三十六年十二月二十六日作道村作道、同村久々湊の二大字を區域とする公設消防組を組織し作道を第一部、久々湊を第二部とし組頭一名小頭四名消防手六十一名とし各部に器具置場を新設し龍用ポンプ一臺宛を配置した。然るに其他の部落にもポンプの備付を見るに至り公設に對抗する形勢となり各補助を要求するに至り村當局も其處置に窮したる結果遂に大正十五年四月

二十三日從來の二部制を解體し同村一圓を區域とする公設消防組に改め組員數を組頭一名小頭三名消防手四十五名に定め尙ほ腕用ポン一臺を設備するに至つた。

牧野消防組　明治二十年頃より龍吐水ポンプに依る寄合消防組員にて防火に努めつゝありしが同四十一年十一月公設消防組の組織を見るに至り組頭一名小頭三名消防手四十五名にて腕用ポンプ一臺を設備することになつた。

昭和二年四月一日過去一ヶ年間火災絶無にして其成績優良なりとし新湊署管內消防向上會長より表彰せらる。同月創立滿二十週年記念として組員金村龜次郎外十四名永續勤續の廉に依り銀盃一個宛を贈與せられ表彰された。

片口消防組　大正三年五月消防機關の缺くべからざること村民の間に唱道せらるゝに至るや村有志間に於て消防設置の議起り有志の寄附金を募集し同年八月之が組織成り組員を四十名とし腕用ポンプ一臺附屬品一切を購入し大正五年十二月公設に變更し組頭一名小頭二名消防手三十一名の組織を見るに至つた。

木江消防組　明治十八年富山市大火に鑑み私設消防組の必要を認め組員十七名水鐵砲二挺を備へ數年を經て龍吐水其他の消防器具を購入し稍消防組の陣容を備へ其後八名の增員を爲したが尙防火設備幼稚なる爲め有志寄附により明治二十七年三月富山市東別院に備付けの腕用ポンプ一臺を讓受

け大正八年七月に至り公設消防組織の議起り同年八月十五日を以て組頭一名小頭二名消防手三十七名の公設消防組となり同十五年四月新式腕用ポンプ一臺を設備するに至つた。

塚原消防組　本村は從來火災も無く消防機關の必要を認めず村民一同防火の念幼稚なりしが昭和三年三月に至り村民自覺の下に公設消防を設置することゝなり四月一日より組頭一名小頭二名消防手三十名の組織を見るに至り、同時にガソリンポンプ（二十馬力）一臺其他附屬品一切を購入し尙ほ望樓臺をも設置するに至つた。

十五、伏木警察署管下

伏木消防組　明治十二年當時分署長德田安太郎は有志谷村常三、松原吉左衛門と相議り私設消防組を組織し龍吐水一臺に法被、胴鍵、纏、旗、鳶口等を設備し組員は南九郎平以下二十五名であつた、之れが伏木消防組の濫觴である。同十三年に至り篤志家藤井能三は英國より直輸入の金屬製四枚車ホース、吸管は護謨製の腕用ポンプ一臺を寄附した、之れが縣下に於ける腕用ポンプ使用の始めである。同十六年に至り秋元利七外數名相議り二十五名より成る消防組を組織した。前の組を西組と云ひ後の組を東組と云つた。同十八年兩組を合併し五十名一組とし藤田善吉を組頭に擧げ前記腕用ポンプの效力偉大なるを高岡、新湊、氷見等の地方に發揚した。

二十七年に至り玉井玉吉を組頭に推し組員六十名に增員し同年五月三十日公設消防組となつた。

當時の機械器具は獨逸式腕用ポンプ一臺(此代五百圓に購入)前のポンプ一臺其他鋼、高張、胴鍵、梯子、刺叉及鳶口等であつた。同三十三年獨逸式腕用ポンプ一臺(五百圓)購入。同三十七年玉井組頭辭任し、堀田善九郎を組頭に擧げ組員を八十名に增員した。同四十年八月十二日市原式一號型蒸汽ポンプ一臺を購入(此代二千二百八十五圓)大正二年四月二十一日堀田組頭辭任、現組頭麥谷十平就任。同五年七月二十五日市原式特別三號型蒸汽ポンプ一臺(此代二千四百七十圓)購入同時に機械ポンプ二臺備付け組員を六十名に減員したが同十年六月一日市街擴張に從ひ組員を八十名に增員。同十三年九月十五日米國製ハドソンノーザン式ポンプ自動車一臺(此代一萬五千圓)にて購入同時に小頭一名消防手一名甲種自動車運轉手二名を採用して常備員とした。同十四年四月八日從來の消防組を三部に編成し第一部三十四名第二部三十名第三部十五名(外自動車運轉手)とし各部に部長一名小頭一名を置くことゝなつた。

伏木消防組頭　麥谷十平

明治三十年三月二十日伏木水運株式會社取締役副社長に就任、同三十五年二月二十日同社長に昇任、昭和五年四月二十日迄在職。明治三十年十二月二十九日伏木回漕合資會社業務社員に就任昭和五年三月十五日まで在職。明治十三年十月十七日伏木問屋合資會社業務擔當社員に就任、同三十四年二月辭任。明治三十二年八月二十日伏木町外五ヶ町區會議員就任、同三十四年四月十三

日辭職。明治三十三年十一月十五日社團法人伏木商工會理事就任、今尙在任中。同年八月六日射水郡會議員に當選、同三十四年四月十一日伏木町會議員に當選、同三十八年二月五日中越漁業株式會社取締役として就任、大正八年二月まで在職。明治四十年二月十三日伏木新倉庫株式會社取締役に就任、今尙在職中。明治四十年八月十四日日本赤十字社特別社員に列せらる。大正二年四月二十一日伏木消防組頭拜命、同九年九月三十日縣消防義會創立に付委員として盡力し銀盃一個贈與せらる、尙ほ東國總裁より感謝狀を受く、同十二年四月七日、大正二年以來消防の職に從事し規律嚴正技術熟達の故を以て銀盃一個贈られ伊東總裁より表彰せらる、昭和二年三月三日第一回火防强調委員會委員を囑託せらる、同二年三月十日品行方正職務勉勵事務に熟達し消防上功勞尠からずとし勤功證書授與せらる、同年六月十一日富山縣消防義會事業執行規程第六條の二に依り消防勤功章を授與せらる。

十六、氷見警察署管下

氷見消防組　嘉永、安政の頃には各大字町に二名乃至四名の義俠的火消あり。之に纏一、鳶口三挺、手桶三個位の設備があつた。明治初年より町年寄は火消輩の監督をして居たが、明治十五年五月十五日氷見町に於て千百六十餘戸を燒失した大火に鑑み始めて龍吐水を購入するに至つた。其後同十八九年頃には警備費に六百圓を投じ更に龍吐水を購入各字の火消の費用に充てた。然るに未だ

何等規律的訓練なく義俠的有志の輩下に活動して居た。明治廿七年消防に關する諸法令の發布と共に十月十日公設消防組となつた。其組織は三部制にて組頭一名小頭六名消防手百五十名腹用ポンプ三臺を設備し南清太郎初代の組頭となつた。同三十八年六月長澤組頭時代に蒸汽ポンプ一臺を購入し同四十二年度に於て新式の蒸汽ポンプ二臺を購入し三部制を五部制に改め小頭十三名消防手百八十七名に增員した。大正十二年五月二十三日オートバイポンプ一臺を購入した。然るに各種ポンプ漸く朽廢の傾きあるに依り昭和二年二月新鋭なガソリンポンプ二臺(一万三千圓)を購入し機械器具等頗る充實した消防組となつた。

宇波消防組　明治四十五年一月十九日組頭一小頭二消防手三〇を以て設置することゝなり組頭に室谷晃就任。同七月宇波小學校に於て龍樹立式擧行。大正二年五月十七日小頭一名消防手十五名增員。同十二年十月五日更に小頭一名消防手十六名增員。同十五年七月十六日室谷組頭辭任し現組頭荻野一朗就任し現在組頭一名小頭四名消防手六十六名。

壁消防組　當村は現主陸田九左衛門の先代陸田又五郎は慶應初年頃藏高三千石餘を有した素封家で頗る消防心に富み私費を以て出入りのもの三十名を選拔し消防手として夫々剌子等の被服を給し器具としては龍吐水を備へ。現壁消防組の組も其際購入したもので又五郎自ら指揮者となり盡力して來たが爾來陸田家代々の戸主が其指揮者となつて來た。然るに大正二年二月七日壁村部落を以て公

設消防組として組頭一小頭三消防手四十一名とし腹用ポンプ一臺を購入することになつた。同十四年七月更に組織を變更し壁村一圓を公設消防組とし組頭一名小頭四名消防手六十名とし十馬力ガソリンポンプ一臺、腹用ポンプ二臺とし各部落(壁、岡、柳田)にポンプ一臺を配置することになつた。

藪田消防組　大正六年七月藪田村藪田坂口英三方の出火に鑑み藪田部落其他の寄附により現に第一部用の腹用ポンプを購入して組頭酒井澤次郎以下四十五名にて組織せる私設火防組を設立し、大正八年七月二十名を增員し組頭一名幹部五名消防手六十名を以て公設消防組に變更した。同十一年十月同村小杉濵野清三外二戸の火災に鑑み小杉泊部落より腹用ポンプ一臺を寄附した。同十二年六月二部制とし第一部に小頭部長井山兵一、第二部長に廣瀨義之就任。昭和三年五月澤井組頭辭任により現組頭山崎實就任した。

遠川消防組　大正九年三月二十五日組頭一小頭二消防手三十二名を以て遠川消防組設置。同十年消防手三名增員。昭和二年消防手五名增員。大正十三年小久米小學校前にありし火見梯を久目神社前に移し、同十四年四月二十七日森田式一號腹用ポンプ一臺(傾八百六十圓)を新調した。

宮田消防組　大正十一年八月二十日宮田村消防組設置せられ當時氷見消防組より腹用ポンプを讓受け島尾に組頭一小頭三消防手四十九名を以て組織した。其後腹用ポンプは用を爲さざるに至りポンプ新調に對し島尾、上泉、下田子、上田子、小竹の各部落に幾多の波瀾を惹起せしも昭和四年十

二月五日圓滿解決を見るに至り島尾村に組頭一小頭二消防手二十七名他の五ヶ部落に小頭二名消防手二十三名を置きガソリンポンプ(小森式十六馬力)一臺を購入し宮田消防組が組織された。

八代消防組　大正十一年十一月十七日公設せられ全村七ヶ部落中角間、胡桃の二部落にて二部制とし組頭一名小頭四名消防手六十名なりしが型十二年磯部、針木の二部落を加へ三部制とし組頭一名小頭六名消防手九十名に組織變更した。昭和二年四月三十日再び二部制とし組頭一名小頭四名消防手六十名に組織變更した。尙は同村七ヶ部落中三ヶ部落加入せざるは消防觀念養成上遺憾なりとし昭和四年六月十四日全村に組員を配當し之を機會に二部制を一部制に改め組員を從來通りに止め腕用ポンプ三臺を有することゝなつた。

玄蕃消防組　大正十一年十一月三日に設置せられ組頭一小頭四消防手六十名を以て組織された。同十五年ガソリンポンプ一臺購入と共に小頭一名を增員した。

阿蘇消防組　大正四年十月二十日腕用ポンプ一臺組員三十名を以て私設消防組を設置。大正十一年九月二十八日公設となり組頭一小頭四消防手六十名を以て組織せられた。

加納消防組　大正十一年九月二十九日鞍川一部落(戸數百八十戸)にて設置し組頭一小頭二消防手三十名機械器具を新調し其後鞍川一部落にて負擔して來た昭和四年十一月一日組織變更し組頭一名小頭三名消防手四十名となしガソリンポンプ一臺(十五馬力)を購入し加納村一圓の消防組となつた。

稻積消防組　元稻積村稻積の一部たる新道並に開鳥の一部民を以て組織された私設消防組があつたが稻積本村は當時より著しく發展し家屋も密集するに至り一朝火災の場合は甚だ危險の狀態にもつたので村當局及有志間に於て私設消防組を廢し全村を區域とした公設消防の設置を希望するに至り大正十二年二月設置許可となり同年十月二十八日稻積村國田鶴藏を組頭に以下小頭三名消防手四十五名の任命と共に同日稻積小學校庭に於て組樹立式を擧行することゝなつた。

十二町消防組　大正十二年六月八日設立。組頭一小頭二消防手三十二名其後昭和二年にガソリンポンプ小森式二十馬力一臺購入同三年十月二日組織變更定員三十五名の所三十八名に增員した。

太田消防組　太田村は現在太田、西田、滋谷の三字に區別されて居るが以前は七部落(伊勢領、辰口、西田、中村、北村、山岸、且保)となり居り、各部落に青年團はバケツを備へ防火器具として活動して來たが、時勢の進運に伴ひ大正十二年七月十日太田村一圓を區域とした公設消防組を設置し組頭一小頭四消防手六十名の組織を見るに至つた。

熊無消防組　本組は大正十二年十二月廿八日　東宮殿下御成婚記念事業として組織せられたので同十三年三月三十日谷屋尋常小學校に於て組樹立式擧行、組頭一小頭二消防手三〇を以て組織された。同年九月十、十一の兩日防護貯水池調査記水計量並に放水の爲め各五部落を巡回し同年九月廿

一日縣立氷見高等女學校々底に於ける氷見部聯合消防演習に參加した、同年九月三十日熊無村醫田に失火あり直に出動鎭火に從事同年十一月二日　東宮殿下行啓御警衞の功勞により縣警察部長より感謝狀を受く。大正十五年四月二十六日郡聯合消防演習に參加。昭和三年四月十四日富山市に於て內務大臣の富山縣下消防組編檢閱に出場。同年十一月御卽位御大禮行はるゝに當り同月十日より十二月九日まで地方警備に當つた。同四年一月上坊寺小頭御親閱參列の光榮に浴した。同三年十二月十五日御大禮警備の勞多しとし縣知事、氷見警察署長より感謝狀を受く。同四年三月高岡市に於て開催の講習會に上坊寺小頭以下消防手四名出席。同年二月四日氷見中學校前に於ける氷見郡聯合演習に山崎小頭出席す。

久目消防組　久目村は戶數五百三十七戶面積も廣く且つ部落散在し從來は各部落毎に靑年團員を以て火防團を組織しポンプ等を設備して居たるも一朝有事の際統一を缺くの嫌があり昭和二年十二月十六日公設消防組の設置を見るに至り組頭一小頭二消防手三〇を以て組織せられた。

十七、出町警察署管下

出町消防組　藩政時代に於て氷見奉行所の所在地として加賀前田侯にて加賀藩の名が江戶の花と歌はれただけ其領內にも火防上其氣風を存し奉行所火消は威風堂々たるもので奉行は金紋先箱に指揮に當り足輕多數を隨へて現場に出動し、町人や村人が折角消止めた功をも奉行所の火消人夫が自

ら消止の札を揭げ、其專制的の行動に對し仕方なしに屈服して居た。當時奉行所の纏持は左の如くである

纏持　小杉屋金助
旗持　仁左衞門
玉郎丸纏具右衞門
先手旗　藏

慶應三年と共に奉行所火消の後繼を作り地方警備に力を注がねばならぬことゝなり又明治十年西南戰役頃各地に火災續起したので放五島正、放佐藤德治の二青年有力者が多額の費用を支出し消防設備を企て南町丁字路に火見櫓を構造し纏、旗、梯子、高張、玄口、劍叉、鋼鍵、龍吐水（木造ポンプ）手桶を備へて義俠組と命名した、之が出町消防組の基礎である。當時は頭取五島正、副頭取佐藤德治、組員八十五名であつたが明三年を出でやして五島佐藤の兩幹部は早世し一時中絕せんとしたが佐藤友次郎藤井長右衞門小幡彦助杉野加平の四氏組頭となり小頭佐藤德造高畠外次郎等を擧け義俠組の命脈を繼いた。更に五六年を經て再興の氣運來たり卽ち明治二十年一月組織を改め害附金を募り獨逸式三號型ポンプ（一百五十圓）を購入した。然るに義俠組は政黨の色彩を帶び頭取を除き全部殆ど民黨に加盟し、運動場裡に運動し或は壯士消防と稱せられ、紀律亂れて來たが、明治二十七年に至り六月六日公設出町消防組と改まり組頭稻垣和左衞門、小頭佐藤豊助、水木市郎左衞門柳本與三市、河合佐太郎、外消防手六十名の任命を見るに至つた。同三十三年八月出町大火災に罹り組員災厄を共濟すべ

く東礪波郡消防共濟會を組織した。同四十年十一月蒸汽ポンプ一臺購入大正十二年一月鐵骨望樓臺を新設し昭和三年五月自動車ポンプを購入するに至り大に威力を發揮することになつた。

出町消防組頭　佐藤豊助

明治二十三年六月十日私設消防義俠組消防夫となり消防界に入りたるを始とし同二十七年出町消防組消防手同三十三年同小頭に昇進、大正二年五月十一日出町警察署より東京市各消防署狀況視察を囑託せられ、同十二年四月一日出町消防組第一部長を拜命、同十三年四月六日富山縣消防義會より神奈川、靜岡、愛知三縣消防組視察を囑託せられ、同年十月二十日特別大演習及地方行啓御警衛補助員を命せらる、同十五年六月二十三日消防講習會修了、昭和二年三月二十五日第一回火防强調委員支部委員囑託せられ同三年六月十五日出町消防組自動車ポンプ主任を命せらる、同年十二月十八日出町消防組頭を命せらる、同四年二月十五日消防講習會修了、同六月十八日縣消防義會評議員當選、同八月二十日ガソリンポンプ講習會終了其他町會議員、用水議員等大小十餘の公職に關係し、感謝狀、賞狀、賞與を受領せしこと數ふべからず。

油田消防組　村有志芳里三輝、中本昌英等有力者を歴訪して消防の必要を力說し大正九年三月二十五日私設消防組を創設し芳里三輝頭取となり組員三十三名を有した。同十一年四月二十二日公設となり組頭に龜永久四郎を充て定員四十九名とした。昭和三年十二月二日若鶴酒造會社より出火せ

るに鑑み同年十二月瓦斯倫ポンプを購入した。

太田消防組　明治三十六年同志相謀り義勇消防組を組織し同四十年小型腕用ポンプ購入。大正十二年同ポンプを第二號型ポンプに替へ同一月公設消防組となつた組頭に井上彌兵衛を擧げ組員四十九名を有した。同年八月ポンプ並に器具置場、警鐘臺を設け同十四年七月纏、旗、組員の服裝を作つた。同十五年一月井上組頭死亡。同年三月安念政太郎組頭に就任し。昭和四年七月鐵骨望樓臺を新設した。

庄下消防組　大正十一年十二月二十三日公設消防組を設置しガソリンポンプ一臺腕用ポンプ一臺購入し組頭一名小頭四名消防手四十五名を以て組織された。同十四年九月十九日井波町大火に出場し井波町長より感謝狀を受く。同年十月九日復興資金として金二百圓を井波町に寄贈した昭和三年三月十日雪害防止に努め縣警察部長より感謝狀を受く。同年三月十日發動機ポンプ一臺購入した。

中野消防組　大正十三年駐在森巡査の主唱により同年八月中野消防組を創立するに至り組頭藤井四郎左衛門外四十九名を以て組織せらるゝに至つた。

五鹿屋消防組　大字五郎丸村に明治四十年頃天青團なる青年演劇團組織せられ同四十五年團員の基金により五郎丸區域に私設消防組を設置し大正十三年公設五鹿屋消防組を創設するに至り組頭一名小頭三名消防手四十五名を定員とした。同十五年三月中島組頭辭任し現組頭堅田吉平就任した。

東野尻消防組　村有志並に村民の自覺により大正十四年十月三十日公設消防組組織せられ組頭一名小頭三名消防手四十五名を定員とした。

鹿栖消防組　明治四十五年二月駐在巡査東六三郎の主唱により寄附金にて腕用ポンプ一臺其他器具機械を購入し大正元年八月十二日青年會員を以て私設消防組を新設し組頭一名小頭五名五人長十一名消防手四十四名を以て定員とした。同九年三月公設となり組頭一名小頭二名消防手四十名を定員とし同十四年吉田組頭辭任し現組頭清澤磯太郎就任した。

林消防組　林村字東中の東勇組を始め二部落に私設消防組ありしを合併して大正十二年七月二十七日公設消防組に變更し組頭一名小頭三名消防手四十五名を以て組織した。

[illegible]野消防組　明治二十七年公設消防組を創設し組頭一名小頭五名消防手六十六名を定員とした。同四十一年八月蒸汽ポンプ購入。大正十四年十月ガソリンポンプ購入。昭和四年六月二十九日鐵骨望樓臺を新設した。

南野尻消防組　大正十二年三月中島安太郎、室寶光、城寶宗作等の社會主義者輩出し一般青年の思想に影響を及ぼしたる情勢に鑑み村有志は村當局と將來を考慮し紀律的團體としての消防組を以て村民の思想統一並に災害防止を爲さんとし遂に大正十三年三月公設消防組を創設するに至つたので組頭一名小頭三名消防手三十名を定員とした。同時に消防器具として腕用ポンプを購入した。

廣塚消防組　大正九年六月十三日公設消防組を創設し組頭一名小頭三名消防手四十五名を定員とすると同時に腕用ポンプ其他器具を完備した。

野尻消防組　明治二十四年十月私設消防組を置き組長に砂土居次郎平、副組長福富市右衛門小長六名消防夫五十名を以て組織したが明治二十七年五月消防規則に依り之を解散し大正十年八月更に高木私立消防組々織され腕用ポンプ其他一切の器具を備へた。同十四年野尻村消防組を創設するや此等を併合し之を公設とした。

柳瀬消防組　大正十三年四月公設柳瀬消防組創設せられ組頭一小頭三消防手四十五名を定員とし腕用ポンプ其他の器具を備付けた。昭和三年四月鐵骨望樓臺を新設した。

南般若消防組　大正十三年四月公設南般若消防組を創設し、組頭一名小頭三名消防手四十五名を定員とした。

十八、中田警察署管下

中田消防組　明治二十八年四月二十六日私設を公設に變更し當時腕用ポンプ二臺其他器具機械一式を設備し組員は組頭以下三十三名(組頭一小頭二消防手三〇)を以て定員とし中田町及隣接町村の火災水災其他災害豫防鎭壓警戒に力め、大正五年十月蒸汽ポンプを購入した。大正十四年四月九日ガソリンポンプを購入し同年五月一部制を二部制に改め小頭一名消防手三十名を增員した。昭和二

年九月東西綱波に於て唯一の自動車ポンプを購入した、同時に小頭三名増員し小頭部長二名小頭四名に編成換し昭和四年十一月機械器具を格納すべき望楼を建設する等町民協力して消防の充實を圖つた。同四年十二月二十六日雪川納屋造業酒井喜九郎方より出火の際の如き大に活躍し僅か二戸にして火勢を喰ひ止め延焼の厄を免れたるが如き消防の活動と機械ポンプの能力を發揮したものと言ふべく其他創設當初より今日に至るまで庄川の増水警備に當り當時の知事より表彰を受け又組員にして縣議會並に支部より表彰を受けたもの頗る多い。

西部金屋消防組　北般若村西部金屋部落は本村の南端にある戸數百十三戸の大部落で高岡、井波間の縣道に沿ふて人家櫛比も一市街をなして居る關係上夙に警火に着眼し青年團支部長常木平二有志と相謀り大正三年十月御大典記念事業として第三號型腕用ポンプを購入（五百五十圓）其後大正六年五月火見梯子（約七十圓）を有志高畑憲、高畑七右衛門の兩名にて寄附。半鐘（價三十圓）林常信藏（二十四圓）常木平二、運搬車（十七圓）高畑仁十郎を各寄附した。次で大正十二年十一月有志林常信金一百圓を寄附せるを以て差着手天五人分を作り相次で同部落費二百圓を投じて印半天二十八人分を作り此等被服機械器具完備と共に大正十三年三月公設消防組設置を見るに至り組頭に林常信小頭に高畑仁十郎大屋孝二以下二十三名の消防手を以て組織した。同十五年四月木製火見梯子腐朽せるを以て四角型高サ九間の鐵骨製櫓（五百五圓）を建設した。昭和四年四月林組頭辭任により高畑

仁十郎後任となつた。

大清水消防組　大清水部落其他附近有志の寄附により第二號型腕力ポンプ一臺購入、北般若村巡査駐在所横の河上に置場を新設し三十八人分の服裝を新調し私設消防組として壹力し來つたが大正十一年十一月に至り大清水を區域とした公設消防組の設置を見るに至り組頭に御旅屋七郎小頭に青島吉藏、山田初藏以下組員三十五名計三十八名の組員を以て組織するに至つた。大正十三年十一月摂政宮殿下行啓の際警衛に當り組頭御旅屋佐七郎組員十六名分の正服を寄附し之に依て其任務を果した同十五年十月御旅屋組頭の八百圓の寄附を筆頭に有志の寄附金三千餘圓を得たのを以て小森式十八馬力のガソリンポンプ一臺を購入。同時に組員十二名幹部一名増員し、設立當時の小頭山田初藏餅任し新に吉田太七、今村榮造の二名を選任して消防組員計五十名となつた。

東般若消防組　明治初年頃より各部落毎に桶綱引繩梯其他水火災害用具の設けありて、隨時部落民出場其の災害に善處して來た。其後菅野家は東保、權正寺は島家の如き十村役場と稱するものに於て統一し殆ど奉仕的に實行して來たが大正八年六月六日始めて公設消防組とし組頭一名小頭二名消防手三十名組員計三十三名を以て組織さるゝことゝなつた。同年消防器具一式腕用ポンプ一臺（價三百圓）附屬品並に服裝三十二名分を新調した。創設以來組頭一名小頭一名に並に消防手の更迭五名ありしのみで死亡負傷したものが無い。組として感謝狀を受けたこと二回。北陸大演習の警備と

大降雪其他の爲め又組員中の個人として表彰されたもの幹部一名組員三名何れも銀盃を受けた。

賴禪消防組　明治三十七八年頃より私設消防組を設置して居たが時代の進運に伴ひ同三十二年十月十二日公設消防組設置を見るに至つた。創設當時組頭として坂東久作就任其後武部善七を經て現組頭武部毅吉就任するに至つた。現在腕用ポンプ一臺其他附屬品一切完備し從來の木製火見櫓を昭和二年鐵骨望樓臺に改造建築した。

增山消防組　明治三十四年十月二十五日私設增山消防組を設置し直に公設消防組に變更した。組頭として土田八右衛門を擧げ同三十七年十月十日辭任するに及び現組頭土田治八就任した。創立當時腕用ポンプ其他附屬品一式購入し同村火見櫓も建設し其後二回改造を加へた。組員の組織は組頭一小頭二消防手三十名の編成である。

野上消防組　昭和五年四月四日の創設にて組員四十二名(內組頭一名小頭二名)腕用ポンプ一臺附屬品一切の設備あり、組頭は沖田嘉之である。

十九、井波警察署管下

井波消防組　今より八十年前の藩政時代に於て消防組は水車組十二人(新町山の下町)、懸矢組十二人(畠方町山見松島)碇組十二人(北川北新町)井筒組十三人(但御坊所御手人瑞泉寺御用人夫の事)都合四十九人の組織を以て各組に水旗一本高張提灯一張懸矢二挺梯子一挺鳶口五挺を備へて居た。其出動から

火事場に於て守るべきことは鎭火の時の心得、他町村への應援より消防夫賃等の事まで嚴重に相定めて居た。又は風吹きの時とか其他災害に應ずる手配から要心水の事に至るまで詳細に規定してあつたのは頗る敬服すべきものがあつた。かくて明治初年に入り

消防組數(九組)　井筒組(御坊組)。水車組。山見組。碇組。懸矢組。北川組。大工組。藤橋組。松島組。　總員三〇九

となつて威勢擴大し各組の所有する機械器具の如きも、纏一本雲龍水鐵砲五挺刺又一本鳶口十八本高張提灯一張手灯燈約三十張、笠約三十個水旗一本梯子一挺刺子法被(各組の定紋付)三十着消札七枚胴鍵一筋等にて特に纏は技巧を凝らし、金馬簾にて其華麗を競ひ幹部は各組共に組頭一人小頭三乃至四人を置き勇敢義俠を以て其誇りとした明治二十六年消防總員二百十二人と報告され當時優良な獨逸式ポンプを備ふるに至りしこと恐らく兩礪地方にての魁であにた。然るに明治二十七年二月勅令發布と共に各組は統一せられ組頭に岩倉與吉郎就任、各組の組頭は小頭となり總員五十人に減員し時代に適應せる精良なるポンプを基幹とし堂々たる公設消防組となつた。明治二十七年十一月七日井波火災の際消防の功に依り賞を受けた。同三十三年四月十五日井波町大火約一百有餘戸を烏有に歸せしめた火災に鑑み定員を增員し百一人とし腕力ポンプ二臺を購入して威力を加へた。同年十月大谷次郎作組頭に就任。同三十八年五月九十人に減員した。同十一月叶山武藏組頭に就任。同四十年六月大谷彥次郎組頭就任。同四十一年四月二十一日蒸汽ポンプ一臺購入。同時に七十五人に

滅員。大正五年四月十四日畠野與四衛門組頭に就任。同六年六月二十七日退職。同年十一月五日近江外次郎組頭に就任。同十四年三月二十一日鐵骨警鐘臺建設。

大正十三年十二月二十日　攝政宮殿下行啓の際御警備の任を完ふしたる廉により警察部長より感謝狀を受けた。同九月七日井波町大火災に遭遇し頗る慘狀を極めたるに鑑み新鋭のガソリンポンプを購入して一層力を添へ組員を拇汰し面目を一新するに至つた。現時の幹部は。

組頭	丹波橘二	大正十五年一月二十日就任	
第一部長	木谷宇平	昭和二年七月十一日就任	
同小頭	崎田榮一	大正十五年二月二十二日就任	
同	青木與四郎	昭和二年七月十一日就任	
第二部長	白川驅平	明治二十七年六月九日就任	
同小頭	佛崎喜八	大正十四年十月七日就任	
同	竹村太八	昭和二年七月十一日就任	

昭和二年三月二十日稀有の大降雪に際し、災害防止に努めたる廉により警察部長より感謝狀を受けた。同三年十二月十四日御大禮に際し地方警備に盡瘁した廉により知事より感謝狀を受けた。本町は數回の大火災に鑑み非常の準備として二十個の貯水池を有して居る。

三清消防組　明治三十三年四月十三日の創立にて組員は組頭一人、小頭三人、消防手四十六人の組織にて腕用ポンプ二臺を有して居る。

金龍消防組　明治四十五年四月五日の創立にかゝり組員は組頭一人小頭四人消防手四十五人の組

織にてガソリンポンプ一臺腕用ポンプ一臺を備へて居る。

青島消防組　明治四十五年四月五日の創立にかゝり組員一人小頭四人消防手四十五人の組織にてガソリンポンプ二臺腕用ポンプ一臺を備へて居る。

山野消防組　大正十一年八月四日の創立にかゝり組員は組頭一人小頭四人消防手四十五人ガソリンポンプ一臺腕用ポンプ一臺を備へて居る。

積田消防組　大正十三年六月二十日の創立にかゝり組員は組頭一人小頭三人消防手三十人ガソリンポンプ一臺と腕用ポンプ一臺を備へて居る。

井口消防組　大正十四年五月八日の創立にかゝり組員は組頭一人小組二人消防手三十人腕用ポンプ一臺を備へて居る。

南山見消防組　昭和二年五月六日の創立にかゝり組員は組頭一人小頭三人消防手四十五人ガソリンポンプ一臺を備へて居る。

利賀消防組　昭和三年十一月二十三日の創立にかゝり組員は組頭一人小頭部長四人小頭九人消防手百九十五人の組織にかゝり腕用ポンプ四臺を有して居る。

二十、城端警察署管下

城端消防組　明治二十二年以前は町内小字に消防夫各四十人宛一組として十組あり龍吐水ポンプ

十臺を備付けて居たが、同二十三年に組織を變更し組員八十人に減し腕用ポンプ二臺を購入し龍吐水も二臺に減じた。同二十四年消防組規則を改正し消防夫の任期を滿五ヶ年とし組長小頭を滿三ヶ年とし町内を十區に分ち一區毎に二人の小頭を選任した。明治二十七年の勅令に依り速に公設消防組を設立し全組員を五十人とした更に同二十八年に二十人を增員し同時に腕用ポンプ一臺を購入した。其間二回の火災に出動し著しき效績を擧げた。同三十一年四月十五日野下町より出火し折柄の暴風の爲め四十戸を燒失するの大火があつた。當日は井波町大火の爲め消防組全部應援の爲め出動し町民は如何とも致方なく腕用ポンプ一臺火中に放郷するの止むなきに至り應援者急に歸町せしも鎭火後にて實に慘狀を極めた。同三十三年腕用ポンプ一臺を購入。同年西上町出火六十戸を燒失する大火があつた。年々の火災に鑑み消防組員の增員を認め更に組頭一人小頭六人消防手九十三人計百人とし三部制を採り各部に腕用ポンプ一臺宛を備付けた。同四十年西新田より出火あり十戸燒失同年十一月市原製蒸汽ポンプ一臺を購入し消防手を八十人に減じた。同四十一年腕用ポンプ一臺を近村へ讓渡した。同四十三年五月二十九日西新田町一戸、大正三年十月新町三戸、同七年西上町五戸、同九年九一會社工場全燒。同年十一月消防組彰功碑を水月公園に建設し經費二千圓を要した。同十一年四月ガソリンポンプ(鈴木製十八馬力)を金四千五百圓にて購入。同年六月腕用ポンプ一臺を買却した。同十二年十二月鐵骨望樓臺(高サ十一間)を町役場前に建設。同十一年十一月十日賜重

兵第九大隊五個山行軍の際福島橋にて墜落せるに依り消防組員應援して救助に從事した。同十三年攝政宮殿下行啓の警備に組員三十人石動町附近に出動同十四年九月七日井波町大火に應援の爲め組員半數腕用ポンプ一臺出動した同年十二月小型腕用ポンプ一臺購入。同十五年出九町三戸、昭和二年大工町二戸全燒。同年二月　大正天皇御大喪の警戒に服した。同月荒木文平ガソリンポンプ一臺寄附。同年四月一日組織を變更し組頭一名小頭七名消防手九十二名計百名の編成となつた。同月鐵骨警鐘臺を警察署前及西下東下出丸交叉點の二ヶ處に建設。同三年二月十一日縣より旌表旗を授與せらる。同四月十四日縣消防展覽會に幹部全員消防手三名出場し山林火災と防器具の模型を出品した。同年九月十七日在職中死亡組員の追悼法要を營み。十一月御大禮警戒に服した。同四年八月二十八日より三日間城端小學校に於て支部主催の消防講習會に出席受講した。

蓑谷消防組　明治三十四年四月二十五日佛國型第一號腕用ポンプ一臺を購入し私設消防組を創設したが同四十一年五月公設消防組に變更し爾來火災に出動すること殆ど二十回。

僧未消防組　明治四十四年四月私設消防組を設立した。四十五年四月山田村麻村、大正元年六月城端町、大正三年八月北山田村、大正二年十月南山田村上見等各火災に出動し消防に力を盡した。大正三年十一月腕用ポンプ一臺購入。大正五年より同十二年まで火災の爲め他町村へ應援出動したること九回。同十三年十月陸軍特別大演習に　攝政宮殿下御統監の爲め行啓に付警備に服した。大

正十四年より同十五年まで火災の爲め他町村へ應援すること五回。昭和三年十一月御大禮の爲め地方警戒に當つた。同四年七月大籔屋村へ火災應援の爲め出動した。

上平消防組　以前より各部落に私設消防組あつたが大正十年九月二十六日公設消防組組織せられ上平赤尾消防組と稱し、同十二年二月十六日上平消防組と改稱した。同十三年三月十五日上平村小原小學校兒童通學の歸途雪崩のため庄川へ一名押流され瀕死した際消防組員全部出動し救助に從事した。同十三年　攝政宮殿下行啓の警備。昭和三年十一月御大禮の地方警備に從事した。

平消防組　明治四十年平村上梨に腕用ポンプ一臺を購入し私設消防組を組織したが大正十一年公設消防に變更した。同十三年　攝政宮殿下行啓の警備、昭和三年十一月御大禮の地方警備に從事した。

北野消防組　大正十年七月腕用ポンプ一臺購入し同八月私設消防組を組織したが同九月一日公設消防に變更した。同十三年十一月三日　攝政宮殿下行啓の警備、昭和三年十一月御大禮の地方警備に從事した。同四年一月全國消防組御親閲に上田小頭參列の光榮に浴した。創設以來火災に出動したること十回。

北山田消防組　大正十一年十月二日公設消防組組織せられ、同十二年十月二十八日腕用ポンプ一臺購入。從來のものと二臺を有することになつた。同十三

年　攝政宮殿下行啓の警備、昭和三年十一月御大禮の地方警備に從事した。同年六月十一日御大禮記念事業としてガソリンポンプ一臺購入創設以來北山田村に出動二回他町村へ應援九回に及んだ。

大籔屋消防組　大正十一年十一月二十日公設消防組設置し腕用ポンプ四臺を購入した。同十三年攝政宮殿下行啓の警備、昭和三年十一月御大禮の地方警備に從事した。

南山田南部消防組　大正十一年十一月私設消防組を設置し、同十三年四月二十七日公設南山田南部消防組を組織するに至つた。大正十三年　攝政宮殿下行啓の警備、昭和三年十一月御大禮の地方警備に從事した。創設以來火災の爲め出動したこと南山田二回他町村へ應援五回に及ぶ。

山田消防組　大正十二年九月五日公設消防組を設置し同十二年腕用ポンプ一臺購入と同時に警鐘臺を建設。同十三年　攝政宮殿下行啓の警備に從事、同十五年降雪期にポンプ運搬の橇一臺新設した。昭和三年十一月御大禮の地方警備に從事。同四年一月六日御親閲に山田消防組代表として竹山組頭參列の光榮に浴した。創設以來火災に出動したのは山田村二回他町村應援は五回である。

二十一、石動警察署管下

石動消防組　石動町は德川時代町役人に火消役ありて消防の任に當つて居た。廢藩置縣後區役所設けられ消防は駈付人夫と稱し火災に活動して來たが統御を缺きたる狀況であつたから民間に於て統御ある消防機關發生の氣運を醸し德川時代より龍町小矢部川岸に皮革を業とする住民の一部も

り此等は殺伐勇敢の氣象を以て立ち危難に臨むも屈せざる氣風なりしを以て火災に際し皮革を以て製した消防衣を被り身命を顧みず活動するため川岸者と稱して勢威を張り往々亂暴にわたることもあつたが後此等の爲め消防を獨占せらるゝを屑しとせざるもの續出し明治三年今石動町の住民角力行司木村孫三郎なるもの義俠に富み消防組設立を計劃し先づ自己の部屋力士十餘名を以て消防組を設立し明治四年には組員百二十名を擁する消防組を創立し火災に努力すると共に川岸者の勢力を殺いだ、之を見たる當時の區長は大に歡び該消防組に力人世頭組と命名した。蓋し力士を中心として起りたるに因みて命名したのである。斯くて力人世頭組發達と共に內部に勢力爭ひも起り明治八年頃不平分子相計り今石動北部を中心として神通世頭組、同二十四年頃今石動東部に機械組、同町西部に秋葉組、南部に菊水組の六組を生じ、動もすれば相反目したが火災演習に際し功を競ひし爲め實績に於ても見るべき者があつた。此等の消防組の器具としては力人世頭組設立當時は纏一本龍吐水二個胴鍵四筋鳶口三十挺其他掛矢、鋸、鉞、水桶、梯子等二挺乃至四挺宛設備して居た。明治十六年四月埴生村八十餘戶を燒ける大火の際應援し龍吐水何等の價値なきを感じ翌年木村頭取は自己の住宅を擔保とし金を調達し同志十餘名と徒步上京し腕用ポンプ一臺を購入し內容の充實を圖つた他の組も漸次之に倣ひポンプを購入するもの或は製作するもの續出し設備の完全を期し火防上の實績を擧ぐるに至つた。木村孫三郎の義俠的功績は沒却すべからざるものがある。

明治二十七年二月勅令により消防組規則發布せらるゝや之等六組の消防を併合して一とし同年七月公設消防組の實現を見るに至つた。明治四十四年蒸汽ポンプ一臺を購入したるを魁けとし爾後四臺のガソリンポンプを購入し水利の開發等諸般の施設を擴張し面目を一新した。

福岡消防組　元三笠組と稱し明治維新後戶長杉野良平主唱の下に町內火消機關として組織されたので三笠組の名は福岡町は四十万、稗島、下蓑の三部落より成り同町は昔より菅笠を主要產物とせし故笠三蓋を組合はせて纏の印とし以て三部落の團體たることを標識とせるに因みしものと云ふ。明治十四五年頃高岡市大火に應援し目覺しき活動を爲し三笠組の名聲を遠近に轟かせた。明治二十七年二月消防組規則施行と共に福岡消防組と改め公設となつたのである。

津澤消防組　明治四十年四月一日創設。

埴生消防組　元八幡組と稱し埴生村大字埴生に於て明治維新當時創設されたので龍吐水、胴鍵、鳶口等を主なる器具として居たが明治十六年大火災の際器具の不完全なるを覺り腕用ポンプ一臺を購入した。同三十四年一月十八日同村綾子と二部制の下に公設となつた。

北蟹谷消防組　元松尾組と稱し明治二十五年六月同村松尾柴田太郎兵衛外四五の同志が消防組設置の要を覺り村內各戶の寄附を仰ぎ龍吐水其他の消防器具を購入し組員六十五名を以て組織した。二十六年九月九日管下消防組聯合演習に我龍吐水が他組のポンプに劣る事を憤慨し村內の寄附を募

り同廿七年六月七日腕用ポンプ一臺を購入した。同年消防規則發布と共に公設消防に改むるの議起り同三十一年十二月二十八日完備せる公設消防組となつた。

若林消防組　大正元年八月三十日設置されたが當時は同村水牧一部落の組織に過ぎなかつた。後るに同十三年十月に至り水牧を第一部とし西中に第二部を同十四年三月金屋本江に第三部、下中に第四部を設置するに至つた。

立野消防組　元總勇組と稱し明治維新當時、同村立野部落に於て火消機關として設けられ明治二十三年立野大火の際相當活動せるものなるが其後衰微し日清役當時は其影さへなきに至り漸次消防組設置の必要に迫られ明治四十二年十一月二十五日現在の消防組を組織するに至つたのである。

水島消防組　大正十二年五月十一日創設。

正得消防組　大正十三年二月二十八日創設された。

山王消防組　大正十三年四月十一日創設。

大瀧消防組　大正十四年五月一日創設。

南谷消防組　大正元年同村道坪野に於て組織されたる私設道坪野消防組を基とし大正十五年三月二十六日公設に改めたのである。

蔵波消防組　大正十五年三月二十六日創設。

東蔵谷消防組　大正十五年三月二十六日創設。

石場消防組　昭和五年五月十六日創設にて組員(三十七名(組頭一名小頭二名)で組頭は山田三美である。機械器具として輓車一、大桶二、大弓張十、竹口二十五、腕用ポンプ一臺の設備がある。

二十二、戸出警察署管下

戸出消防組　戸出町は往時戸出野と稱せしも、元和三年十一月中條村又右衛門來りて開墾し戸出村と稱へたので、延享三年十月の記錄には防火の爲め要處々々に樹木を植えしとあり。又延實六年二月の記錄には御藏(藩の租米を收藏せし倉庫)及御旅屋附近火災の際戸出及附近村落より一定の人足を差出さしめ警備消火に當らしめた。嘉永五年三月の記錄には火消道具として、かんばん二十八枚とび、胴鍵二筋、はしご一挺、手桶、水溜桶、押棒外旗、提灯を備へ人足は各村々に百四十七を割當てゝ居る。元治元年四月火消役取締帳に道具として

一、水鐵砲二　一、胴鍵一筋　一、押棒一振　一、竹はしご一挺　一、水溜桶二　一、手桶十一　一、とび　一、かんばん十七　一、旗　一、提灯

を備付けて居る、水鐵砲とは龍吐水のことであらう。右の如く藩政時代は詳細不明であるが主として藩倉警護に當つたものらしい。明治九年三月時の縣令山田秀典に宛「消防人員足かため之儀に付願」の記錄あり之に依れば從來火消人足頭取と稱せしを消防人員頭取となしたやうだ。明治十年四

月二十七日庄川洪水の際防禦に盡力せし廉により慰勞の酒肴給與せれた。其賞狀は左の如くである

其の村消防方の內過般庄川筋洪水の際出張し盡力各處の堤防破損に至らんとするを防ぎ或は民家の流失を防禦致候殊勝の事に候條出張所に限り別紙目錄の通り既に派出の現員へ下賜候事

明治十年五月　　第五警察出張所

目錄

一、酒一斗五升　一、干鰈二十枚

明治十年十一月從來の消防組は町名を以て組名に換用し正園町組、横町組、喜多町組等と稱しながら器械は全村一組のみにて名實相違せるより全村一組とし奇勝組と稱し從來の組名を一番組より六番組に改めた、當時の機械は梯子二挺、胴鍵一筋、鳶口五十挺、龍吐水二個、サシマタ一本、大桶一個、手桶一個にて一年の消防費凡そ金十圓竈割に賦課して居た。明治十四年四月三十日石川縣より左記賞狀に木杯を受けた。

金澤病院杉木新村分院新築に付人夫六十五人差出候段奇特に付爲其賞木杯一個下賜候事

明治十五年十月消防規則制定により矢部十藏外六十二名にて消防組設置を屆出てた。同二十五年五月獨逸型腕用ポンプ(二百八十圓)一臺を購入した。同二十七年勅令にて消防規則發布せられ戸出町を一圓とし組員四十人(內組頭一小頭二消防手三七)の公設消防組となつた。同三十四年四月獨逸型腕用ポンプ二臺(百七十二圓と百八十圓)を購入。同三十六年摺鉢公園に消防組記念碑を建設した。同三十九年四月二部制に變更し組頭一小頭七消防手六十六名となつた。同四十二年八月消防記念碑

に臺石を設けた。大正元年十月人輓用蒸汽ポンプ一臺(二千四百九十四圓五十錢)を購入。同六年十二月二部制を三部制に變更し組頭一小頭七消防手九十名となつた。同十二年十月人輓用ガソリンポンプ一臺(三千九百圓)を購入し同時に小頭を九名に變更した。同十三年六月第一部鐵骨警鐘臺(經費七百圓)を建設した。昭和三年三月人輓用ガソリンポンプ一臺(二千三百圓)を購入し同年十月第二部鐵骨警鐘臺(經費四百圓)を建設した。現在は組頭一名小頭九名消防手九十名計九十九名三部制組織である。

光明寺消防組　大正十五年八月十日設置。組頭一名小頭四名消防手四十五名の組織で設立と同時に小森式ガソリンポンプ一臺を購入した。

高波消防組　大正十一年以來消防組なきを遺憾とし村長始め村內有志の奔走に依り大正十二年三月村會の決議を經て四月十日公設消防組を設置し組頭一名小頭三名消防手四十五名を以て組織し同年五月腕用ポンプ被服一式購入(此經費千二百五十圓)。同年八月十六日纏樹立式擧行し、昭和二年四月鐵骨警鐘臺(費用約五百圓)を建設した。

醍醐消防組　大正十一年村內横越の失火が動機となり横越青年團主となり村長及有志の贊助を得て二千餘圓の寄附により同年八月三十六名の組員にて私設消防組を設立し續て同十二年四月公設に變更し組頭一名小頭三名消防手四十五名の組織となり機械器具は腕用ポンプ一式木骨警鐘臺等であ

る。昭和三年十一月鐵骨線樓(四百二十圓)を建設した。

伊勢領消防組　大正十一年九月一千百餘圓を投じて腕用ポンプ一臺裝腹四十九人分木製警鐘臺を購入して公設消防組を設置し組頭一人小頭三人消防手四十五人の組織である。昭和三年四月鐵骨警鐘臺(二百五十圓)を建設した。

二十三、鶴光警察署管下

鶴光消防組　鶴光町は明治初年に於て各町に分れ六組即ち梅鉢組、飯組、卍組、蛇目組、御幣組鳥居組の私設消防組ありて各組に各組頭を有し町の治安を保つべく絶大の威勢を有して居た。明治二十七年二月消防組規則制定と同時に鶴光町を一括した公設消防組を設置し二部制を採つた、當時の組頭は石崎善五郎で秩序整然たるものであつた。大正五年ガソリンポンプ一臺を購入し三部制に組織を變更し昭和三年八月に至り更にガソリンポンプ一臺を増した。創設以來組頭となつたものは石崎善五郎、石黒平吉、西野清右衛門で現在三部制を採り組頭一名小頭部長三名小頭五名消防手百八名計百十七名にてガソリンポンプ二臺腕用ポンプ六臺を有して居る。

吉江消防組　明治初年より同村荒木に三鱗組といふ私設消防組あつたが消防組規則制定以來明治三十三年に同村荒木、高宮の二部落より荒高消防組を設置し組員三十六名を以て成つたが人員不足の爲め大正八年四月組員八十一名に増員し腕用ポンプ三臺と公設吉江消防組と改稱するに至つた

公設以來の組頭は佐々木八郎で他に小頭五人消防手七十五人計八十一人を以て組織し、昭和二年にガソリンポンプ一臺を購入した。

太美山消防組　大正十一年同村吉見部落二十四戸を以て腕用ポンプ一臺購入し私設吉江消防組を組織し居たが大正十三年八月公設に組織變更し組頭一人小頭二人消防手三十人を以て組織した、創設以來の組頭は中島善藏、澤田喜太郎である。

西野尻消防組　明治二十八年同村安居に腕用ポンプ一臺を以て私設消防組を組織し組員二十人を有して居た。然るに大正三年に至り同村岩木、興法寺、下川崎各部落に於てバケツ消防組を組織し火災毎に働いて居たが大正十四年四月此等か西野尻村一團となり公設消防組を組織し定員四十九人とし組頭一人小頭三人消防手四十五人とし腕用ポンプ三臺を備ふることゝなつた。公設以來の組頭は石畠小一郎、山田要太郎、齊藤源右衛門である。

東石黒消防組　大正十四年四月四日同村一團となり公設消防組を設置し組員三十三人にて組頭一人小頭二人消防手三十人の組織となり腕用ポンプ一臺を備付け組頭に米田清行就任した。

廣瀬館消防組　明治三十年頃より同村小坂、祖谷、館の三部落に於て私設消防組を組織し居たるに大正十四年十二月廣瀬館村一圓に渉る公設消防組を組織し組員三十三人内組頭一人小頭二人消防手三十人を定員とし腕用ポンプ一臺を備へた。創設以來の組頭は富澤善中、林外次郎である。

石黒消防組　明治四十五年同村法林寺に腕用ポンプ一臺を有する私設消防組があつたが大正二年五月同村和泉に腕用ポンプ一臺を以て私設消防組を組織するに至り同十四年十二月に至り併合して石黒村を一團とする公設消防組に組織變更し組頭一人小頭二人消防組三十人計三十三人を定員とした。創設以來の組頭は河合忠治、石崎米吉である。

東太美消防組　大正十五年一月十五日組員三十三人より成る公設消防組を設置し昭和四年七月十五日定員三十八人に組織を變更し組頭一人小頭二人消防手三十五人とし腕用ポンプ一臺を設備した創設以來の組頭は細川孝一である。

南蟹谷消防組　大正二年同村高窪部落に腕用ポンプ一臺を有する私設消防組を組織し居たるに同十五年四月公設に變更し組員三十三人より成りしが昭和三年五月人員十五人を增員し組頭一人小頭三人消防手四十五人に變更し腕用ポンプ一臺を設備した。創設以來の組頭は杉木喜六郎である。

西太美消防組　明治三十九年同村才川七に腕用ポンプ一臺を以て私設消防組を組織し居たが大正十五年七月九日西太美を一區域とする公設消防組を設置し組頭一人小頭二人消防手三十人計三十三人を以て組織した、創設以來の組頭は久保次平である。

廣瀬消防組　明治二十年頃より同村竹内、天神、小山、山本部落に消防器具として高張手桶鳶口等を有する私設消防を組織して居たが大正十五年一月廣瀬村を一團とする公設消防組を設置し組頭

一人小頭二人消防手三十人計三十三人の組員を以て組織された。腕用ポンプ一臺を備付け組頭に中川良忠を擧げた。

御親閲參列者

（昭和四年一月六日）

組名	氏名
富山	尾山三郎
同	瀬川伊七
同	織田久藏
同	福井友太郎
同	布村象太郎
同	廣瀬林太郎
同	田島清一郎
堀川	細野定次郎
山室	永森傳四郎
四方	樽野吾一
西吳羽	吉田善永
八幡	中西文吾
草島	藤井義淺
神明	高柳健三
鵜坂	岡村一郎
新庄	高橋豊次郎
上瀧	柴田彌三治
大庄	野尻文之
太田	竹内亨
月岡	橋本榮太郎
廣田	内山定作
東岩瀬	梶榮太郎
大村	岩田元直
針原	岩竹男太郎
大久保	土田松次郎
大澤野	石黒繁次郎

組名	氏名
熊野	向川菊次郎
船峅	廣野勳
福澤	瀬戸次右衛門
任海	野上文雄
細入	中川良右衛門
下タ	田中孫右衛門
滑川	金川修次郎
東水橋	相澤勘次郎
西水橋	藤井精一
北加積	高橋儀二
早月加	石坂專作
東加積	金川久治
濱加積	川原才次郎
西加積	藤永庄吉
上條	堀田彌三郎
下條	齊藤三郎
東加積	川崎清次郎
三鄕	正木芳隆
上市	若尾正信
音杉	宮崎準一
弓庄	松原茂次
宮川	富樫一郎
南加積	伊井兵作
山加積	巽春二
柿澤	野澤健二
大岩	嘉藤利之
五百石	廣瀬幸太郎

組名	氏名
寺田	村崎吉助
下段	高井健二
大森	高田政信
利田	寶田傳次郎
舟橋	稻田健二
高野	藤井彌市
立山	田村政次郎
釜淵	坂井榮三
上段	小池象太郎
魚津	高野茂一
經田	朝野收次
道下	大崎甚之丞
片貝谷	三由助之丞
西布施	入江政憲
松倉	河崎直義
加積	本田元次郎
上中島	今井加能
下中島	松原幸次郎
下野方	佐竹勘左衛門
天神	西田作次郎
上野方	松田長作
三日市	柳川平吉
若栗	平野甚藏
生地	神子田直次郎
石田	瀧澤男作
萩生	南繁次郎
前澤	中島

組名	氏名
下立	梅原仁朔
浦山	佐々木孝
田家	田中岩次郎
東布施	山口平作
大布施	平野作次郎
内山	松谷正
村椿	野島喜三郎
泊	荒尾繁吉
舟見	殿村收作
入善	田中關次郎
椚山	高見久次郎
横山	成田利作
青木	松澤佐平次
山崎	水口豊次
宮崎	竹内與三松
大家庄	清水傳平
境	水島男造
飯野	長田俊一
上原	泉丈右衛門
五ケ庄	西田榮松
愛本	角本德政
野中	富山周作
小摺戸	若島一衛
南保	大森重太郎
八尾	橋爪藤吉
古里	丸山義治
室牧	高木次郎

千里　吉田喜一郎　三輪治行　坂田佐次郎　杉原内健　宮川多肥　池田健一　須原村山下長次郎　保内雄三郎　高岡室崎久右衛門　福山吉田藤助　守村寺下二三四郎　野口嘉平　國部熊三　吉田辰次郎　中野太右衛門　佐上能門　大津山東健吉　小杉大温井喜太郎　橋下條田松田七策　水戸口二田橋安次郎　浅河井原廣田正次郎　黒金山村下長右衛門　老金田長井恒次郎　下村原富太郎　浅河井原廣田勝二郎　二口水戸田橋安次郎　能門町津野太右衛門　佐上野吉田辰次郎　中部嘉平　寺下二三四郎　吉田藤助　室崎久右衛門　高岡羽野義雄　廣原村上長三郎　須原内健治　保内佐次郎　池田肥後　多川坂田伊助　肥後内田健一　杉原宮川行治　宮川三輪善一　坂田喜一郎　吉田熊野　千里山増田徳一　熊野町小林林太郎　大津町小杉温泉　小杉温泉大橋下條　温泉大橋下條松田　大橋下條松田水戸　下條松田水戸口　松田水戸口二田　水戸口二田浅河　二田浅河井原　浅河井原廣田　井原廣田正次　廣田正次郎　正次郎横田　横田安次郎　安次郎岡崎　岡崎芳藏　芳藏尾崎早苗　尾崎早苗外次　早苗外次郎　外次郎高田　高田澤松　澤松直治　松直治郎　直治郎高田　高田永機　永機直吉　直吉作　作野　野口清一　清一向谷　向谷五十嵐吉三　五十嵐吉三郎　吉三郎竹野　竹野川上三次　川上三次郎　上三次郎筋違　筋違伊助　伊助廣瀬　廣瀬勝榮　勝榮川端　川端作次郎　作次郎長井　長井恒次郎　恒次郎竹山　竹山田作助　作助吉田　吉田林藏　林藏黒田又四郎　黒田又四郎北埴生　北埴生谷津　谷津新開　新開湊江　湊江大老　大老江海老　海老江龍王　龍王作野　作野牧

片口　浦花勝喜朔　浦上和右衛門　麥谷十平　萩野一郎　西川太郎兵衛　坪内二之松　横村吉平　横田龍太郎　横澤常次郎　横本善松　演本二郎　國部大岩庄太郎　上坊寺亮一　中井兵吉　上野伊重　伊松慶治　佐藤豊助　山岸實一

堀川	組頭	綱野定次郎
同 第一部	部長	津輿三郎
同	小頭	桃井良太郎
同 第二部	部長	中田義治
同	小頭	北森岩太郎
山室	組頭	永森傳四郎
同	小頭	中川良次
同	同	柴田庄造
同	同	池田良一
西呉羽	組頭	吉田善永
同	小頭	奥井理次
同	同	藤坂善一郎
同	同	酒井儀作
八幡	組頭	中西又吾
同	小頭	佐伯庄三郎
同	同	澤井三信
倉垣	組頭	米山市郎左衛門
同	小頭	窪田文慶
同	同	河西美之助
草島	組頭	藤井義淺
草島 第一部	部長	松田友次郎
同	小頭	石井權澄
同 第二部	部長	松田嘉之助
同	小頭	藤倉善二
明神	組頭	高柳健三
同	小頭	田村孝幸
鵜坂	同	淺岡宗信
同	組頭	岡村市郎
同	小頭	吉野久七
上濱	同	松島義信

◇新庄警察署管下

組名	職名	氏名
新庄	組頭	高橋豊次郎
同 第一部	部長	廣田重作
同	小頭	中村吉七
同 第二部	部長	廣地松之助
同	小頭	馬場政太郎
同	同	松田豊吾
同	組頭	柴田彌三治

上濱	部長	前田淺吉
同	小頭	原井竹次郎
同	同	村井幸太郎
同	同	村田才吉
同	同	淺田梅次郎
大庄 第一部	組頭	野尻文之
同	部長	輿澤孝作
同	小頭	堀口七郎
同 第二部	部長	酒井金次郎
同 第三部	小頭	宮本久
同	部長	山本滋定
同	小頭	村田榮次郎
太田	組頭	浮田總英
同	小頭	竹田義松
同	同	石川修藏
月岡 第一部	組頭	栗山才太郎
同	部長	橋場久雄
同	小頭	齋藤信義
同 第二部	部長	北川清五郎
同	小頭	今村長右衛門
月岡 第二部	小頭	山下政松
同 第三部	部長	谷口彌一郎
同	小頭	中川松次郎
廣田	組頭	東四良兵衛
同	小頭	島田芳松
同	同	内山勘作
蛯川 第一部	組頭	岡本美治
同	部長	堀井正範
同	小頭	竹內長吉
同 第二部	部長	小林忠三郎
同	小頭	高稻恒太郎
同	同	若林長太郎
島村	組頭	大辻蔑
同	小頭	村田仙次郎
同	同	和田作之助
同	同	青山留吉

◇東岩瀨警察署管下

組名	職名	氏名
東岩瀨	組頭	梶榮次郎

東岩瀬	第一部	部長	犬島直治
同	同	小頭	藤澤林太郎
同	同	同	宮城宗平
同	第二部	部長	森內竹次郎
同	同	小頭	高岡平作
同	同	同	種藤次郎
大村		組頭	岩田元直
同	第一部	部長	館盛定吉
同	同	小頭	曾根善次
同	第二部	部長	吉岡修平
同	同	小頭	高木與三次
針原		組頭	岩竹勇太郎
同		小頭	植田利光
同		同	楠康一

◇大久保警察署管下

組名	部名	職名	氏名
大久保		組頭	安井忠重
同	第一部	部長	高見清作
同	同	小頭	植野寅次郎
大久保	第一部	小頭	山本平次郎
同	同	同	吉山廣三郎
同	第二部	部長	吉野政三
同	同	小頭	黑瀨忠治
同	同	同	清水林一
同	同	同	栗山邦二
大澤野		組頭	永瀨勝治
同	第一部	部長	石黑繁次郎
同	同	小頭	谷口達治
同	同	同	栗原一郎
同	第二部	部長	山岸条治
同	同	小頭	金山喜市
同	同	同	石橋平三
同	同	同	久野木力次郎
福澤		組頭	瀨戶治右衛門
同		小頭	木下秀三
同		同	矢口清一
任海		組頭	野上文雄
同		小頭	黑崎松太郎
同		同	竹中磯次郎

熊野		組頭	新山善七郎
同	第一部	部長	向川菊次郎
同	同	小頭	若林太盛
同	同	同	渡邊善正
同	第二部	部長	松森伊三郎
同	同	同	福森調次
船岬		組頭	廣野勵
同	第一部	部長	岡田信之
同	同	小頭	小川忠雄
同	同	同	加藤信孝
同	第二部	部長	西村榮次郎
同	同	小頭	廣野喜太郎
同	同	同	廣野清治
細入		組頭	中川長右衛門
同	第一部	部長	金田林作
同	同	小頭	小上駒次郎
同	第二部	部長	北野乙次郎
同	同	小頭	村田清治
同	同	同	中崎六三郎
同	第三部	部長	上野覺治
細入	第三部	小頭	松村菊次郎
同	第四部	部長	平井健造
同	同	小頭	中川元治
同	同	同	水戶慶治
同	第五部	部長	宮口久太郎
同	同	小頭	山本忠治
同	同	同	前田由之助
同	第六部	部長	清水龜三郎
同	同	小頭	中村豊作
下夕		組頭	田中孫右衛門
同	第一部	部長	野崎直義
同	同	小頭	村上幸太郎
同	第二部	部長	水上清太郎
同	同	小頭	谷中吉十郎
同	同	同	谷端定義

◇滑川警察署管下

組名	部名	職名	氏名
滑川		組頭	八尾菊次郎
同	第一部	部長	金川作二

滑川第一部　小頭　藤田幸太郎
同　同　齋藤茂
同第二部　部長　鹽原嘉一
同　小頭　金森淺次郎
同第三部　部長　齊藤清次郎
同　同　高田甚一郎
東水橋　組頭　相澤勘次郎
同第一部　部長　一村與三右衛門
同　小頭　竹內傳四郎
同　同　水上德重
同　同　小森又一
同第二部　部長　橫山藤吉
同　小頭　高田次郎平
同　同　直江重三
同　同　岩崎與三次郎
西水橋　組頭　藤井精一
同　小頭　越谷豐吉
同　同　高田國次郎
同　同　篠田耕三
同　同　山田政吉

西水橋　小頭　兒島治一郎
濱加積　組頭　川原才次郎
同　小頭　岩城宗雄
同　同　齊藤忠彰
同　同　常田久太郎
同　同　川岸與三次
早月加積　組頭　石坂專作
同　小頭　竹原清次郎
同　同　石坂太次郎
同　同　石坂吉太郎
同　同　竹花彌三
東加積　組頭　金川久次
同　小頭　臼井勝次郎
同　同　岩城隆治
同　同　岩城文三郎
北加積　組頭　一名缺員
第一部　部長　高橋磯二
同　小頭　吉森次右衛門
同　同　上田宗次
同　同　高橋喜作

北加積　第一部　小頭　石倉潤二
同　第二部　部長　松野正行
同　小頭　濱田與一
同　同　中島與右衛門
同　同　中島榮造
同第三部　部長　高橋喜一
同　小頭　勝龜升造
同　同　龜田保之
中加積　組頭　川崎清平
同　小頭　山本六郎平
同　水野賢二
同　伊藤正信
西加積　組頭　二川善二
同第一部　部長　常木久次
同　小頭　小川宗治
同　同　藤井茂治
同第二部　部長　松井庄作
同　小頭　喜中喜三郎
同　同　新村善吉
上條　組頭　勇伊吉三郎

上條　小頭　細川初次郎
同　同　中川清次
同　同　菅田宗一
同　同　堀井作兵衛
下條　組頭　壇原安太郎
同　小頭　齋藤三郎
同　同　野島松次郎
同　同　松島茂好
三郷　組頭　正木芳藏
同　小頭　山岡善作
同　同　林庄太郎
同　同　堂口作治
同　原田庄一郎
同　石黒庄三郎

◇上市警察署管下

名部名	職名	氏名
上市	組頭	椎名平次
第一部	部長	森石平
同	小頭	岩田鶴次郎

上市	第一部	小頭	種梅治
同	第二部	部長	佐伯新清
同	同	小頭	岡田藤助
同	同	同	酒井彌三郎
音杉		組頭	蔦久義
同	第一部	部長	富樫豊吉
同	同	小頭	富樫杏平
同	第二部	部長	早川勇造
同	同	小頭	宮崎準一
同	同	同	平崎達二
同	第三部	小頭	黒田善二
同	同	同	堀田與三兵衛
同	第四部	部長	杉本謙二
弓庄		組頭	酒井貞治
同		小頭	野村菊太郎
同		同	松井勝次郎
宮川		組頭	土肥政二
同		小頭	富樫一郎
同		同	土井時治
同		同	忠藤龜右衛門

南加積		組頭	吉田才吉
同	第一部	部長	伊井兵作
同	同	小頭	酒井弘清
同	同	同	吉井貞次郎
同	同	同	森安治
同	第二部	部長	酒井靜正
同	同	小頭	山形重次郎
同	同	同	土肥榮次郎
同	同	同	吉田吉次郎
山加積		組頭	永田和右衛門
同		小頭	巽春二
同		同	神田力治
同		同	巽村重
柿澤		組頭	中山平吉郎
同		小頭	白石彌作
同		同	桝田政吉
大岩		組頭	嘉藤利之
同		小頭	高橋與七
同		同	嘉藤三郎
同		同	瀧川庄次郎

◇五百石警察署管下

組名	部名	職名	氏名
五百石		組頭	金木次一郎
同		小頭	菅原德三
同		同	廣明幸太郎
同		同	森儀行
同		同	松瀬政治
同		同	齊藤松二
同		同	野崎行雄
寺田		組頭	村崎吉助
同		小頭	清水吉左衛門
同		同	青木健次郎
同		同	奥村安久
同		同	酒井市平
下段		組頭	高井建二
同		小頭	坂井鶴次郎
同		同	久世作次郎
同		同	石原彌七
大森		組頭	高田政信

大森		小頭	萩中勝信
同		同	森井太郎右衛門
同		同	藤原清七
利田		組頭	寶田傳次郎
同		小頭	金山彌市
同		同	船木重治
舟橋		組頭	稻田健治
同		小頭	竹島清作
同		同	立瀬達次郎
高野		組頭	藤井彌市
同		小頭	山川俊
同		同	村崎久男
同		同	上谷秀市
同		同	林重藏
同		同	村井宗治
立山		組頭	田村政次郎
同		小頭	柴山助八郎
同		同	岡本金次郎
同		同	岡本由治
釜ヶ淵		組頭	坂井榮三

釜ヶ淵	小頭 奥村久松
同	同 笹川八重二
同	同 高塚次助
上段	組頭 小池繁太郎
同	小頭 小池良治
同	同 山本清造
同	同 遠藤喜平

◇魚津警察署管下

組名	部名	職名	氏名
魚津	第一部	組頭	林秀雄
同	同	部長	伊東清太郎
同	同	小頭	寺島武市
同	同	同	松倉清次郎
同	第二部	部長	高野豊次
同	同	小頭	魚住直二
同	同	同	安田松次郎
同	第三部	部長	水口九郎
同	同	小頭	舟崎忠二
同	同	同	松田駒次郎
魚津	第四部	部長	西崎保太郎
同	同	小頭	原菊次郎
同	第五部	部長	高野宗四郎
同	同	小頭	高田松次郎
経田	組頭	朝野牧次	
同	小頭	濱田米次郎	
同	同	中村利右衛門	
同	同	宮井周三	
下	組頭	高見源二	
同	小頭	山田恒一	
同	同	大崎吉之丞	
同	同	大島三郎	
片貝谷	第一部	組頭	三吉助之亟
同	同	部長	後藤精作
同	同	小頭	伊藤万長
同	第二部	部長	山本孫次郎
同	同	小頭	澤崎與左衛門
同	第三部	部長	山城虎一
同	同	小頭	能本繁治
西布施	組頭	入江政憲	

西布施	第一部 部長 藤森長作
同	同 小頭 河口彌左衛門
同	第二部 部長 澤山幸作
同	同 小頭 保里昌一
松倉	組頭 河崎直義
同	小頭 高縁潤
同	黒崎直作
同	黒崎米次郎
加積	組頭 宮田六左衛門
同	小頭 本田元次郎
同	青山良太郎
同	岸清左衛門
上中島	組頭 今井嘉能
同	小頭 浦田太郎
同	石倉鐵榮
同	野崎直義
下中島	第一部 組頭 梅原幸次郎
同	部長 野田與三次郎
同	同 小頭 松井清次郎
同	同 折川重次郎
下中島	第一部 小頭 石坂松之助
同	第二部 部長 島津精一
同	同 小頭 八倉憲忠作
同	同 澤田長三郎
天神	組頭 關口正信
同	小頭 大久保源二
同	國木森吉
下野方	組頭 佐竹勘左衛門
同	小頭 林與右衛門
同	佐々木勇作
上野方	組頭 廣田良作
同	小頭 谷口庄作
同	大澤豊吉

◇三日市警察署管下

組名	職名	氏名
三日市	組頭	寺田彌左衛門
同	第一部 部長	浦田安次郎
同	第二部 部長	梅澤浅次郎
同	小頭	岩井與三次

同	同	八木竹次郎
生地	組頭	神子田直次郎
同 第一部	部長	柳川清長
生地 第二部	部長	湊屋淺次郎
同	小頭	田中喜三次郎
同	同	能登榮作
同	同	角谷嘉三松
同	同	三日市作次郎
若栗	組頭	西田武右衛門
同	小頭	前田直三
同	同	大角作次郎
同	同	平野甚藏
石田	組頭	瀧澤勇作
同	小頭	谷村外次郎
同	同	宮崎重松
荻生	組頭	稻垣惇平
同	小頭	南繁次郎
同	同	村上健太郎
前澤	組頭	中島肇
同	小頭	澤井甚之助

同	同	中野小次郎
下立	組頭	瀧林與作
同	小頭	上島榮作
下立	小頭	柳原仁朔
浦山	組頭	佐々木孝
同	小頭	上坂林太郎
同	同	中宇之吉
同	同	澤田峯吉
田家	組頭	田中岩次郎
同	小頭	宮崎吉二
同	同	辻庄太郎
同	同	木下繁作
東布施	組頭	山口平作
同 第一部	部長	谷口助次郎
同 第二部	部長	村田彥右衛門
同	小頭	山本源作
同	同	黑田祐二
大布施	組頭	平野作次郎
同	小頭	原松兵
同	同	長谷川廣吉

同	同	藤澤常次郎
內山	組頭	松谷正
同 第一部	部長	山形九郎兵衛
內山 第二部	部長	山形松次郎
同	小頭	田倉六右衛門
同	同	水野一郎
同	同	畠山良平
同	同	岩田嘉作
同	同	河村佳太郎
村椿	組頭	能島喜三郎
同	小頭	中島與吉
同	同	西島小七

◇泊警察署管下

組名	部名	職名	氏名
泊		組頭	島端吉次郎
同	第一部	部長	荒尾繁吉
同	第二部	部長	松下與三
同		小頭	館幸吉
同		同	島田久作

同	同	大和仁左衛門
同	同	山口美之助
入善	組頭	米澤元健
入善	小頭	鍋島亮耕
同	同	田中關次郎
同	同	竹內文太郎
同	同	竹內萩太郎
舟見	組頭	內島甚一
同	小頭	管洞市次郎
同	同	入江榮次郎
同	同	殿村周作
椚山	組頭	青木良平
同	小頭	上島幸左衛門
同	同	高見久次郎
橫山	組頭	廣川周造
同	小頭	花田米郎次
同	同	成田利作
青木	組頭	松澤佐平次
同	小頭	山崎管次郎
同	同	稻場長作

山崎	組頭	鹿籠久安
同	小頭	長津由正
同	山崎	中島喜代次
山崎	小頭	永口豊二
大家庄	組頭	清水傳平
同	一部	都長藤田二之次郎
同	同	小頭高田啓治
同	同	廣澤三郎
同	同	池田理三郎
同	宮崎	由井彌吉
同	同	竹内彌三松
同	同	折谷喜重
同	境	松本豊松
同	同	水島保綱
同	同	水島勇造
同	同	水島德平
飯野	組頭	長田俊一
同	第一部	都長伊野作次
同	同	小頭高見源作
同	同	廣田勇作

同	第二部	都長井田英松
同	上原	小頭西島八郎右衛門
同	同	組頭泉丈右衛門
上原	小頭	金田利八
同	本田吉右衛門	
同	小田才次郎	
同	五ヶ庄	組頭山本松次郎
同	小頭	廣瀬龜次郎
同	河内幸次郎	
同	廣田淺次郎	
同	愛本	組頭大阪長作
同	小頭	佐々木次盛
同	角本德正	
同	山本德吉	
中野	組頭	富山周作
同	小頭	山岡源造
同	松平重松	
同	窪野周歳	
同	組頭	伊林順平
小摺戸	小頭	瀧澤彌四右衛門

同	若島一術	
南保	組頭	太森重太郎
同	小頭	土用弘吉
南保	小頭	米丘二太
同	勝原保	
新屋	組頭	中山康平
同	小頭	鍋島調太郎
同	長谷孝義	
同	高島仁之	
同	藤田良藏	

◇八尾警察署管下

組名	職名	氏名
八尾	部長	藤吉
同	第一部	組頭橋爪
同	部長	登山虎吉
同	同	小頭布井松太郎
同	第二部	部長宮田定次郎
同	同	小頭松井力松
同	同	城山恒治
同	第三部	部長高島政次郎

同	古里	小頭布谷菊次郎
同	組頭	九山義次
同	小頭	吉野源藏
古里	小頭	增山政有
同	池田孝次	
宝收	組頭	高木治郎
同	小頭	西野菊次郎
同	高乘繁義	
千里	組頭	澤野竹次郎
同	小頭	江尻元義
同	横山宗信	
熊	組頭	三輪三治
同	小頭	加藤富平
同	吉田清作	
山田	組頭	吉田喜一郎
同	第一部	都長千澤喜一
同	小頭	山岸市藏
同	坂本與次郎	
同	第二部	都長谷川勝太郎
同	小頭	谷川清松

同	同	中林外次郎
杉原	組頭	新村菊次郎
同	部長	新村長太郎
同	小頭	新村吉春
同	部長	杉林重信
同	小頭	大內仙太郎
宮川	組頭	池內佐次
同	小頭	鎌田幸作
同	同	竹中友次郎
池多	組頭	肥田健耕
同	小頭	西野與四郎
同	同	坪田平作
保內	組頭	山下龜次郎
同	部長	大石虎次郎
同	小頭	中谷與四郎
同	同	淺野豐
同	部長	村井鐵治
同	小頭	藤井正治
同	同	石黑勝廣
須原	組頭	水本林吾
同	小頭	那知丞作
同	同	今井金治
速星	組頭	奧野義衛
同	小頭	安村嘉永治
同	同	笹木榮次郎

◇高岡警察署管下

組名	部名	職名	氏名
高岡	組頭	菅野啓二郎	
同	部長	廣羽久右衛門	
同	小頭	栟森長次郎	
同	同	磯部方需	
同	部長	高安梅造	
同	小頭	平田彌太郎	
同	部長	大島虎次郎	
同	小頭	井波義一	
同	部長	高畑久作	
同	小頭	中崎多一	
同	部長	中村金藏	
同	小頭	木下勝次郎	

高岡	部長	飛見丈繁
同	小頭	金森吉五郎
同	部長	山本太一
同	小頭	飛田與三
同	部長	竹內達二
同	小頭	角田久太郎
大門	組頭	正力定吉
同	小頭	米谷佐吉
同	同	米山五七郎
同	同	山田利吉
野村	組頭	吉田藤助
同	小頭	福本清
同	同	麻生安太郎
能町	組頭	津野太右衛門
同	部長	折田彌作
同	小頭	能松松太郎
同	部長	東源一郎
同	小頭	岡野重信
同	同	尾間忠治
同	同	有藤久義
二上	組頭	細野藤平
同	部長	吉田辰次郎
同	小頭	田中由太郎
同	部長	北世金藏
同	小頭	沙米次郎
守山	組頭	寺下二三四郎
同	小頭	北本榮太郎
同	同	札木条四郎
同	同	原榮太郎
同	部長	浦野信一
同	小頭	大卷喜作
國吉	組頭	磯部嘉平
同	小頭	立浪爲吉
同	同	米田甚藏
同	同	伊東五三郎
同	同	石黑喜太郎
福田	組頭	山岡次郎右衛門
同	小頭	室崎德次郎
同	同	本澤勝二
同	同	利谷定次郎

福田	小頭 石浦幸造
佐野	組頭 志村仁三郎
同	小頭 清水次作
同	同 安部鐵次郎
同	同 上阪鐵

◇小杉書棄署管下

名部名	職名 氏名
小杉	組頭 島木善作
同 一部	部長 温井龍太
同	小頭 梶谷竹次郎
同	同 羽柴周二
同 二部	部長 高木助太郎
同	小頭 津田豊吉
篠田	組頭 大坪喜策
同	小頭 高田覺次郎
同	同 長原章吉
同	同 明地幸作
黒河	組頭 藤岡三郎
同	小頭 佐渡龜次郎
同	小頭 原輪造
同	黒田榮次郎
同 下村	組頭 岡原富太郎
同	小頭 竹内力貞
同	黒川正次
二口	組頭 正橋又三郎
同	小頭 正橋安治
同	宮永平藏
淺井	組頭 廣田吉太郎
同	小頭 廣田勝二
同	廣本定次郎
水戸田	組頭 三津井治作
同	小頭 臍島治郎助
同	田畑太七
橋下條	組頭 金森元次郎
同	小頭 山崎榮次
同	松田與七
老田	組頭 中橋憲太郎
同	小頭 横井長城
同	横山芙喜

老田	小頭 綠谷嘉七
金山	組頭 廣永富治
同	小頭 高澤信作
同	同 長井恒次郎
大江	組頭 川筋伊助
同	小頭 笹川與四郎
同	同 宮森久造
同	同 柴田宗作

◇新潟書棄署管下

名部名	職名 氏名
新潟	組頭 宮林彦九郎
同 第一部	部長 野上三次郎
同 ◇	小頭 賀久嘉藏
同	同 木林五郎平
同	同 今枝與七
同 第二部	部長 八島逸平
同	小頭 沖與三右衛門
同	同 室宗次郎
同 第三部	部長 朴木留次郎
同	小頭 小笹善一郎
同	佐賀宗太郎
同	組頭 大坂彌一郎
同	小頭 寺坪勝藏
同	向田清一
同	安井重二
同 道	組頭 谷道清
同	小頭 宮島茂八
同	川端周作
同	片岡清藏
同 堀岡	組頭 竹脇直昌
同	小頭 橘川與三松
同	中村宗太郎
同	總名豐次郎
海老江	組頭 五十嵐吾三郎
同	小頭 竹林與三吉
同	同 下條竹次郎
本江	組頭 花房喜朔
同	小頭 三原清太郎
同	宮垣與一

片口　組頭　浦山勢十郎
同　小頭　杉原勇次郎
同　堀久吾
塚原　組頭　浦上和右衛門
同　小頭　岸與三平
同　宮村勇太郎

◇伏木警察署管下

名部名	職名	氏名
伏木	組頭	麥谷十平
同　第一部	部長	棚田長歳
同　◇同	小頭	尾山吉之助
同　第二部	部長	岡田善左衛門
同　同	小頭	河端藤次郎
同　第三部	部長	牧野定次郎
同　同	小頭	國分常太郎

◇氷見警察署管下

名部名	職名	氏名
氷見	組頭	青木與四平
同	神埜儀	
同	都長	放生與三松
同	堀埜治助	
同	田子佐平	
同	伊藤伊助	
同	小頭	田畑又十郎
同	廣澤俊之	
同	余川佐茂	
同	塩井佐次平	
同	井波作治	
同	袴茂作	
同	加納千右衛門	
同	屋敷元義	
宇波	組頭	荻野一朗
同	小頭	高野權六
同	山本茂	
同	濱野八藏	
同	森本藏次	
富	組頭	陸田秀太郎
同	小頭	西川太郎兵衛
同	松野於右衛門	

窪	小頭	濱手長藏
同	松下平太郎	
蓑田	組頭	山崎巽
同	部長	井山兵一
同	山本良助	
同	小頭	廣瀨義之
同	坪内仁之松	
速川	組頭	橋本吉平
同	小頭	横山宗一
同	國本嘉瑞	
宮田	組頭	西井要松
同	小頭	守井榮
同	東政二	
同	林時文	
同	増本五郎	
加納	組頭	要門佐一郎
同	小頭	譯野榮博
同	松木善作	
同	川上彌三郎	
阿尾	組頭	島尾鐵
同	岩池定次郎	
同	福田藤太郎	
同	小林清太郎	
同	辻本義太郎	
八代	組頭	國雲二郎
同	小頭	多胡國衛
同	多胡常次	
同	坂上理太郎	
同	田中哲次郎	
女良	組頭	大西第示
同	山口信一	
同	部長	田中孝重
同	小頭	竹森庄之助
同	濱本善松	
同	大西清太郎	
福祐	組頭	堂前幸吉
同	小頭	大岩庄太郎
同	中田莊八郎	
同	畑中敬吉	
十二町	組頭	中山仁良

十二町	小頭	辻長松
太田	組頭	武田恒榮
同	小頭	宮脇喜作
同	同	高藤豊右衛門
同	同	森田正一
同	同	吉原榮太郎
熊無	組頭	片折重曾
同	小頭	上坊寺亮一
同	同	山下守一
久目	組頭	山岸實
同	小頭	守谷門藏
同	同	谷口五次郎

◇出町警察署管下

組名部名	職名	氏名
出町	組頭	佐藤豊助
同	部長	萩原清
同	同	杉下尙一
同	小頭	遠藤定次郎
同	同	林權藏
福野	組頭	大藏藤兵衛
同	部長	伊藤鐵治
同	同	中村重郎
同	小頭	福富卯一郎
同	同	森田俊三
同	同	藤堂芳太郎
油田	組頭	金堂久克
同	小頭	西原義則
同	同	窪田淳三
同	同	向井正雄
庄下	組頭	根尾千治
同	小頭	四十萬次郎
同	同	瀬尾正雄
同	同	土田正平
同	同	吉田幸造
太田	組頭	安念政太郎
同	小頭	安念三達
同	同	平木勇作
同	同	上田義松
中野	組頭	高田外次郎

中野	小頭	畑五次
同	同	飯田平八
同	同	太田榮太郎
五鹿屋	組頭	堅田吉平
同	小頭	早苗喜平
同	同	宮崎精平
同	同	岡本八郎
東野尻	組頭	小倉榮作
同	小頭	水木宇一
同	同	岡崎忠藏
南般若	組頭	元井又四郎
同	小頭	津田治作
同	同	松永和吉
同	同	元井俊一
柳瀬	組頭	高原耕造
同	小頭	江田覺藏
同	同	尾崎由藏
同	同	布原平次
林	組頭	渡邊員五郎
同	小頭	出村嘉之
林	小頭	老與次郎
同	同	新藤長市郎
同	同	中島數太郎
鷹栖	組頭	林良吉
同	小頭	原田作衛
同	同	室永彌市
同	同	小寺龍藏
野尻	組頭	藤田甚平
同	小頭	高澤松二
同	同	築場與藏
廣塚	組頭	重松喜平
同	小頭	上古幸作
同	同	安田勘助
同	同	三浦重政
南野尻	組頭	大門榮太郎
同	小頭	吉田覺四郎
同	同	菅原召太郎

◇中田警察署管下

組名部名	職名	氏名
中田	組頭	田中機作

中田	都長 酒井喜九郎
同	同 關岡二郎
同	小頭 石突龍
同	同 宮崎正之
同	同 杉本伊之吉
額藏	組頭 武都藏吉
同	小頭 八田安
同	島外次郎
增山	組頭 土田治八
同	小頭 安ヶ川博文
同	安ヶ川善吉
東般若	組頭 菅野祐次
同	小頭 永森久之
同	齋藤久藏
大清水	組頭 御旅屋佐七郎
同	小頭 青島吉藏
同	吉田太七
同	今村榮造
西都金屋	組頭 高畑仁十郎
同	小頭 大屋彦二

西都金屋	小頭 大居良平
野上	組頭 沖田嘉之
同	小頭 沖田正吉
同	細川與三次郎

◇井波警察署管下

組名	職名	氏名
都名	組頭	丹波橘二
同	都長	白川彌平
同	木谷宇平	
同	小頭	崎田榮一
同	青木與四郎	
同	梅崎喜八	
同	竹村太八	
三清	組頭	齋藤梓郎
同	小頭	高野有吉
同	武田嘉一郎	
同	久嘉茂三郎	
青島	組頭	野村重正
同	小頭	小西豐藏

青島	同 神田才太郎
同	同 井上清一郎
同	小西和三次郎
金屋	組頭 高島卯太郎
同	小頭 木村長次郎
同	藤森次作
同	中川吉藏
同	佃勇作
山野	組頭 藤井安太郎
同	小頭 岩倉吉三郎
同	松井作太郎
同	吉田爲一
同	長谷川八右衛門
種田	組頭 新井常太郎
同	小頭 倉田祐治
同	石黒青
井口	同 藤井竹次
同	組頭 武部四郎
同	小頭 山崎伊次郎
同	小山幸松

南山見	組頭 小橋文郎
同	小頭 澤田喜平
同	前川柴太郎
同	前川太平
利賀	組頭 高倉儀市
同	都長 木田清光
同	上野清一郎
同	岩屋義保
同	高桑善二
同	小頭 高倉岩藏
同	野原與七
同	長原平三郎
同	上野吉尾
同	高藤熊太郎
同	笠原源良
同	松長五作
同	高桑豐吉

◇城端警察署管下

組名	部名	職名	氏名
同	城端	組頭	森井惠橘
同	第一部	部長	宮岡周三郎
同	同	小頭	西川榮一
同	同	同	木村外一
同	第二部	部長	河合常次郎
同	同	小頭	沼田匡助
同	第三部	部長	今井彙圖
同	同	小頭	金田卯太郎
同	南山田南部	組頭	坂本與一郎
同	同	小頭	山道彌三郎
同	山田	組頭	西井卯一郎
同	同	小頭	西村三右衛門
同	同	同	大浦常藏
同	信末	小頭	水上孝一郎
同	同	同	石村藤八郎
同	同	組頭	石村直三郎
同	同	同	富田常次郎
同	同	小頭	池川忠信
同	裏谷	組頭	後六之助
同	同	小頭	池川忠信
同	同	同	富田常次郎
同	同	組頭	石村直三郎
同	同	小頭	水上孝一郎
同	同	同	石村藤八郎
同	南山田南部	組頭	坂本與一郎
同	同	小頭	山道彌三郎
同	山田	組頭	西井卯一郎
同	同	小頭	西村三右衛門
同	同	同	大浦常藏
同	第一部	部長	宮岡周三郎
同	同	小頭	西川榮一
同	同	同	木村外一
同	第二部	部長	河合常次郎
同	同	小頭	沼田匡助
同	第三部	部長	今井彙圖
同	同	小頭	金田卯太郎
同	北野	組頭	上田永吉
同	同	小頭	南部與平
同	上平	同	荒木小三郎
同	第一部	部長	岩瀨菊次郎
同	同	小頭	天野三次
同	同	同	安達彪助
同	第二部	部長	上野龜藏
同	同	小頭	谷彌十郎
同	同	同	竹中助之丞
北山田		組頭	尾川律平
同		小頭	井口久一
同		同	山田源一
同		同	豐田茂
平	第一部	部長	宮崎清利
同	同	小頭	井幡幸順
大鋸屋◇石動警察署管下		組頭	坂下幸作
同	同	小頭	高桑庄太郎
同	同	同	小谷川善七
北野		組頭	上田永吉
同		小頭	南部與平
上平	第一部	部長	岩瀨菊次郎
同	同	小頭	天野三次
同	同	同	安達彪助
同	第二部	部長	上野龜藏
同	同	小頭	谷彌十郎
同	同	同	竹中助之丞
北山田		組頭	尾川律平
同		小頭	井口久一
同		同	山田源一
同		同	豐田茂
平	第一部	部長	宮崎清利

平	第一部	小頭	横井雄吉
同	同	同	川原德兵衛
同	同	同	中島理作
同	第二部	部長	池田精作
同	同	小頭	山下榮藏
同	同	同	池田文吉
同	第三部	部長	久保清一
同	同	小頭	宮本富哉
同	同	同	前川松藏
同	第四部	部長	竹原岩松
同	同	小頭	小坂平藏
同	第五部	部長	山本次正
同	同	小頭	山崎清藏
同	第六部	部長	羽馬利佐
同	同	小頭	堂本清作
同	第七部	部長	池端清太郎
同	同	小頭	圖書外茂吉
同	第八部	部長	山本清長
同	同	小頭	永森市藏
同	第九部	部長	和田仁助
平	第九部	小頭	山下太作
同	第十部	部長	高田常治
同	同	小頭	鉢呂五平

◇石動警察署管下

組名	部名	職名	氏名
石動	第一部	部長	荒井平二
同	同	小頭	坪野次作
同	第二部	部長	細川要造
同	同	小頭	棚田俊一
同	第三部	部長	三浦吉太郎
同	同	小頭	本鄉清
同	第四部	部長	嶺茂一郎
同	同	小頭	麻島嘉作
同	組頭	上野兵左衛門	
同	小頭	山岸勇造	
同	組頭	島倉清旅	
同	同	橋本信太郎	
北蟹谷	小頭	松井喜作	

北蟹谷　小頭　柴田義一郎
壇生　組頭　坂田太仲
同　小頭　上田武嗣
同　池田甚右衛門
同　市川市造
同　八十島嘉平
津澤　組頭　渡邊三良
同　飯原長太郎
同　安井吉藏
立野　小頭　沼田權次郎
同　組頭　石尾爾次郎
同　小頭　武内宇太次郎
同　畠山藤作
若林　同　田中清庶郎
第一部　組頭　津川恒三郎
同　部長　田屋他三次
同　小頭　出間作藏
第二部　部長　黒田又四郎
同　同　柴田菊二
第三部　部長　中村友太郎

若林第三部　小頭　柴田外吉
同　部長　津田義則
第四部　小頭　宮田義雄
同　組頭　長原長治
島　小頭　福田久俊
同　同　菊永八郎
同　長谷川藤八郎
得　同　吉田奎次
正　組頭　高田吉次郎
同　小頭　澤田清太郎
王　同　小倉外吉
山　組頭　佐伯定吉
同　小頭　畠山重吉
同　大道藤次郎
瀧　組頭　中山利喜
小頭　土谷準之助
◇正體書簡下
同　西野與作
同　西田多柔知
南谷　組頭　村上保範
小頭　村上利吉

南谷　小頭　村西幸市
叢波　組頭　吉岡太郎平
同　小頭　藤田吉次
同　石野茂作
同　藤田正勝
東蟹谷　組頭　岡本宗太郎
小頭　高城英三
同　河原制治
同　畠山吉多嘉
同　高田孝章
堤　組頭　山田三美
小頭　九山八郎
同　前野良太郎
子撫　組頭　東吉太郎
同　小頭　中山兵三
同　澤田茂壹

◇戶出警察署管下

組名　部名　職名　氏名
戶出　組頭　永森紋次郎

戶出　第一部　部長　柴岡太四郎
同　小頭　沼松造
同　武田運左衛門
第二部　部長　矢鋪清一郎
同　小頭　吉澤甚平
同　太野與三郎
第三部　部長　高田流平
同　小頭　中村理作
伊勢領　組頭　宮本篤次郎
同　小頭　深島孫二
同　宮本彌八郎
同　川原安太郎
醍醐　組頭　前多長作
同　小頭　兒島與吉郎
同　今庄義雄
同　西都豐作
高浪　組頭　中川清右衛門
同　小頭　柴前田本三
同　大江勘次
同　石崎三郎

光明寺　組頭　吉田忠夫
同　小頭　藤井宗一郎
同　同　澤田喜藏
同　同　脇田佐七郎
同　同　澤田榮三

◇鵜光警察署管下

鵜光　組頭　西野清右衛門
同　部長　桐山友吉
同　勢藤源之丞
同　山本平藏
同　小頭　石崎久造
同　鹽谷宇一
同　川口彦太郎
同　石黒和八郎
同　島義一
吉江　組頭　佐々木八郎
同　小頭　水内三次
同　幅田清一郎
同　石黒直吉

吉江　小頭　荒井陸集
同　吉田吉則
太美山　組頭　澤田喜太郎
同　小頭　松本忠圓
同　松本伊太郎
西野尻　組頭　齊藤源右衛門
同　小頭　沼田外吉
同　池田清盛
同　大浦佐平次
東石黒　組頭　米田清行
同　小頭　佐々木喜一郎
同　金田勘四郎
廣瀨館　組頭　林外次郎
同　小頭　常本治
同　庵苔藏
石黒　組頭　松本六太郎
同　小頭　河合又三郎
同　幾田源治
東太美　組頭　細川幸一
同　小頭　井澤元治

東太美　小頭　鵜野伊澄
南蟹谷　組頭　杉本喜六郎
同　小頭　中屋松太郎
同　吉田重三郎
同　西村甚三郎
西太美　組頭　久保次平

少年消防隊幹部名（昭和五年七月現在）

本縣少年消防隊隊名、組織年月日、人員及現在指揮者の氏名左の如し

◇富山警察署管下

隊名	組織年月	人員	現在指揮者
八人町	大正十五年十二月	一八〇	高橋長太郎
四方	大正十五年九月	七二	樽野彦藏
西吳羽	大正十五年九月	一一四	江尻彦十郎
寒江	昭和二年四月	四四	氷見太作
草島	昭和二年六月	三〇	藤本久藏
八幡	昭和二年五月	三六	大澤常作
倉垣	昭和五年五月	六二	佐伯嘉一
長岡	昭和二年三月	五〇	村上敏
神明	大正十五年十月	一九	和重清俊
鵜坂	大正十五年十月	三六	太田清孝

◇新庄警察署管下

隊名	組織年月	人員	現在指揮者
藤木	大正十五年十二月	三九	佐藤政吉
廣田	大正十五年十二月	二一	柳澤之
總川	大正十五年九月	五七	谷口善作
太田	大正十五年十二月	六五	櫻井義次郎
月岡	大正十五年十二月	三八六	熊本政次郎
上瀨	大正十五年十月	一一九	日伊彦一郎

支坂寺	昭和二年四月	四三	佐藤哲郎
小原	昭和二年四月	二五	高見嘉則
岡田	昭和二年四月	二〇	廣瀬彌平
牧	昭和二年四月	三〇	佐伯實
大庄	大正十五年十二月	九五	中田政吉
小見	昭和二年四月	八五	草島一雄

◇大久保警察署管下

隊名	組織年月	人員	現在指揮者
大久保	大正十五年七月	八一	宇野淨外男
新保	昭和二年三月	六六	野田安太郎
福澤	昭和二年五月	五一	落合浩太郎

◇滑川警察署管下

隊名	組織年月	人員	現在指揮者
朝日	昭和四年八月	二〇	高田庄太郎
中加積	大正十五年十月	四二	高見元吉
北加積	大正十五年九月	六五	關安次郎
西加積	昭和二年六月	六三	黒田德昌
早月加	大正十五年九月	六〇	小善正
東加積	大正十五年九月	五七	生駒修治

◇上市警察署管下

隊名	組織年月	人員	現在指揮者
上市	大正十五年八月	五四	高瀬陳治
南加積	大正十五年十月	三二	且尾傳之助
山加積	大正十五年十二月	五二	林實弘
大岩	大正十五年十二月	二二	土肥嘉治
宮川	大正十五年十一月	二九	廣田與守
弓庄	大正十五年十二月	四〇	山林重作
相ノ木	大正十五年十二月	六一	杉木坪義
柿澤	昭和三年十一月	二七	小川與八

◇魚津警察署管下

隊名	組織年月	人員	現在指揮者
小川寺	大正十五年九月	三五	金谷長作
黒澤	大正十五年九月	三五	浦田恒八
經田	大正十五年九月	八九	波瀬周慶
天神	大正十五年九月	四二	杉山八郎
松倉	大正十五年九月	六〇	堀六郎
上中島	大正十五年九月	三七	板井久次郎
道下	大正十五年九月	六七	畔田宗藏
加積	大正十五年十月	五〇	北村作次郎
片貝谷	大正十五年十月	四五	五十嵐宗正
下中島	昭和二年一月	五〇	栖屋孫一
上野方	昭和二年四月	三九	澤越重
下野方	昭和二年四月	二四	村上弥

◇三日市警察署管下

隊名	組織年月	人員	現在指揮者
東布施	大正十五年七月	四〇	澤田哲成
内山	大正十五年八月	四〇	種徳孝
若栗	大正十五年十二月	四八	中陳林次郎
荻生	昭和二年四月	五七	本波榮太郎
前澤	昭和二年六月	四一	河村德太郎
浦山	昭和二年十一月	三一	辻米作
三日市	昭和三年十月	一二〇	山田眞右衛門
田家	昭和三年十月	二〇	林清次郎
生地	昭和三年十月	八一	福澤彦三
下立	昭和三年十月	三六	關貞次郎
石田	昭和三年十月	七八	高松直治
大布施	昭和三年十月	男五二 女四三	細田清之助

◇泊警察署管下

隊名	組織年月	人員	現在指揮者
舟見	大正十五年七月	五〇	矢木與三
大家庄	大正十五年七月	五八	細田龜次郎
山崎	大正十五年六月	四三	山田孝
泊	大正十二年三月	八〇	小澤篤太郎
野中	大正十五年六月	二四	坂本米藏
小摺戸	大正十五年十一月	五〇	千田次之

◇八尾警察署管下

隊名	組織年月	組員	現在指揮者
八尾	大正十五年九月	三〇〇	平尾鶴次郎
古里	大正十五年十月	一〇〇	吉山幾太郎
朝日	昭和二年十二月	五六	西田宗藏
保内	昭和二年二月	一一三	大澤泰治
室牧	昭和二年十二月	五九	兵岡菊次郎
杉原	大正十五年七月	九一	西野米次郎

◇小杉警察署管下

隊名	組織年月	組員	現在指揮者
水戸田	大正十五年八月	六二	高瀬喜一郎
大江	大正十五年九月	五〇	小松周照
柳田	大正十五年十月	七五	河合太七郎
掘下條	大正十五年十月	三四	石川正則
二口	大正十五年十二月	四四	長谷清輝
淺井	大正十五年十二月	八〇	笹谷秀虎
黒河	大正十五年十二月	三〇	坂井安太郎
大島	大正十五年十二月	七一	龍野義一
小杉	昭和元年十二月	一一二	高瀬正浦
老田	昭和二年四月	四六	寺内善造
七美	昭和二年四月	三二	藤澤幸作
下村	昭和二年四月	四〇	藤井太藏
金山	昭和二年四月	五〇	宮下朝晉

◇新湊警察署管下

隊名	組織年月	組員	現在指揮者
作道	大正十五年九月	六一	久々湊春二郎
片口	大正十五年十月	八三	安元財市郎
牧野	昭和二年四月	四七	荒井幾太

◇氷見警察署管下

隊名	組織年月	組員	現在指揮者
柿谷	大正十五年八月	八〇	酒井辰猪
谷屋	大正十五年十二月	三五	酒井清作
論田	大正十五年十二月	三三	月光格
小桑	昭和二年五月	四四	新井見龍
床鍋	昭和二年五月	一九	小清水與四松
宮田	昭和二年八月	四七	敦賀貞太郎
宇波	昭和二年七月	七〇	大川紋平
太田	昭和二年九月	四八	栗原清太郎
池田	昭和二年十一月	三六	澤田彦十郎
岩ケ瀬	昭和二年十一月	二一	喜多清太郎
赤毛	昭和二年十一月	一二	齊藤源四郎
稻積	昭和三年五月	四五	濱本俊之

◇出町警察署管下

隊名	組織年月	組員	現在指揮者
福野	大正十一年六月	八八	平野初之助
油田	大正十五年十二月	四五	米山健太郎
庄下	大正十五年六月	三五	杉下高二郎
太田	大正十五年九月	四四	八田長二
中野	昭和四年四月	三〇	河合幸次郎
五鹿屋	大正十五年九月	五〇	菊賀忠作
南般若	大正十五年六月	三五	藤井久伊
柳瀬	昭和二年六月	三八	黒田信之
林	昭和二年一月	五八	鈴木治三郎
貴和	昭和五年十一月	七五	吉田薫
廣塚	大正十五年二月	七六	今井宇太郎
南野尻	大正十五年十一月	四〇	上田宇吉郎
鷹栖	大正十五年十二月	一〇九	中村榮藏

◇中田警察署管下

隊名	組織年月	組員	現在指揮者
栃檀野	大正十五年七月	六九	森田他八
般若野	大正十五年十月	三五	中袖彦輔
栃檀山	大正十五年十月	四八	武田五三郎
般若	大正十五年七月	一二四	渡邊嘉一郎

◇井波警察署管下

隊名	組織年月	組員	現在指揮者
井波	大正十五年五月	一〇〇	多田孝正
東山見	昭和三年五月	男九〇 女三〇	北川清一

◇石動警察署管下

隊名	組織年月	組員	現在指揮者
石動	大正十五年七月	三〇六	荒木惣平
南谷	大正十五年七月	一部三五 二部二七	青木重次郎
埴生	大正十五年七月	一一〇	榛木芳秀
蟹北	大正十五年五月	一六七	高島吾一
東蟹谷	大正十五年四月	三五	矢部德太郎
津澤	昭和二年二月	一五〇	高島秀一
水島	大正十五年九月	九六	棚田與吉
松澤	大正十五年七月	三八	國井清章
若林	大正十五年七月	八〇	松永武俊
正得	大正十五年七月	六一	稻原源治
荒川	昭和二年七月	六三	廣栖嘉市
子撫	大正十五年八月	三九	葉藤義外
宮島	大正十五年十月	四四	住田健太郎
五位山	昭和三年十二月	二〇	鈴木與三太郎
西五位	大正十五年七月	八九	地崎覺次郎
赤丸	大正十五年七月	三一	中川幸作
石堤	昭和二年五月	二〇	作島清智
西廣谷	昭和二年五月	四〇	山内重藏
立野	大正十五年七月	六四	神代富太郎
山王	大正十五年八月	四五	神尾兵藏
大瀧	大正十五年八月	八五	野原勇太郎
福岡	大正十五年七月	二五	菊地常年
戸出	大正十五年六月	一二九	川瀬善作
是戸	昭和四年三月	六五	有澤外吉
高波	大正十五年六月	七二	矢木景平
醍醐	昭和二年一月	五八	塚島純一
小勢	大正十五年六月	一九	林有恒

◇福光警察署管下

隊名	組織年月	組員	現在指揮者
吉江	大正十五年十月	一〇〇	加藤正治
東石黒	昭和二年二月	七五	原田清太郎
石黒	大正十五年十二月	四一	渡邊宗太郎
南蟹谷	大正十五年十二月	一二五	村上孝道
廣瀬館	大正十五年十二月	三四	渡邊萬太郎
東太美	昭和二年四月	八四	古館正孝
西太美	昭和二年二月	七〇	窪田實
西野尻	昭和三年十一月	六四	竹部作太郎

すり板に

春夢破れてお前さん

火事よ火事だよ

火事ですよ

公設消防組一覽表　最近十年間　富山縣

	組數	部數	組頭	定小頭	消防手	員計	喞腕用	蒸汽	筒瓦斯倫	市町村數	消防設置町村數	未設置町村數
大正九年	八九	九一	八九	三四七	五、三〇七	五、七四三	一六一	三七	△ 一二	二七〇	八九	一八一
同　十年	九八	一一三	九八	三七五	五、六二八	六、一一〇	一七四	三六	△ 二七	二七〇	九八	一七一
同十一年	一二七	一八四	一二七	四七九	七、一九二	七、七九八	二二六	四一	△ 三九	二七〇	一二七	一四三
同十二年	一五三	九九	一五三	五八九	八、六七六	九、四一八	一五五	四一	△ 五一〇	二七〇	一五三	一一七
同十三年	一七〇	一一三	一七〇	六五〇	九、五八八	一〇、四〇八	二九一	四一	△ 六一七	二七〇	一七〇	一〇〇
同十四年	一九六	一三五	一九六	七五三	一一、〇九〇	一二、〇三九	三三七	四一	△ 二三一	二六九	一九五	七四
昭和元年	二一三	一四一	二一三	八二九	一二、一二三	一三、一六五	三六四	四一	△ 二九三	二六八	二一二	五六
同　二年	二一七	一六三	二一七	八五〇	一三、四五一	一三、五一八	三七六	三八	△ 二一七六四	二六七	二一八	五一

同　三年	二二六	一七〇	二二六	八八六	一二、八九五	一四、〇〇七	三九一	三九	△ 二〇八〇	二六五	二二四	四一
同　四年	二二六	一七〇	二二六	八九五	一二、九五九	一四、〇八〇	三九一	三九	△ 二三九一	二六五	二二四	四一

（表中×……オートバイ喞筒　△……消防自動車）

最近十ケ年間ニ於ケル火災原因調査表　富山縣

原因	大正九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	昭和元年	同二年	同三年	同四年	平均
炬燵	三五	三八	二〇	一八	三〇	二二	三四	三六	二〇	二三	二七
取灰	七八	四一	五五	三九	四九	五二	三〇	二五	三三	二一	四二
焚火	三五	三八	三三	三六	四六	三九	四三	二七	四〇	二四	三七
竈	八	六	九	六	六	五	五	一四	三	七	七
乾燥室	—	一	三	四	一	四	三	二	五	—	二
洋燈	五	二	二	二	—	二	一	—	—	三	一、六
飛火	一	一	六	四	—	三	—	—	—	—	一、八
弄火	一八	一八	一六	一二	一三	一七	二〇	一七	一五	八	一六
野火	—	—	四	二	三	—	五	二	—	—	一、六
燐寸	—	—	—	—	—	—	—	—	二	—	〇、二
吸殼	六	五	八	七	一二	一二	一八	一〇	一六	一三	一一

原因	大正九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	平均
行火	一	一	一	四	一	一	一、七
煙火	一	一	一	一	七	一	二、〇
煙突	一六	一四	一二	一七	一	一	二、〇
摩擦	一	一	一	一	一	一	一、六
石灰	五	二	四	六	一	一	一、六
爐	四	七	五	二	一	一	一、六
火消壺	一	二	三	二	一	一	一、六
蠟燭火	一	一	五	七	二	一	一、六
雷火	一	一	一	四	二	一	一、六
漏電	一	二	三	三	一	一	一、六
蚊遣火	一	二	九	一	五	一	一、六
火鉢	五	五	二	一	一	一	一、六
燈火	四	五	一	一	一	一	一、六
石油	一	一	一	一	一	一	一、六
浴場	一	一	一	一	一	一	一、六
引火	一	一	一	一	一	一	一、六
提灯火	一	一	一	一	一	一	一、六
爆火	一	一	一	一	一	一	一、六
放火	一	一	一	一	一	一	一、六
不審火	一	一	一	一	一	一	一、六
其他	二五	六	一六	一	一	一	一、六
合計	二四七	二三	二三	二〇〇	二三	二一	二〇、〇

最近十年間火災月別表

富山縣

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
大正九年	一八	一九	三一	一九	一六	一七	一二	一九	一二	一三	一九	二一	二〇三
同十年	一五	一五	二三	一四	一三	一四	一三	一四	一四	一九	一四	一三	二〇五
同十一年	二一	一五	一九	一三	一九	一七	一八	一六	一五	一五	一九	一九	二一三
同十二年	一六	一八	一八	一一	一八	一四	一一	一三	一五	一三	一五	一三	二〇〇
同十三年	一四	一七	一五	一七	一一	一四	一四	一三	一六	一二	一七	一九	二〇八
同十四年	一四	一三	一三	一八	一三	一三	一三	一七	一三	一三	一三	一八	二〇〇
昭和元年	一四	一三	一七	一四	一四	一八	一七	一八	一七	一五	一九	一三	二〇八
同二年	一五	一五	一七	一五	一五	一七	一五	一五	一五	一四	一五	一五	二〇〇
同三年	一七	一八	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	二〇〇
同四年	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	二〇〇
合計	一九二	二〇三	二一四	二一三	一九九	一九六	一六九	一七五	一六五	一六〇	一六五	一六〇	二〇〇〇
平均	一九	二〇	二一	二一	一九	一九	一六	一七	一六	一六	一六	一六	二〇〇

昭和四年中ニ於ケル火災調査表

富山縣

月別	火災度數	同上內直ニ消止度數	燒失棟數 住屋	燒失棟數 非住屋	損害額
一月	二〇	四	八	九	二四、七二三
二月	二四	六	一四	七	三〇、七三四
三月	三三	一一	二四	一二	二〇、二二一
四月	二七	四	一四	四	三六、二七四
五月	一一	一一	三	五	一、六一八
六月	二〇	四	一四	五	三五、四三八
七月	一四	一	六	七	八、一七四
八月	一〇	二	一	三	一〇、九四〇
九月	一四	六	一二	一	一三、七三九
十月	一五	四	一一	一〇	四八、〇二〇
十一月	一一	六	四	三	三一、九九〇
十二月	二五	九	八	九	二二、〇五三
合計	二二四	六九	一一九	七五	二八三、九二三
平均	一八	五	九	六	二三、六六〇

消防歌

一。
驚破鐘が鳴る風疾し
伊達には持たぬ意氣の男伊達。

二。
御大心をひとすぢに
纏のかげに緋櫻の
しかと織く猫頭巾

三。
纏のほまれ袢纏の
男冥利のこのからだ
花にちるべき命かな。

四。
振り込め振り込め大纏
氣負ひの馬簾凛よく
襟のしるしを神かけて
すてて世の爲人の爲。
紅蓮の猛火空を燒く
意氣を命の男伊達。
焦熱地獄の底までも
渦巻き渦巻く心よさ。

昭和五年八月十八日印刷
昭和五年八月廿三日發行

非賣品

富山縣消防義會

印刷者　富山市總曲輪四八四　寺田仙之助
印刷所　富山市總曲輪四八四　富山タイムス社印刷部

富山縣衛生展覽會

非賣品

581
208